
サツキとダンの新しい世界

現地 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サツキとダンの新しい世界

【Nコード】

N6396L

【作者名】

現地 晶

【あらすじ】

異世界トリップした先でお金持ちに拾われ、幸せに暮らす女の子「サツキ」。

生真面目で不器用、スイーツが大好きな隣人「ダン」。

そんな二人のちょっとズレてる（！）ほのぼの恋愛物語。続編は多少の流血描写あり。

同人ゲーム版では「原作・久田佳絵」となっていますが同一人物です。

第1話サツキ編

楽勝！異世界トリップ

大きなお屋敷の大きな庭。
なんと噴水まである。

私はその庭で、まったり紅茶を飲んでいる。

ああ、幸せ。

私の名は、五月^{サツキ}。
十七歳。

ここはトーラ王国のカタヤ家。

ほんのちよつと前まで日本の女子高生だった私だけど、どうやら異世界トリップしてしまつたみたい。

でもこれが、とにかく幸せなのだ。

小説のように伝説の巫女だと言われる事も、勇者と言われてモンスターと戦う事も、王様との強制結婚もない。

し・か・も。

こんなお金持ちに拾われて、本当に私つてば運がいい。

養父母は優しいじいちゃんばあちゃんだし、言葉だつて完璧マスタ―。

日本にいる時は、英語さえまつたく理解出来てなかったのにだよ。異世界語がペラペラになるなんて、人間やる気になれば出来るもんだね。

異世界トリップ、意外と楽勝。

紅茶をもう一口飲んで、ホッと息を吐く。

今日はいい天気だなあ。

青い空、白い雲。

ヒラヒラと飛ぶ布……。

ん！？ 布！？

あらら。洗濯物が飛んで行ってるよ。

あれ、うちのだよな？

「マーチー！」

メイドのマチルダを大声で呼んだけど、聞こえていないみたい。仕方ない。私が追い掛けてやるか。

立ち上がり、長いドレスの裾を持ち上げて走る。

待てーっ！！

しかし、なかなか追い付けない。

ありゃ、うちの敷地を出ちゃった。

生け垣を掻き分け進む。

あ……、ドレス破けた。ごめんなさい。

気を取り直して更に追い掛けると、布は隣家に飛んで行く。

う……。どうしよう。

お隣さんって、会ったこと無いんだよね。

なんか仕事が忙しいらしくって、いつも留守だし。

通いの使用人さんがいるみたいだけど、たまにしか来ないしね。

うーん。

……不法侵入になるけど洗濯物回収するだけだし、ちょっとくらいいいよね。

ちびな私の身長と変わらないくらいの低い塀に手をかけ、よじ登る。

よいしょ、よいしょ。

よし、後は降りるだけ……って、え！？

「……………」

お、男の人がいる。

隣人さん……？

男は大きな体を小さく丸め、椅子にちよこんと座っている。

もの凄く真剣な表情で左手に鏡を持ち、右手で頬を上げ下げしているけど、何やってんの？ 変な人。

あ！ 布が男の目の前に落ちた。

男が布に気付いて鏡をテーブルに置いた。

布を手にしてキョロキョロ……って、目が合った。

とっても驚いている。

そりゃそうだよね……。

私は出来るだけ事態を穏便に解決させる為、笑顔を作った。

「こんにちは。私、サツキって言います。怪しい者では無いんです
！」

ニッコリ笑って、お隣さんの庭に飛び降りた。

第1話タン編

隊長からの課題

鏡で自分の顔を見る。

……はあ。

思わず溜息が漏れてしまう。

外に出れば少しは気分が変わるかと思っただ、駄目だ。

俺はダン。騎士をしている。

王子の他国訪問に護衛として付いて行っていたので、屋敷に帰るのは一月振りだ。

やっとゆっくり寛げると思っていたのに、俺は今、難しい問題を抱えている。

自分で言うのも何だが、俺は剣の腕前はいい。仕事も真面目にこなしている。

なのに……、昨日隊長に怒られた。仕事だけを真面目にやればいいというものではない、と。

笑顔が無いのが駄目らしい。

仕事に笑顔など、必要無いだろう？

他の騎士ともっと仲良くしろと言われても……、別に普通に接しただけなのだが。

何かなんだかさっぱり分からない。

取り敢えず笑顔を練習してこいと言われたが……。

はあ……。これが難しい。

思えば子供の頃から『笑わない子』とよく言われた。

双子の妹は愛想も要領もいいのに、何故こつも違うのだ、と。

そんな事言われても、俺には分からない。普通にしているだけなのに。

はあ……。

溜息ばかり出る。

もう一度鏡に向かい、笑顔の練習をしてみた。

頬をもっと上げればいいのだろうか？

右手でグツと上げてみるが……、笑顔にはならない。

投げ遣りな気持ちになった時。

「……………？」

目の前に布が落ちてきた。白くて少し大きめの布だ。

おそらく何処かの屋敷の洗濯物が飛んで来たのだろう。

俺はその布を拾い、辺りを見回した。いったいどの屋敷のものなのだろう？

すると……。

「……………」

塀の上に女が居る！？

いつの間に……、笑顔の練習に集中していて気付かなかった。騎士

士だというのに、何たる失態。

いや、それよりあんなところで、いったい何をやっているのか。

身なりがよいので泥棒には見えないが、髪には葉が付きドレスの裾が少々破れているのが何とも怪しい。

啞然とする俺に、女はへらへらと笑う。

「こにーちーわー。わたーし、サツキ言うつか？ 怪しいと違うねー

！」

……………何だ？ この変な女は。

やっぱりお隣さんかな？ 使用人っぽく無いし。

立ち上がった男は、すごく背が高い。

もしかしたら二メートルくらいあるかも。

私はチビだから見上げなきゃいけない。

首が疲れちゃうよ……。

うわっ！ 腕も太い。

体、超マツチヨだよ。

年齢は二十代半ばくらいかな？

瞳は紫。すごく綺麗。

髪の色は赤。真つ赤っていうんじゃなくて、黒と赤が混ざってる

感じの短髪。

あ、そうだそうだ。

「うちの洗濯物が飛んじやったみたいで……。すみません」

私は軽く頭を下げて、大男から布を返してもらった。

「私、サツキです。隣の屋敷に住んでいます」

「隣……？ カタヤに？ 親戚か？」

違う違う。

首を振って否定した。

「娘です。日本という国から来て、拾われたんです」

「拾われた!？」

大男は驚いている。

まあ、普通は人間拾う事なんて無いもんね。

「あなたは？」

「あ、ああ。俺はダン。この屋敷は俺の物だ」

あー。やっぱりお隣さんだった。

「お隣さんですね。宜しくお願ひします」

「あ、ああ」

私が手を差し出すと、ダンも慌てて手を出す。

はい。握手握手。

凄く大きくてゴツゴツして硬いなあ。

「ところで、さっき何やってたんですか？ 鏡見て」

「え……！？」

「頬を上下させて、顔の、えーと、美しくなる運動みたいなの」

美容マツサージって、こっちでは何て言うんだっけ？

美しくなる運動で通じるかなあ。

ダンはちよつと視線を逸らして頷いた。

「ああ、まあ、その通りだ」

えー！ 本当にマツサージしてたの！？

へー。驚きだ。

こんなごつい男が外見気にしてるの？

ちよつと笑える。

思わずプツと吹き出すと、ダンが軽く睨んできた。

「あ……。ごめんなさい」

私は持っていた布をテーブルに置いて、顔を両手で挟んだ。

「私もやるよ。美しくなる運動。ほら、上、下、回して回して、ね」

ニツコリ笑うとダンが目を見開いていた。

ん？ トーラと日本ではマツサージのやり方が違うのかな？

「じゃあ、教えてあげる。一緒にやるう。顎先から回しながら上に

ほら、早く」

動かないダンの腕をポンポンと叩き促すと、眉を寄せながらも真

似してやりだした。

そうして暫く二人で顔のマツサージをやっていると、うちの方が

ら私を呼ぶ声が聞こえた。

「サツキ様ーっ！！」

マチルダの声だ。

あ、そうか。

黙って居なくなったから、心配して捜してるんだ。

「はい!!!」

私は大きな声で返事して、テーブルに置いていた布を持った。

「ごめんなさい、帰らなきゃ。さようなら」

軽く頭を下げて扉に向かう私をダンが呼び止める。

「サツキ」

え？ 何？

ダンが指差す先を見ると、あ、門だ。

あそこから出るってことか。

確かに、門があるのにわざわざ扉を乗り越える必要は無いよね。

私はもう一度ダンに頭を下げて、門に向かって駆けた。

女は塀から飛び降り、こちらに向かって来た。

背は小さく体は華奢で、ちよつと力を込めて叩けば骨が折れてしまいそうだ。

黒い髪は肩に付く程度の長さしかない。

こんな短い髪の女性はトーラでは珍しい。

女は俺に両手を伸ばして言った。

「洗濯、我が家は飛ぶ。ごめーんねー」

……おそらく、『この洗濯物は、私の屋敷から飛んで行った』と言いたいのだろう。

俺が布を渡すと、女は頭を下げた。

「わたーし、サツキ。隣、屋敷、住む」

「隣……？ カタヤに？ 親戚か？」

女、『サツキ』だったな、は、首を振る。

「娘ね。ニホン言う国から来た、捕まった」

「捕まった!？」

「どういう事だ？」

『ニホン』と言う国は知らないが、そこから来て捕まる……。

密入国で逮捕されたという事か。

それでカタヤに保護され、気に入られて養女になった……のか？
異国の者だから、トーラ語が下手なのだな。

「あなーた、どなた？」

「あ、ああ。俺はダン。この屋敷の者だ」

何だかサツキの事情はよく分からないが、訊かれたので取り敢えず名乗った。

「隣ね。宜しく願いまーす」

サツキが手を差し出したので、俺は慌ててそれを握った。

小さく柔らかかな手は、ギュツと握ると骨が碎けてしまいそうで怖

かった。

「そこで、ちょっと前、鏡、何やってた？」

「え……！？」

「頬、上、下する。顔の、んー、美しい動き似てる」
う……。

『美しい動き』が何かは分からないが、笑顔の練習をしていたな
どと知られたくない。

俺は視線を逸らして頷いた。

「ああ、まあ、そんなようなものだ」

するとサツキは驚いた顔をして、更にブハツと吹き出して笑った。
何だ？

何がそんなにおかしいのだろう。

眉を寄せる俺に、サツキは謝った。

「あ……。ごめんねー」

サツキは布をテーブルに置き、顔を両手で挟んだ。

「わたりし、やる。美しい動き。ほら、上、下、回す、回す、ねー」

「！」

サツキがへらへら笑う。

……もしかすると、馬鹿にされているのか？

会ったばかりの女に……。

衝撃的な出来事だ。

「教えてやる。一緒にやる。顎の回す、上に。ほら、早く」

サツキが俺の腕をポンポンと叩く。

一緒にやれって？

はあ……。仕方ない。

サツキの真似をして手を動かす。

そうして暫く二人で顔を擦っていると、カタヤの屋敷からサツキ
を呼ぶ声が聞こえた。

「サツキ様ーっ！！」

使用人がサツキを捜しているようだ。

「はい!!!」

サツキは大きな声で返事をして、テーブルに置いていた布を持った。

「ごめんねー。帰る。さよならー」

そして軽く頭を下げ、扉に向かう。

ちよつと待て。

何故また扉を乗り越えて帰るのだ？

「サツキ」

呼び止めると、キョトンとした顔で振り向いた。

俺は黙って門を指差す。

あそこから出てくれ。

どうやら俺の思いは通じたようで、サツキはもう一度頭を下げ、門に向かって駆けた。

はぁ……。なんだか疲れた。

トントントントン。

お父様の肩を叩く。

「ああ、気持ちいいよ。ありがとうサツキ」

何度も感謝の言葉を口にするお父様と、私達を穏やかに微笑みながら見るお母様。

お父様は銀の髪、お母様は金の髪。

金銀なんておめでたいよね。

たぶん二人共七十代だと思っただけど、髪はフサフサしているしとっても元気。

そしてお父様もお母様も、ホントにちょっとした事で凄く喜んで可愛がってくれる。

うん。私もお父様お母様大好き。

血の繋がりがりって、あまり関係無いんだな！

トントントントン。

調子よく叩いていると、ノックの音がしてメイドのマチルダが現れた。

マチルダは茶色の髪を綺麗に編み込んだ二十代後半くらいのお姉さん。

この屋敷にはメイドはマチルダしかいないんだけど、これがまた良く働くんだよ！

いつ休んでいるのかなって凄く不思議。

「失礼します。サツキ様」

「ん？ 何？」

振り向いた私に、マチルダは言った。

「お客様です」

え？ 私に？

この世界に来て間もない私に知り合いなんていないよ？
首を傾げる私にマチルダはニコニコと笑う。

「ワーガル様がおみえになっっていますよ」

……え？

私は益々首を傾げる。

「ワーガル？ 誰？」

「まあ、ダンが？ サツキに？」

私の声とお母様の声が重なった。

え？ ダン？ 隣の美容マツサージ男？

じゃあ『ワーガル』って、ダンの苗字か。

「いつ知り合っただい？」

お父様が驚いている。

「何日前に、会ったの」

それだけ言うと、マチルダが急かすので客間へ行った。

部屋に入るとダンが立ち上がり会釈してきた。

私も会釈をする。ソファーに座るとダンも座った。

ダンは何故か怖い顔をして私を睨み付けている。

怒らせるような事したっけ？

ちよっとビビりながら訊いてみる。

「あの、私に何かご用ですか？」

するとダンは、何故か視線を逸らした。

「その、小さな相談がある」

「相談？」

「たった一度会っただけの私に？」

「ダンは頷いて、私の目を真っ直ぐ見つめた。」

「俺は騎士だが、……その長が、俺にお笑いをやれと言っただ。明日試しに見せなければならぬのだが、どんなものをやればいいのか分からない。あなたなら、何かよいお笑いを知っていると思うの」

だ。恥ずかしいものを教えてもらいたい」

「……え？」

そんな事言われても……っていうか、何故私に訊く？

友達どころか知り合いと言う関係ですら無いような気がするのですが。

いきなり来てお笑い芸教えろって、……宴会でもあるのかな。

それも『恥ずかしいもの』って凄いい条件。

もしや、今までの宴会でめばしい芸はやり尽くしたけど、長……上司だよ、に『ダン、面白いのやれよ！』とか無茶ぶりされたから、私に日本のお笑い芸を教えて欲しいという事なのかな！。

うーん……。

まあ事情はよく分からないけど真剣な感じだし、私を頼って来たのだから何かよい芸を教えてあげたいな。

ダンを見てみる。

体力はありそうだから、走ったり跳んだりするものがないかなあ。そこでふと、ダンが腰に下げている剣が目についた。

あ！ そうだ、あれがいいかも！

「二ホンのお笑い芸人がやる、棒におでこ付けて十回まわって走る、えーと、伝統芸？ グルグルバット！ 結構笑えるよ」

「グルグルバット……？」

首を傾げるダンに、私は笑顔で頷いた。

「ちよつと、その剣貸して」

私が手を伸ばすと、ダンが驚いた顔で剣をしっかりと掴んだ。ケチ

男！

「ちよつとだけだよ」

催促するように掌をダンに見せて振ると、渋々と言った感じで剣を鞘ごと渡してくれた。

うわ！ 重たい！

よろけた私をダンが支える。

「ありがとう」

お礼を言つと、ダンは真つ赤になつた。なんでだろう？

そして丁度その時、紅茶を運んで来たマチルダが私を見て一瞬目を見開き、そして微笑んだ。

うん、大丈夫。怪我は無いよ。

「じゃあ、やってみるからね」

その剣をバットに見立てて実演してみせる。

いち、にーい、と二回だけまわつて剣を置いて走る。

「本当は十回まわるんだよ。分かった？」

私が訊くと、ダンは神妙な面持ちで頷いた。

「分かった。帰つて屋敷でやる」

自己練習？ グルグルバットを？

宴会芸一つに、もの凄く気合いが入ってるよね。

もしかして一番面白い人には賞金が出るのかな。

「頑張つてね」

「ありがとう」

ダンはお礼を言つて帰つて行つた。

みんな、笑つてくれるといいね。

頑張れー！

第3話タン編

異国の神聖な儀式

ウロウロウロウロ。

俺は今、隣のカタヤ家の前に居る。

用があるのだから入れればいいのだが、これがなかなかいざとなると決心が揺らぐというか、とにかく門の前を何往復もしてしまっている。

ウロウロウロウロ。

まるで不審者のようにうろつきながらカタヤの屋敷を見ていると、使用人が出て来た。たしかマチルダだったな。

マチルダは足早に俺の方に向かって来る。

「まあ、ワーガル様。お久し振りです。どうされたのですか？ 先程から何度も通り過ぎているようですが」

う…………。

見られていたのか。

「いや、その、ちょっと会いたいのだが」

「旦那様にですか？」

「いや…………、サツキに…………」

俺がそう言うと、マチルダは目を見開いた。

「え…………！ あ、まあ、まあまあ、そうでございますか。どうぞいちらへ」

マチルダの案内で客間に行く。

この部屋に入るのも久し振りだ。

昔は母に連れられて、よく遊びに来ていたな。

当時と変わらぬ部屋の中を懐かしさと共に見ているとサツキが来た。

立ち上がり少し頭を下げると、サツキも同じよう頭を下げながらソファアに座った。

俺も座る。

とても緊張するが、ここまで来たのだから腹を括ろつ。そう決意していると、サツキが上目遣いで訊いてきた。

「わたくし、何用かー？」

俺は頷く、が、サツキの上目遣いが何となく気恥ずかしくて視線を逸らした。

「その、少々相談があるのだが」

「相談？」

俺はもう一度頷き、気合いを入れてサツキの目をしっかりと見つめた。

「俺は騎士なのだが、……隊長が俺に笑えと言うのだ。明日試験すると言われてしまったのだが、どうすればよいのか分からない。あなたなら笑顔のコツを知っていると思うのだ。恥ずかしながら、教えてもらいたい」

「……え？」

いきなりこんな相談をされ驚くのも無理は無い。

俺だつて頑張つて、笑顔の練習をしていたのだ。

しかし今日、何故か隊長は激怒した。

その上『明日試験する』と言われてしまったのだ。

もう俺に打つ手は無いと絶望的な気持ちになった時、サツキの事を思い出したのだ。

あれだけヘラヘラ笑えるのだから、きっと何かコツを知っている筈だ、と。

背に腹はかえられない。

俺は恥を忍んでサツキに教えを請う決心をした。

そのサツキは今、眉を寄せて俺をじつと見ている。

唸りながら上から下へ視線を移す。そしてパツと明るい表情になった。

何かよい方法でも思いついたのだろうか？

俺は期待しながらサツキの言葉を待った。

「ニホンの笑いゲイニンにやる、棒に頭で十回まわり走る、んーと、神聖な儀式、グルグルバット。沢山笑いが出来る」

「グルグルバット……？」

儀式？

コツを教えてもらいたかったのだが、どついう事だ？

……もしかして、その『グルグルバット』と言う儀式をやる事により、確実に笑えるようになるのだろうか。

そうか成る程、『ゲイニン』とは神の名だな？

俺の問うような視線にサツキは笑顔で頷く。

「ちよつと、剣貸す」

サツキが俺の剣に手を伸ばす。

え！？

俺は驚いて剣をしっかり握った。

剣を何に使おうというのか。

こんな華奢な体で剣など扱える訳が無い。非常に危険だ。

「ちよつとよー」

サツキは不機嫌な顔で激しく手を振る。

うーん……。

機嫌を損ね、教えてもらえなくなったら困る。

仕方なく鞘ごとそつとサツキの手に載せた。

すると、サツキはよろめき倒れそうになった。

しまった！ サツキにはこの剣は重過ぎるのだ！

咄嗟に手を伸ばして体を支えると、サツキは笑顔で振り向いた。

「ありがーとね」

………！！

か、顔が近い……。

それに、この体勢はまるで俺がサツキを抱きしめているようではないか。

助ける為とはいえサツキに失礼な事をしてしまった。
丁度お茶を運んで来たマチルダも目を見開いている。
申し訳ない……。事故なのだ……。
鞘の先を床に付けてサツキの体から手を離すとマチルダが微笑んだ。

二人共、怒ってはいないようだな……。

「じゃあ、やる。見ておけ」

実際にやって見せてくれるようだ。

サツキは柄に両手を重ねて置き、そこに額を付けてまわり始めた。
ふむ。神への祈り、だな。

二回まわって剣を置き、両手を広げて走る。

これはおそらく心の解放を意味しているのだろう。

「十回まわる、本当。分かったかー？」

うむ。理解した。

「分かった。屋敷に帰ったらやってみよう」

これで明日は笑う事が出来るだろう。

「頑張るねー」

「ありがとう」

突然の相談にも親身になってくれるサツキは優しい人だ。

初めて会った時、『変な女』だと思ったのは失礼だったな。

反省しながら俺は自分の屋敷へと戻った。

「……なんと言うか、もう元気だしなよ」
ものすごーく沈んだ顔で肩を落としているダンが、目の前に座っている。

わざわざグルグルバツトの結果報告をしに来てくれたのだけど……

「ごめん……。折角教えてもらったのに……」
どうやらウケなかつたらしい。

笑いのツボが、日本人とトーラ人では違うのかな？
残念だったね、ダン。はりきって練習までしたのに。
でも、そこまで落ち込まなくてもいいんじゃないの？
教えたこつちが罪悪感抱いちゃうよ、ウジウジ男め！
デカイ図体してるくせに、しっかりしてよ！

ほんのちょーっとだけ私が苛ついた時、マチルダがワゴンを押しながら部屋に入ってきた。

「ちょうど今、焼けました。ワーガル様もどうぞ」
テーブルに並べられるケーキや焼き菓子。
うーん！ 今日美味しそう。

イライラもぶっ飛んじゃったよ。

カタヤの料理人が作るケーキはメチャクチャ美味しいのだ。
日本に居た時はケーキとかの甘い物があまり好きでは無かったんだけど、トーラに来てからは、すっかり好きになった。

つつい二個も三個も食べてしまうので太らないかちょっと心配。
「いただきます」

フォークを手にとって、どれにしようかなーって迷っていると……

「え……！？」

な、なにこれ？

大きな手が次々に皿を攫っていく!?
いや、別にダジャレって訳じゃないよ。

ダンが猛烈な勢いで、ケーキや焼き菓子を次々に口に入れているのだ。

なんともう既に、ほぼ完食状態。

「……………」

な、なんか、昔テレビで観た霊に取り憑かれた人が生肉食べてる映像に似てる。

「キモ……………」

思わず呟いた時、ダンの動きがピタリと止まった。

焼き菓子をくわえたまま、ゆっくりと顔を上げる。

目が合った瞬間ダンは真っ赤になって、くわえていた菓子をテーブルの上にポトリと落とした。

「……………」

「……………」

気まずい空気の中、まだ傍に居たマチルダが、「あー！ケーキのおかわり持って来ます！」と言いながらワゴンを押して部屋を出て行った。

逃げたな……………!

どうすりゃいいの、この雰囲気。

取り敢えず、ダンの口から落ちた焼き菓子を拾い渡してみる。

「あ、ありがとう」

で、その焼き菓子をダンには口に入れた。

この状況で、まだ食べるんだ……………。

「お菓子、好きなの？」

私が訊くと、ダンは俯いて小さな声でポツリと言った。

「昔……………、母が何度か作ってくれた」

「昔?」

そういえば、ダンって一人暮らしだよな。

「ダンはお父さんとお母さん居ないの？」
ダンが頷く。

「両親は×××に憧れて、古い使用人を連れて旅に出ってしまった」
……え？

「何？ 何処に？」

よく分からなかったので訊くと、ダンはゆっくりとした口調で詳しく教えてくれた。

「店も無い、人も居ない場所。食べ物は自分達で作るか木の実を採る。動物が沢山居る」

店も人も無くて、でも木と動物は居る？

え？ 何それ。

頭の中で想像してみる。

うーん……。

木が茂って動物が居る辺鄙な場所 っ、それはジャングルってやつ？

まさかねえ……。

「大きな動物に襲われて、戦ったりする……？」
よくそついうところで芸人が巨大蛇と戦っていたりするけど。

「それは、時にはある」

うわぁ。本当に？

それってやつば、ジャングル……しかないよね。

でもジャングルに旅立つ、しかも使用人連れてって、探検隊？

「嘘お……」

「本当だ」

えー……。本当に？ どんだけワイルドな両親なの？

もしかしてご両親も、ダンみたいにムキムキマツチョなのかな？
いやもう、凄い話だね。

「俺は……、大好きなのだ、甘いお菓子が。でも今は、作ってくれる人が居ない」

うーん。そうなんだ。

「買いに行かないの？」

ケーキ屋さんとか、トーラにだってあるんじゃない？

「……恥ずかしい」

なんでだろ？

別に男の人がケーキ買っても食べてもいいと思うけどな。

首を傾げつつ、なんとなくドアの方に視線を向けると……。

「……！」

マチルダがドアの隙間から、中の様子をじっと見ていた。

え？　なんで？　ちよつと怖いよその視線！

家政婦が色々見ちゃうドラマみたい……！

マチルダは私と目が合うと、まるで何事も無かったかのようにワゴンを押して部屋に入って来た。

「おかわり持つて来ました」

そして笑顔で次々と皿を並べていく。

……マチルダっていい人なんだけど、時々変なんだよね。まあ害は無いからいいんだけど。

さて、食べよ。

手前に置かれた皿を手に取り、ケーキを一口食べる。

「美味しー！」

幸せー！！

続けて食べようとフォークを刺したのだが、何故かマチルダが私の腕をツンツンと突いてくる。

え？　なに？

マチルダが目配せするので正面を向いてみる。

「…………」

ダンが、おあずけされた犬のように私の食べかけのケーキをじっと見ていた。

「……もしかして、これが食べたいの？」

私が訊くと、ダンはハツとして視線を彷徨わせた。

はいはい。分かりました。

「あげる」

皿を差し出すと、ダンはずっと迷いながらもそれを受け取った。

「ありがとう」

そして三口で平らげる。

折角あげたんだから、もっと味わって食べなよ。

「ゆっくり食べていいんだよ。沢山あるんだから」

「う……、うむ」

ダンは頷いて、別のケーキをまた三口で食べた。

聞きなよ、人の話！

まったく、親の顔が見てみたいよ。

って、あーそうか。ジャングルを探検中で居ないんだったね。

きつと今頃、大蛇や熊やライオンみたいなやつと戦ってるんだろ
うなー。

ボーっとダンを見ながら想像していたら、あ、しまった。ケーキ
全部食べられてしまった。

ちよつとは遠慮しないか？ 普通。

しかもまだ物欲しそうに皿を見ている。

仕方ないなあ。

「またいつでも食べに来ていいよ」

「……………!!」

私の言葉にダンが目を見開く。

「あ、ありがとう!!」

「……………」

声、大きすぎ。

耳がキーンってなったよ。

もうホント、ちゃんと息子の躰してからジャングルに行きなよ、

ダンの両親!!

頑張った。頑張ったのだ。

だがしかし……、駄目だった。

その事を伝えると、サツキは慰めてくれた。

「何言うかー。元気だす、もー！」

「すまない……。折角教えてくれたのに……」

サツキに教わった儀式をやり試験に臨んだが、何故か隊長は溜息を吐いて『もういい』と去って行った。

どうしてこうなってしまったのか……。

やはり、儀式を上手くやれなかったのが原因か。

あのグルグルバット、走るのが難しかったのだ。

あれは修行を積んだ神官でないと、出来ないのかもしれないな。

はあ……。

思わず溜息を吐いた時、ノックの音がしてマチルダがワゴンを押しながら部屋に入って来た。

「ちょうど今、焼けたのですよ。ワーガル様もどうぞ」

……！！

テーブルに並べられるケーキや焼き菓子。

あ、甘いお菓子……！！

俺の目は限界まで見開かれ、体は歓喜に震えた。

なんて美味しそうなんだ。

実は俺は、甘いお菓子が大好物なのだ。

しかし、ちょっとした訳があつて、ここ数年食べていない。

欲しくて欲しくて、でも手に入らなかった物が目の前にある。

俺は溢れる唾液をゴクリと飲んだ。

甘い匂いが俺を誘う……！！

「キモ……」

……え？

サツキの呟きで我に返る。

俺は今、何をしていた？

口内に広がる甘い幸せ。

握りしめたフォークと皿。

……答えは一つしかない。

サツキの言った言葉の意味は分からないが、あきらかに嫌悪感が含まれていた。

ゆつくりと顔を上げると、侮蔑の籠もった瞳が俺を見つめていた。

ボトリと俺の口から何かが落ちる。

見るとそれは焼き菓子だった。

「……………」

「……………」

気まずい空気の中、まだ傍に居たマチルダが「あー！ケーキのかわり持って来ます！」と言いながらワゴンを押して部屋を出て行った。

おかわり……、なんて魅惑的な言葉。

だがしかし、今はこの気まずい空気を何とかしなくてはならない。そう思っていると、サツキが俺の口から落ちた焼き菓子を拾ってくれた。

「あ、ありがとう」

口に入れると、菓子は舌の上でとろけた。

ここまで美味しい菓子は初めてだ。

カタヤの料理人は相当な腕の持ち主のようだな。

「菓子の好きかー？」

う……………」

いい歳した男が甘い物が好きなんて、恥ずかしい。

「昔は…………、母がよく作ってくれた」

「昔？」

サツキが首を傾げる。

「ダン、おとさま、おかさま、無い？」

ああ。この王都には。

「両親は田舎暮らしに慣れて、古くから仕えてくれていた使用人達を引き連れ引越してしまっただけだ」

王都から遠く離れた、とんでもない田舎に行ってしまったのだ。

両親から引越しの計画を打ち明けられた時は、冗談かと思った。便利な王都から不便な田舎に、しかも使用人を全員引き連れて何故行くのかと。

おかげで生活には困らないが、甘い菓子に飢えてしまったではないか。

心の中で少々両親に怒っていると、何故かサツキは眉を寄せ、今度は反対側に首を傾げた。

「何？ 何処かー？」

ああ、成る程。『田舎』が分からないのか。

どう言えば分かってもらえるか考えながら、俺は説明した。

「店も無く人もあまり居ない場所だ。食べ物自分達で作るか木の実を採る。動物も沢山飼っている」

するとサツキは「うーん」と唸り暫く考えて、軽く頷いた。

『田舎』が何か分かったようだ。

「大きい、動物、ドンってする、戦う……？」

サツキは右手を開いたり閉じたりしながら、そのまま左手を勢よく包み込んだ。

どうやら動物同士の喧嘩を表しているようだ。

「そういう事も、時々はあるだろう」

「嘘ねー……」

あまり動物を見た事が無いのか？

「本当だ」

サツキは驚いて目を大きく開いたが、納得したのか何度もうんうんと頷いた。

「俺は……、甘いお菓子が大好物なのだ。だが今は作ってくれん人が居ない」

「食事は大抵城の食堂で食べているのだが、あそこは菓子など出ない。」

「買いに行くか？」

「いや、それは……。」

「恥ずかしい……。」

「本当は一度だけ、どうしても我慢出来なくてケーキを買いに行った事があるのだ。」

「だがその時、沢山注文する俺に小さな女の子が笑って言ったのだ。」

『おじちゃん、それ全部食べるの？すごいねー』と。

「周りの人々がクスクスと笑う声が聞こえて、もう俺は恥ずかしくて恥ずかしくて、買ったばかりのケーキを女の子に押し付けて店を飛び出してしまったのだ。」

「……はあ。」

「あの時の事を思い出して暗い気持ちになると、マチルダが「おかわりお持ちしました」と言いながら、部屋に入ってきた。」

「おかわり……！」

「いや、でも先程醜態を晒したばかりで尚も食べては……、しかしサツキには、もう俺が甘いお菓子が好きな事は知られているし……。」

「マチルダが皿をテーブルに並べていく。」

「あ！ あれは、チエルの実のケーキ！」

「俺が最も好きなケーキだ。」

「食べたい食べたい。」

「恥ずかしいが、我慢など出来ない！」

「俺が手を伸ばそうとした時、」

「……！！」

「な、なんて事だ。」

「サツキがチエルの実のケーキの載った皿を手を取った。」

「ま、待ってくれ。それは……！」

ああ……、食べてしまった……。
なんて幸せそうな顔だ。
せめて一口だけでも欲しい。だがそんなはしたない事言えない。
只々、見つめるだけしかないのか？ 目の前にそれはあると言っ
のに。

「……もしも、これ食べるしたいか？」

サツキの言葉に俺はハツとした。

しまった。また夢中になっていたようだ。

食べたいかって？ 勿論食べたいが……。

「やる」

サツキが俺に皿を差し出す。

え？ いいのか？ しかし……。

迷う俺に、サツキは皿を押し付けるようにして渡してきた。

「ありがとう」

サツキに感謝し、もらったケーキを口に入れる。

ああ、この甘酸っぱい味がたまらない……！

「沢山食べる。のんびりあるから」

「うむ……うむ」

沢山食べてよいのか。

俺は次の皿に手を伸ばした。

サツキをチラリと見ると、頬杖を付いてボーっとしているだけで

ケーキを食べようとはしない。

もしかして、あまり甘い菓子は好きでは無いのだろうか？

勿体ない。こんなに美味しいのに。

残しては料理人に申し訳ないので、テーブルに載った菓子を俺は
全て食べた。

うむ。美味かった。

出来れば毎日でも食べたいものだ。

その時、サツキがフウッと溜息を吐いて、驚くべき言葉を口にした。

「いつも食べに来るがよい」

ええ！？ 『いつも』って毎日という意味か！？

「あ、ありがとう！」

ま、毎日甘いお菓子が食べられる……！
なんとという幸せ。

ありがとうサツキ。

俺は喜びを噛みしめながら、サツキに深く頭を下げた。

そりゃさあ……、『いつでも来ていい』って言ったけど、だからって毎日来る？

『社交辞令』って言葉、知らないの？

朝っぱらから大量のケーキを食べるダンを見ながら、私は溜息を吐く。

ダンの仕事は、どうやら出勤時間が毎日違うらしい。

今日は昼から仕事だからって、まだカタヤ家が朝御飯食べてる時間に訪ねて来た。

カタヤの両親が優しいからって、どんどん調子に乗ってるような気がするなあ。

はあ……。

それにしても、朝御飯としてケーキ食べるってどーよ？

好きなのは分かるし確かにすごく美味しいけど、でもこんなに毎日大量に食べてたら病気になるんじゃないのかな？

「体、壊しちゃうよ」

ちよつと心配になって声を掛けると、ダンはこちらを見て首を傾げた。

「そんなに沢山食べてたら、体、悪くなるよ」

すると、益々ダンは首を傾げ、眉まで寄せた。

……ん？ 通じてない？

そういえば、『病気』って言葉ってなんて言うんだっけ？

カタヤの両親はとっても元気だから、『病気』って言葉使う機会、今まで無かったんだよね。

うーん、どう言えば分かってもらえるかな？

悩んでいると、ダンが不意に口を開き、はっきりと断言した。

「大丈夫。体は悪くならない」

んん！？ 通じた？ って何その自信。

今は大丈夫でも、すぐに悪くなるんだから。

「これから悪くなるんだよ」

親切にも忠告してあげたのに、ダンが首を振った。

「すぐ治る」

何それ？

そういえば学校にもいたな。病気は寝れば、怪我は唾つけとけば治るって言ってた先生。

それで治るなら医者も病院も要らないでしょう？
分かってないな。

……って、もしかして、トーラは日本より医療水準が低いのかな？
それならダンに知識が無くてもおかしくないよね。

ここって王だ貴族だ騎士だの、中世ヨーロッパ？ な世界だも
んねえ。

医療が発展してなくて当然かも。

うーん……、ちゃんと教えてあげた方がいいとは思っただけど、
どう説明すればいいかなあ。

糖尿病？ 成人病？ よく考えたら私も詳しく知らないや。

とにかく『甘い物の暴飲暴食はよくない』ってだけでも言っ
てあげようかなって思っていると、ダンが急に話題を変えてきた。

「サツキは何故トーラに来た？」

え！？ 病気の話の強制終了？

なにになに？ 『好きな物食べて死ぬんだったら本望だ』みたいな
感じ？

まったく、人の親切を無視するとは。

もう知らないからね！

「サツキ……」

何？ ああ、はいはい。何故トーラに来たって？

そんなの……。

「分からない」

「分からない……？」

眉を寄せられても、分からないものは分からない。

誰かに召喚されたって訳でもないみたいだしね。

「分からないのにトーラに来た？」

もう、しつこいなあ。

じゃあトーラにトリップした時の事、教えてあげるよ。

始まりは、日本の両親の話からかな？

「両親が離婚、えーと、別れて……、それでどっちにも引き取りたくないって言われたの。一人で生きていけってね」

冗談みたいに身勝手な親だったなあ。

突然離婚するって言われて驚愕だったよ。

だって、仲良し夫婦だったんだよ。

それがなんで？ って理由を訊いたら、返ってきた答えが『倦怠期』だって。

母親には『あんだ、もう高校生なんだから、一人で大丈夫でしょ？』なんて言われて、父親には『お父さんとお母さんは、それぞれの別の道を探すから、お前はお前で自分なりの新しい世界を探せ』って訳分かんないこと言われたんだよな。

で、両親が家出て行っちゃったんだけど、そこで一つ大問題が。

実は私、すごく怖がりなのだ。

一人暮らしなんて絶対無理！

だって幽霊が出て来たら、どうすればいいのかわかんないじゃない。い。

それで私がどうしたかと言うと……。

「悪いなーと思いつつ、一人暮らしは無理だから、友達の家を渡り歩いてたんだ」

泊めてくれた友達とその家族には、本当に感謝だよ。

「そんなある日、コンビニ 店から出たら雨が急に降ってきて、友達の家まで急いで走ったの。それなのに気が付いたら、この屋敷の庭に居たんだよな。で、何が何だかわからないうちにカタヤの両親に拾われたってわけ」

後から聞いたんだけど、お父様お母様は突然庭に現れた私を、神からの贈り物だと思っただけらしい。

カタヤの両親が庭でお茶してたら、突然光が溢れて私が現れたんだって。

ファンタジーだねえ。

「ご飯も美味しいし、綺麗なドレスも沢山着れて嬉しいし、幸せ」
子供のいないカタヤ夫妻は私を溺愛してくれてるもんね。

心残りには、世話になった友達に挨拶出来なかった事かな？

心配してるだろうけど、どうにもならないからな……なんて思っている。

「う、ううう、う、わーあああ！！」

突然ダンが大泣きし始めた！？

え、なんで？ どうして？

「う、うう……サツキ、可哀想……！！」

滝のように流れる涙を、ごつい手で拭うダン。

……まさか私の話に感動したの？

「幸せになって、よかった」

うん。まあ、そうなんだけどさあ。

でも、そんな号泣するような話じゃ無かったよね……。

ダンの顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃ。

うわあ……。キタナイ……。

私はポケットからハンカチを取出し、ダンに差し出した。

それを受け取ったダンはハンカチで涙を拭いて、更に鼻をかみやがった。

……最低。

あのハンカチ、お気に入りだったのに。

あーあ、なんか朝から疲れちゃったな。

……はあ。

テーブルに突っ伏して溜息を吐いたら、ダンが頭を撫でてきた。
「泣くなサツキ。辛い事を思い出させて、ごめん」

……誰が泣いてるって？

ってゆーか、涙と鼻水だらけの汚い手で髪に触らないで欲しい。
マチルダに頼んでお風呂の準備してもらおう。

ダン、早く帰ってくれないかなあ。

……はあ。

サツキの好意に甘え、俺は今日もカタヤに來ている。
テーブルに並ぶ沢山のケーキは、毎日食べても飽きない美味しさ
だ。

サツキは甘い物があまり好きではないのか、食べても精々二・三
個だ。

残りが全て俺の物になるのがまた嬉しい。

手前のケーキから順番に手に取り食べていると、サツキがフウっ
と溜息を吐いた。

ん？ どうした？

俺が顔を上げると、サツキは真剣な表情で言った。

「体、破壊するね」

……破壊？

「沢山食べる体、悪いなる」

体が悪い……？

少し考えて、気付いた。

ああ、成る程。

『病気』と言いたいのか。

しかし、病気とは……。

沢山食べると良くない？

そうか。サツキの故郷では、まだそんな事を言っただな。

「大丈夫だ。体は悪くならない」

するとサツキは驚いて、眉を寄せた。

「これから、悪いなる」

いや、俺は丈夫だから病気になどならない。

それにたとえ病気になったとしても問題無いだろう？

「すぐに治る」

俺の言葉に、サツキはポカンと口を開けた。

ん？ まさか、知らないのか？

トーラが医療大国だと。

トーラの医師に治せない病気など無いというのは、世界中で有名な筈なのだから。

そういえば、サツキの故郷『ニホン』という国を先日地図で探してみたのだが、見つからなかった。

地図に載らない余程の小国か、『ニホン』と言うのが現地の呼び名、あるいは国ですら無いのかもしれないな。

『ニホン』はとんでもない秘境にでもあるのだろうか。

どうもサツキはトーラの事を詳しく知らないようだな。

それならば何故、『密入国』などという危険を冒してまでトーラに来たのだろうか？

人の過去を探るのは良くないのかもしれないが、俺は好奇心に負けてサツキに訊いてしまった。

「サツキは何故、トーラに来たのだ？」

そして次の瞬間、俺は後悔した。

サツキが目を見開き、それから俺を睨み付けたのだ。

しまった……。

誰にだって消し去りたい過去の一つや二つ、あるものだ。

それをただの好奇心で、ほじくり返してしまった。

「サツキ……」

すまなかつたと謝ろうとした時、不意にサツキが口を開いた。

「分からーんね」

え……？

「分からない……？」

なにがだ？

サツキは少々投げ遣りな感じで頬杖をついている。

これはもしかして……。

「分からないのにトーラに来た？」

という意味か？

戸惑う俺に、サツキは自らの過去を語り始めた。

「おとさま、おかさま、リコン、んーと、別れ。誰も引き取るいない、一人生きるしかない」

な……、なんだって？

サツキの実際の両親は亡くなっているのか！

しかも引き取ってくれる親族もいないとは、天涯孤独の身になったという事か。

可哀想に……。

「一人で住む無い。悪い仲間、色々彷徨う。ある日、コンビニ

店から走って外出る。雨降る。急ぐ仲間の家。この屋敷庭に居る、カタヤおとさまおかさまに気付かれ、捕まった」

……………！！

サ、サツキ……。

……いや、そうだな。

サツキのような華奢な女が住む家さえ無いのだから、悪い人間に声を掛けられ仲間になったとしても仕方がないのかもしれない。

色々彷徨うという事は、世界を股にかけるような窃盗団だったの
だろう。

それでトーラに密入国か……。

しかし、店に盗みに入ったところを警備隊にでも見つかり雨の中
逃げた。

アジトまで急ぐが追っ手が迫り、目の前のカタヤの屋敷に逃げ込
んだが見付かって逮捕されたのか。

なんとという激しい過去なのだろう。

まさかサツキが犯罪集団の一員だったとは……。

「ご飯、美味しい。綺麗なドレスいっぱい着る嬉しい。幸せ」

ああ……、満足に食べられないような生活をしていたのか。

だから、サツキはこんなに痩せて華奢なのだな。

ドレスなど着た事も無かったのか。

う……！　なんて不憫なんだ、サツキ！

俺の目からは涙がポロポロと零れた。

「う、ううううう……」

俺は声を押し殺して泣いた。

「う、うう……、サツキ、可哀想に……」

涙が、拭っても拭っても溢れてくる。

「幸せになって、良かったな」

偶然とはいえ、カタヤの屋敷に逃げたのは幸運だったな。

優しいカタヤ夫妻がサツキの事情に同情して保護を申し出てくれたのだろう。

サツキが俺にハンカチを差し出した。

これで涙を拭けというのか。

ありがとう。

俺が涙をハンカチで拭っていると、サツキがテーブルに突っ伏してしまった。

ああ……。

「泣かないでくれ、サツキ。辛い過去を思い出させてすまなかった」
いつも明るいサツキに、まさか犯罪者という暗い過去があるとは思いもしなかった。

そして、そんな過去を話してくれたのは、それだけ俺を信用してくれているからなのだろう。

俺はサツキの頭をそっと撫でた。

大丈夫。サツキはもう一人ではない。

サツキが困った時や悲しい時は、その信用に応え、必ず力になるう。

涙が止まるまでずっとこうしてあげてあげから、安心して思い切り泣けばいい。

俺は自らも嗚咽しながら、サツキの頭を撫で続けた。

「後は、これを伸ばして切って茹でるんだよ」

興味津々の料理人ヤン。

黒の短髪に緑色の瞳をしたちょっといい男、因みにマチルダの旦那さん。

その前で、私は練って寝かしていた粉を麺棒でのばした。

実は今、私は厨房でうどんを作っているのだ。

この国の食事っていわゆる洋食で、でもってヤンの作ったものはすごく美味しいよ。

でも……、やっぱりたまには日本食が食べたくなるんだよね。

それでヤンと相談して、小麦粉っぽいものでうどんを作ってみる事にしたのだ。

トーラって意外にも食材は日本にあるものと似ているんだよね。

なんとなんと、米っぽいものもあったりする。

こつちではその米っぽいものはサラダとしてたまに出されるんだけど、初めて見た時は驚愕して思わず叫んじゃったよ。『なんでご飯にドレッシングなの！？』ってね。

それで、今日は念願のおにぎりも作る事にした。

ただ残念な事に、トーラには醤油と味噌に似たものが無いんだよね……。

うどんに醤油が無いのは残念無念。

雰囲気だけでも似せるために一応黒色の液体は用意してもらったけど、なんかこれ凄い臭いがする。大丈夫なのかなあ。

庶民には決して手の届かない超高級調味料らしいんだけど、食べるのがちよつと怖い。

まあとにかく、切って茹でて冷水にさらして、ヤンに手伝ってもらいながらなんとかうどんが完成。

「うん！ いい感じ」

見た目は立派なうどんだ。

後は、あの謎の調味料と合うかだけど……。

と思っっていると、マチルダが厨房にやって来た。

「ダン様がいらっしやいましたよ」

ダン？ おおー！ いいタイミングで試食係が来た。

ダンは丈夫そうだから、多少無茶しても大丈夫だよな！

で、ダンが美味しいって言ったら私も食べよう。

「これ、客間に運んで」

ヤンとマチルダ、それに私も手伝って、うどんとおにぎりを運ぶ。

客間のドアを開けるとダンがソファアに座って寛いでいた。

なんだかもう、自宅みたいになってない？

入り浸り過ぎて違和感なくなっちゃってるよね。

そういえばマチルダも前は『ワーガル様』って呼んでたのに、最

近は『ダン様』だもんねえ。

まあそれはいいとして、私がテーブルに並べたうどんとおにぎり

を見て、ダンは目を丸くする。

「サツキ、これは……」

「日本の食べ物だよ」

「……甘いか？」

「甘くないよ」

「……ケーキは？」

「無い」

「……」

あからさまに肩を落とすダン。

もう！ この甘党男め！

「大丈夫、ありますよ。持って来ますから」

見かねたヤンがそう言うと、ダンは途端にパッと顔を上げた。

ヤン、甘やかし過ぎ。

「でもこれ食べてからだからね」

私は小鉢を手に取り、そこにうどんと黒い調味料を入れた。それをダンに差し出す。

「ダン、これ試してみて」

「……………」
ダンは真剣な表情で小鉢を見て、それから私の目をじっと見つめた。

え？ なに？ もしかして、無言の拒否？

確かに凄い臭いだけど、超高級調味料っていうんだから味は美味しいかもしれないじゃない。くさやとか納豆みたいに。

「早く食べてよ」

私が催促すると、ダンはやっと小鉢を手に取った。

そしてフォークで一口食べる。

「どう？ 美味しい？」

「……………」
ん？ どうなの？

ダンが無言でうどんを飲み込む。

んん？ やっぱ不味ののかな？

……………と思ったら、ダンが勢いよくうどんをかき込み始めた。

あれれ？ まさか、意外といける？

「……………美味しい？」

私が訊くと、ダンが黙って頷く。

おおー！？ 美味しい？ そうなんだ。

ダンは汁まで全て飲み、ドンツと小鉢をテーブルに置いた。

なんだかその顔が、満足気に見える。

よしよし、じゃあ私も食べよう。

小鉢にうどんと調味料を入れて……………。

「いただきますー！」

パクつと一口。

……………え。

「う、うわぁー！！ うええ！」

な、な、なにこれ！？

辛くて酸っぱくて甘くて生臭い……！

「サツキ！」

激しく咳き込む私の背中をダンが擦る。

ううー！ 気持ち悪い。

マチルダがジュースを持って来てくれたので、それを急いで飲んだ。

はああ……。

「サツキ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない！！」

馬鹿ダン！

なんの為の実験台だったの！？ 意味ないじゃない！

私はダンの体を押し退けて、おにぎりを手に取った。

うん。美味しい。

この発酵させた木の実が梅干しそっくり。

まだ残ってるうどんにヤンが作ったビーフシチューっぽいのかける。

「美味しー！」

これ、意外に合うじゃない。

「サツキ」

「もう！ 知らない！」

ダンの味覚音痴！

甘い物ばっか食べてるから舌がおかしくなったんだよ。

「ケーキ無し！」

「ええ！？」

ダンがなにか喚んでいるけど、無視。

あー、次はカレーやラーメンに挑戦でもいいな。

私はそんな事を考えながら、うどんを啜った。

ああ、疲れたな……。

城からの帰り道、俺は欠伸を噛み殺して空を見上げた。

日が高い。もう昼をとくに過ぎていてはないか。

宿直の後に会議があり、更に新米騎士達に稽古をつけていたら、すっかり帰るのが遅くなってしまった。

ああ、甘いお菓子が食べたい。

俺は自分の屋敷には戻らず直接隣のカタヤの屋敷を訪ねた。

ベルを鳴らして出てきたマチルダの案内で客間に行きソファーに座って待っていると、サツキがやって来た。

ん……？ なんだ？ サツキが持って来た物は。

「サツキ、これは……」

「二ホンの食べる物よー」

二ホンの食べ物……？

「……甘いか？」

「甘い無いねー」

「……ケーキは？」

「無い」

「……」

甘いお菓子を楽しみにやって来たのだが、いつものケーキや焼き菓子が無い？ なんて事だ。

「大丈夫、ありますよ。持って来ますから」

がっかりしていると、カタヤの料理人ヤンが言ってきた。

なんだあるのか。良かった。

ではすぐ持ってきてくれと言おうとしたら、サツキがそれを遮る。

「でも、これ食べるしてから」

そう言ってサツキは、小皿に白くて長い怪しい物と黒くて怪しい液体を入れた。

それを俺に差し出す。

「これでダンを試す」

「……………」

試す……………？

もの凄い臭いがするのだが、これは本当に食べ物か？ サツキの目を見ると真剣そのものだが。

「食べる、早く」

……………もしかして『試す』というのは『お前の根性を試す』という意味なのか？

うむ。なんだかよく分からないが挑まれたからには男としてやるしかない。

サツキから小皿を受け取り一口食べる。

……………。

辛く酸っぱくほんのり甘く生臭い……………。

なんだこれは！ サツキの故郷ではこんな不味い物を食べているのか！？

吐き出したいが、サツキに挑むような眼差しを向けられ根性で飲み込む。

そして残りも勢いよくかき込んだ。

「美味しいか？ どうか？」

美味い訳ないだろう！

だがそう言う負けのような気がして俺は黙って頷いた。

汁まで全て飲み込み小皿をテーブルに置く。

どうだサツキ！ 食べたぞ！！

するとサツキは目を見開き、それからまた小皿に謎多き食べ物をのせた。

ま、まさか、もう一皿食べると言うのか！？

……………と思ったら、サツキは「イタダキマース！」という聞いた事

のない掛け声と共に、パクつと謎の食べ物を入れた。
そして次の瞬間、

「おげあー!!! うええ! おええっ!!!」

え!?

「サツキ!!!」

サツキは謎の食べ物を吐き出し激しく咳き込む。

俺は慌てて背中を擦り、マチルダがジューズを持って来る。

そのジューズをサツキは一気に飲み干し大きく息を吐いた。

「サツキ、大丈夫か?」

心配して言ったのに、サツキは何故か俺をキツと睨み付けてきた。

「大丈夫違う!!!」

サツキは俺を押し退け、テーブルに置いてあった先程の物とは別の三角形をした謎の食べ物を手に取った。

それを食べて満足気に頷く。

更に先程の白くて長いブニブニの食べ物を皿に載せ、これはおそらくヤンが作ったのだろうスープをかけた。

「美味しー!」

……なんなのだ?

サツキはあからさまに俺を無視している。

何故だ? というか、先程の謎の食べ物はいったいどういう意味があったのか。

「サツキ」

「もう! 知らんね!」

どうしてそんなに怒っているのだ?

呆気にとられている俺に、サツキが衝撃的な言葉を投げつける。

「ケーキ無し!」

「ええ!?!」

な、なんだって!?

ケーキを楽しみにここに来たのにそれはどういう事か！

「サツキ！ 何故だ！ あんな不味いもの食べさせた上に、更にケーキが無いとはどういう事なのだ！ だいたい故郷の食べ物か何か知らないが、自分でさえ吐き出すような物を人に勧めるというのは良くないのではないか！？」 聞いているのかサツキ！ サツキ！」「徹底的に無視する気なのか、サツキは俺に背を向けた。

なんだその態度は？

いくらサツキと言えどもそれはないのではないか？

「まあまあダン様。ケーキなら今すぐ用意しますから」

ヤンが苦笑して部屋を出て行き、すぐにいつものように沢山のケーキを持って来た。

サツキは俺に背を向けたまま、謎の食べ物ズルズルと行儀悪く啜っている。

いったいなんだって言うんだ！！

俺は怒りと共にケーキを口に入れた。

「いち、にーい、さーん。」

軽く準備運動をして、私は広い庭を走り始める。

今日は服も、いつものドレスではなく、マチルダにシャツとズボンを用意してもらった。

「うん。気合い入ってるよ！」

学校のグラウンド並に広い庭を一生懸命走っていると、ダンがやって来た。

「何……、してる？」

「んん？ 分かんない？」

「走ってる」

「……何故？」

「もー！ うるさいなあ！」

「太ったから走ってるの！」

日本にいた時はどれだけ食べても大丈夫だったのに、ドレスが……

……ドレスがキツくなってしまった！ もう愕然だよ。

絶対元通りになるんだから！

グツと拳を握り、走るスピードを上げる。

息が苦しいけど我慢我慢。

「そうやって頑張って走ってたら、え？ なに？ ダンが私の横を走りだした。」

「サツキは太った方がいい」

「……はあ？ なに言ってるの？」

無視！

「サツキ、もつと太った方がいい」

「なによ！ 鬱陶しいなあ！」

「太った方が」

「うるさい……！」

「サツキ……！」

なによなによ、さつきから！

もしかしてこの男……。

「太ってる方が好き？」

「そうだ」

ふーん成る程。太った女性が好みなんだね。

まあそれは人それぞれだから勝手にすればいいけど、だからといって自分の趣味を押し付けないで欲しいな。

庭を一周して、よし、次は腕立て伏せだ！

うつ伏せになって腕に力を入れる。

「うわあ！ やめてくれ！」

「うるさい！」

もうホントになんなの！？

ダン、邪魔すぎ！

気合いで二十回こなし、よし、腹筋。

「頼む！ 頼むからやめてくれ！」

「きゃあっ！」

ええ！？ じ、地面が遠い！

って、ダンに持ち上げられてる！

「なにすんのよ！ 馬鹿馬鹿馬鹿！」

「サツキ、駄目だ！」

暴れる私をいとも容易くダンはおさえ、庭の一角にあるテーブルセツトに連れて行く。

そして椅子に私を下ろした。

「ダン！」

「駄目だ！」

立ち上がるうとする私の肩をダンが押さえる。

うぎゃあ！ なんだっていうのよ！！

「こんにちは。ダン様」

そこに、ケーキの載ったワゴンを押してマチルダが現れた。

「マチ！ ダンが……！！」

「はい。ケーキをどうぞ」

え！？ マチルダ、無視！？

ちよつとちよつと、ご主人様の危機だよ。

「マチ！」

「はいはい」

マチルダはテーブルにケーキを次々置き、ニッコリと笑った。

「どうぞ」

うわー！ 美味しそう！ って、違うでしょ！？

私がダイエツト中って知ってるくせに！ これって嫌がらせ？

「ダン！ 全部食べていいよ」

私はダンの手を肩から叩き落としてケーキを指差す。

「……………」

ん？ なによその目。

いつもなら嬉々として食べるダンが、私をじっと見ている。

「早く食べなさいよ！」

「……………」

ダンは私の向かいの椅子に座り、眉を寄せた。

そしてケーキの載った皿を私の前に置く。

「サツキも食べよう」

……………喧嘩売ってるの？

「要らないって言ってるでしょう！」

はやく食べちゃってよ！

バンツとテーブルを叩くと、ダンは私をじっと見ながらケーキを食べ始める。

一個、二個……………、あ……………美味しそう。

いや、でも我慢！ 気合いだ気合い！

「サツキ……………」

ん？ なに？ ……………え？

ダンがケーキをフォークで掬って、私の口に近付ける。

「一口だけ」

「……………」

な、なに？ 食べるって？

だから、ダイエット中なんだってば。

「一口」

……………なによ。しつこい。

「一口」

でも…………、そう、ね。一口だけなら食べてあげてもいいかも
うん、そう。運動した分ちよつとくらい……………いいよね。

私が口を開けると、ダンがケーキをそつと舌の上にした。

「美味しい！」

思わず叫ぶと、ダンがまた私の口元にケーキを運ぶ。

「一口」

うーん…………。じゃあもう一口だけ。

パクつと口に入れる。

するとまたダンが、私の口元にケーキを運ぶ。

「一口」

……………。

なによ。どれだけ食べさせる気なの？

でも…………、いや、そう。

ダンが無理矢理食べさせるから、仕方ないよね。

うん。明日から。ダイエットは明日から頑張ろう。

ダンが私の手にフォークを握らせる。

もう！ 仕方ないなあ。

じゃあ食べてあげるよ。

私は目の前のケーキにフォークを突き刺した。

いつものようにカタヤの屋敷を訪問し、俺は驚いた。

……サツキが少年のような格好で、庭を走り回っている。

「何を……、している？」

「走るしている」

「いや、それは分かるが。」

「……何故？」

するとサツキは俺を睨み付けた。

「太るから走るしている！」

「太るから……？」

「いや、むしろ痩せたというか、やつれていないか？」

走るサツキを追いかけて俺は言った。

「サツキはむしろ、太った方がいいのではないか？」

「それだけ華奢で、何故更に痩せようとするのだ？」

「サツキ、もつと太った方がいい」

「返事が無い。聞こえていないのか？」

「太った方が」

「うるさい！」

「サツキ……！」

サツキが激しく俺を睨む。何故だ？

「太ってる、好き？」

「好きというか。」

「その方がいい」

「サツキには。」

サツキは「ふーん」と唸って立ち止まり、今度はうつ伏せに寝転んだ。

そして掌で地面を押す。

……………！

まさかこれは、腕立て伏せのつもりか？

腕が、体が、プルプル震えているではないか！

「うわぁ！ やめてくれ！」

サツキの華奢な骨が、今にも折れそうだ！

「うるさい！」

と思つたら、次は仰向けで息も絶え絶え悶えている。

死ぬんじゃないか！？

「頼む、頼むからやめてくれ！」

俺は思わずサツキを抱き上げた。

「きゃあつ！ なにするね！ バカバカバカ！！」

「サツキ、駄目だ！」

暴れるサツキをなだめながら、俺は庭の一角にあるテーブルセツトに連れて行き、椅子にそつと下ろした。

「ダン！」

「駄目だ！」

立ち上がるうとするサツキの肩に俺は手を置く。

これ以上運動したら、サツキはきつと全身骨折だ。

なおも暴れるサツキをどう説得しようかと困っていると、ワゴンを押しながらマチルダが来た。

「こんにちは。ダン様」

「マチ！ ダンが……！！」

「はい。ケーキをどうぞ」

マチルダがテーブルにケーキを並べる。

「マチ！」

「はいはい」

マチルダはテーブルにケーキを次々と置き、ニッコリ笑った。

「どうぞ」

うむ。今日も美味しそうだ。

……いや、違う。それより今はサツキだ。

「ダン！ 全部食べるがいい」

俺に一人で食べると？

サツキが俺の手を叩き、ケーキを指差す。

「……」
嬉しいが……、サツキも食べた方が良いのではないか？

「早く、食べるいい！」

「……」
今日のサツキはおかしい。

俺はサツキの向かいの椅子に座り、ケーキの載った皿をサツキの前に置いた。

「サツキも一緒に食べよう」

「要らない言うね！」

サツキがバンツとテーブルを叩く。

「…… 本当にどうしたのだ？」

サツキがあまりにも怒るので、取り敢えず俺はケーキを口にした。

サツキはそんな俺をじっと見ている。

「…… 食べるにいい。」

実はサツキも食べたいのではないか？

「サツキ……」

俺はケーキをフォークで掬い、サツキの口に近付けた。

「一口だけ」

「食べてみないか？」

「……」
サツキが目を泳がせる。

やはり食べたいのか。

「一口」

「……」

「一口」

しつこく勧めると、サツキは俺をじっと見ながら小さく口を開けた。

その隙間にケーキを入れてやると、「美味しい！」と笑う。

うむ。良い笑顔だ。

もう一度ケーキを口元に運ぶ。

「一口」

するとサツキは大きく口を開け、パクつと食べる。

もう一度ケーキを運ぶ。

「一口」

「……………」

突然。

サツキは俺からフォークを奪い、猛烈な勢いでケーキを食べ始めた。

な、なんだ？ どうなっているのだ？

啞然とする俺の耳に、マチルダがホツと息を吐く音が聞こえた。

「良かった。食べてくれました」

「え…………？」

マチルダは苦笑しながら、サツキの食べる姿を見つめる。

「サツキ様、昨日から水以外、口にしていなかったのですよ」

「え!？」

そんな無茶をして…………!

サツキ程華奢な体の者からすれば、たった一日とはいえ食べないのは相当キツイ筈。

どうして…………。

そこでふと、俺は双子の妹である二ナを思い出した。

そういえば二ナも今日のサツキと同じように、突然運動したり食事を食べなくなったりしたな。

そして数日後には、狂ったように甘い物を食べていた。

確かそういう時は…………そう、いつも恋をした時だった。

好きな人が出来たからといって、何故無理して痩せる必要があるのだと訊く俺に二ナは、『ダンには乙女心は分からないわよ!』って言ったな。

……。

サツキも……、好きな男が出来たのか？

……サツキが、恋？

……。

まさか、いやでも……二ナの時とそっくりではないか。

……。

どんな男なのだ？

屋敷からあまり出歩かないようなのに、どこで出逢ったのだ？

……いや、まあ……、もしそうならば応援してあげなければいけないな。友人として。

うむ。そう、友人として。

……。

「サツキ

うるさい!!」

怒られてしまった……。

マチルダが俺の前にケーキを置いたが食べる気になれない。何故だろう？

視線を上げると、サツキが小さな口に、ケーキを一生懸命運んでいる。

その姿はまるで小動物のようで……。

……。

俺は目の前のケーキをサツキに差し出した。

最近、ダンの入り浸りが激しすぎる。

仕事に行ってる時間と夜寝る時間以外は、ずーっとカタヤの屋敷に居る。

食事もカタヤで食べるし、宿直後も自分の屋敷には帰らずに直接うちに来て、客間のソファで寝てたりする。

いくらカタヤが居心地いいと言っても、ちよつと遠慮無さすぎじゃない？

そして今も、私とダンは庭でお茶している。

「サツキ、このケーキ食べるか？」

「……いらない」

「サツキ、今日はいい天気だな」

「……そうね」

「サツキ」

「なに？」

「ダンはスツと視線を逸らす。」

「……なんでもない」

「……」

最近、ダンは私に喧嘩を売ってくる。

何も用事が無いのに人の名前を連呼するんだよ。

これはあきらかに、私に対する嫌がらせだよ！

いったい私に何の不満があるの？

三食昼寝におやつ付き、しかもタダ。

こんな親切な隣人、普通いないよ？

いつまでもこんな態度していると有料にするからね！

ちよつぱり怒りながらケーキを食べているダンを見ていたら、ん

? なに、どうしたの? ダンがハツとして顔を上げた。

「……サツキ」

ダンは食べかけのケーキが載った皿を右手に持ち、立ち上がる。

「屋敷の中に入りたい」

「え?」

ダンは左手で私の腕を掴んだ。

「早く、サツキ」

「え? え? なに?」

眉を寄せ、ダンは私を急かす。

ちよつと、なによ! なんだって、あれ? ……何か聞こえる。

ンン……ンンンー! ……ダアアア……ンンンンンンー!

え? ダン? 確かに『ダン』って聞こえるよ。

「ダン、誰か呼んでるんじゃないの?」

「……早く中に」

「なによ、ちよつと 痛い!」

ダンに引つ張られた腕に痛みが走る。

「サ、サツキ!!」

ダンは慌てて掴んでいた手とケーキ皿を離し、私の腕を擦った。

「ご、ごめん、サツキ。痛かったか?」

「痛いよ!」

もう! 馬鹿力!

私がダンの手を振り払った時。

「ダン!! 見付けた!!」

門の所に女の人が見れた! と思ったら、こちらに向かって突進して来た!?

え、嘘、なに？ あの超美人！！

うわぁー！ ドレスからこぼれそうな爆乳！

細い腰、長い手足、輝く金の髪！！

美人さんはあつという間に目の前迄来て、そしてそのままダンに体当たりした。

なになに？ どういうこと！？

美人さんはダンの胸ぐら掴んで揺さ振りながら、早口でまくし立てる。

「こんな所にいた！ ダン、この浮気者！」

え……、ええ！？

「二ナ、落ち着け」

「酷いわ！ 私よりこんな女がいつて言っの！？」

な、ななな、なにこの修羅場！？

つまり……この美人はダンの彼女で、ダンが浮気！？

嘘お！ だって、ダンってば、『太ってる女が好き』って言うて

たじゃない……！

それなのに！ しかも『浮気』って！

あれ？ でも……『こんな女』って誰？

……。

この場に居るのはダンと美人と……え？ もしかして……私？

えええー！！ 誤解されている！

「ち、違う！！ 私はそんな……！！」

私が慌てて叫ぶと美人の動きが止まった。

そして、私を見る。

「まあ！ 猫そっくり！ この子は！」

え？ 猫そっくり？ なにそれ？

うーん……。猫……。浮気……。猫……。浮気。え？ まさか！？
私はハッと気付いた。

『この泥棒猫！』ってやつ！？

う……。そ。なにそれちよつと！ この早とちり女！

さすがの私でも、泥棒猫とまで言われちゃ黙ってられないよ！

なによなによ！ ちよつと胸がでかいからって偉そうにしないで
よね！

だいたいダンもダンだよ！ 私がこんな酷い事言われてるのに、
なんでその女に何も言ってくれないの！？

「ダン……………！！」

私が大きな声で呼ぶと、ダンがビクツとして振り向いた。

……………なに？ その罪悪感に満ち溢れた瞳。

「ごめん！ サツキ！！」

ダンが女性を肩に担ぎ上げる。

そして、脱兎の如く走って門から出て行った。

……………。

なによ、あれ。

信じられない。

なんだったの？

……………。

なによ、あの女。

あんな胸の大きく開いたドレス着て。いやらしい。

ダンも、彼女がいるなんて、今まで一度だって言った事ないじゃ
ない！！

本当にもう、信じられない！

馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！ 知らないんだから！

どうぞ彼女とお幸せに！

さ・よ・う・な・ら・！

私は立ち上がり、椅子を蹴り飛ばして屋敷の中に入った。

俺とサツキは、カタヤの庭でお茶を飲んでいる。
サツキは食事も普通に食べるし間食もする。

あの無理な減量は、やめたようだ。

良かった。本当に良かった。

俺は目の前のケーキをサツキに差し出した。

「サツキ、このケーキ食べるか？」

「……いらんね」

そうか、いらんのか。

「サツキ、今日はいい天気だな」

「……そうね」

気持ちの良い青空だ。

「サツキ」

「なに？」

顔を上げたサツキと目が合う。

「……なんでもない」

俺は最近、サツキと目が合うと何故か苦しい感じがする。

おかしい。体は至って健康で、先日行われた健康診断でも『問題

無し』だったのに……。

悩みつつもケーキをたべていると。

ン……ンー……。

うー!? 微かに聞こえるこの声は……! !

「……サツキ」

俺は食べかけのケーキが載った皿を右手に持ち、立ち上がる。

「屋敷の中に入ろう」

「え？」

あれと関わるのは面倒だ。
左手でサツキの腕を掴む。

「早く、サツキ」

「え？ え？ なにね？」

しかしサツキは立ち上がらない。

急いでくれ！

ンン……ンンンー！ ……ダアアアア……ンンンンンンー！

声が段々と近付いてくる。

「ダン、誰か呼ぶしてる？」

「……早く中に」

「なにね、ちよつと 痛い！」

俺はハツとした。

サツキが眉を顰めている。

「サ、サツキ……！」

慌てて掴んでいた手とケーキ皿を離し、サツキの腕が折れてい
いか確かめる。

「す、すまない、サツキ。痛かったか？」

「痛いね！」

なんとという事だ！

折れてはいないようだが、サツキを傷付けてしまった。

怒ったサツキが俺の手を振り払った時。

「ダン……！ 見付けた……！」

しまった、見付かった。

こちらに向かって突進して来る 双子の妹、二ナ。

二ナは俺の胸ぐらを掴み、揺さ振ってきた。

「こんな所にいたのねダン！ 聞いて、また浮気されたの！」

「二ナ、落ち着け」

興奮状態の二ナは、早口過ぎて言葉が聞き取りづらい。

「酷いわ！ 私よりあんな女がいいって言うの!？」

……またか。

二ナは数年前に大恋愛の末、他家に嫁いだのだが……、もの凄く嫉妬深いのだ。

旦那がちょっと他の女性に視線を向けただけで、浮気だと騒ぐ。

そしてこうして、俺に不満をぶちまけに来るのだ。

さて、どうやって二ナを落ち着けようか。

俺が溜息を吐きつつ考えていると、サツキが横から何か言ってきた。

「ち、違うね!! わたーし、それ……!!」

ん？ なんだ？

俺が振り向くと、つられて二ナもサツキを見る。

「まあ！ この子『チャマ』にそっくり!」

……………ん？

二ナ、急に何を言いだすのだ。

二ナの関心は、旦那の浮気から急速にサツキへと移ったようで、俺から手を離し、ぶしっけな視線でサツキを上から下まで見る。

これはいけない。サツキに失礼だろう。

二ナを注意しようと、腕を引っ張る。

「二ナ

「ダン……………!!」

サツキに大きな声で呼ばれ、俺は驚き振り向いた。

そこには怒りに満ちた瞳。

お、怒っている！ サツキが怒っている……！！
これはやはり、二ナの態度に問題があるのかな？

「すまない！ サツキ！！」

俺は二ナを肩に担ぎ上げ、急いでこの場を立ち去る。

「ダン、ダン、あの子」

肩の上の二ナが話し掛けてくるが、無視して自分の屋敷に戻り、
二ナを降ろした。

「二ナ、駄目だろ」

うー！？ こ、これは……。

二ナが目をキラキラさせている。

こういう目をした時の二ナは、ろくでもない事を考えている場合が多い。

「あの子、誰？」

「あの子……？」

「さつきカタヤにいた子！」

ああ……。興味津々だな。

「サツキだ」

「サツキ？」

「カタヤの養女だ。……二ナはサツキに近付くな」

サツキに迷惑だからな。

「へえー、そうなの。へえー、ウフフ」

二ナはニヤニヤと笑いながら、俺を見上げた。

「……何だ？ 気持ち悪い」

「ウフフ、だってあの子、昔ダンが保護した迷い『子チャマ』にそ
っくりじゃない？」

チャマ？ さつきもそんな事を言っていたな。

「そうか？」

別に似てはいないと思うが。

「ウフフ。相変わらずねえ」

「なにがだ」

なんなのだ？ 二ナは。

「小さくて可愛くて、ちょっと気が強そうで、力を籠めたら簡単に壊れてしまいそうな程華奢で……、守ってあげたくなくなっちゃうの？」

……なんの事だ？

二ナが俺の腕をポンポンと叩く。

「独占欲が強い男は嫌われるわよ」

……だから、なんの事だ。

だいたい独占欲が強いのは二ナだろう。

「早く帰れ」

「嫌よ。リックが迎えに来るまで帰らない」

はあ……。

早く迎えに来て仲直りしてくれ。

「ねえ、それまでサツキの話をしてよ」

「駄目だ」

「もう、ダンったら！ ウフフフ」

変な奴だ。

早くサツキに謝りに行かねばならないのに。

サツキ、まだ怒っているかな。

はあ……。

第8話タン編

迷惑な妹（後書き）

チャマ……猫に似た（？）生物。

啞然！！

もうもう、とにかく啞然だよ！

あーんな事があつた翌日の早朝から平気な顔してうちに来るなんて、ちよつと頭おかしいんじゃない？

私は息をスウツと吸い込みダンに命じた。

「正座！！」

「……せいざ？」

ん？ あ、そうか。知らないんだ、正座。

私は床を指差し、首を傾げているダンにもう一度命じた。

「お座り！」

するとダンは一瞬キョトンとして、床の上に胡坐をかいて座つた。

「違ーうー！！」

そうじゃない！

私はドレスの裾を捲つて足を出し、その場に正座して見せた。

「こう！ こうやって座るの！」

「……………！！」

ダンが目を見開き、横を向く。

なに？ その態度！

「ダン、こつち見て！」

「サツキ……………、足が……………その……………」

はあ？ 足がどうしたって？

「ダン！ こつち見て」

「う……………」

ダンがぎこちない動きで振り向き私を見る。

「ごっちゃって座って！」

「う？ うむ……」

ダンは頷き、ようやく私を真似て正座をした。

まったくもう！ 正座一つで何分掛かってんのよ。

「日本では、悪い事した者は、正座して反省するの！」

「……うむ」

私は正座するダンの正面に椅子を置いて座り、腕を組んだ。

「何考えてるの？ 昨日あんな事があったのに」

私がそう言くと、ダンも背中を丸めて眉を下げ、上目遣いをしてきた。

「ごめん」

「『ごめん』じゃない！」

「ごめん」

聞いているの？ 人の話！

「なんなの？ あの女は！」

「ごめん」

「ちよつと胸が大きいからって、なによ！」

「ごめん」

「ごめんしか言えないの！？」

最低。もう本当に最低。馬鹿馬鹿馬鹿！

「……もうここには来ないで」

だいたい甘いお菓子が食べたいなら、彼女に買って来てもらうか作ってもらうかすればいいじゃない。

「ええ！？ そんな、サツキ！」

「そんな目をして駄目！」

捨てられた子犬か！

ダンは両手を床に付き、縋るような目で私を見た。

「ごめん。二度迷惑を掛けない。二ナにはちゃんとっておく」

二ナ？ ああ、彼女の名前か。

「駄目。さよなら」

「サツキ！」

「帰って！」

私はビシッとドアを指差した。

「サツキ……………」

だから、その目はやめてってば。

「帰って！ 帰って！！」

「……………」

ダンは溜息を吐いて、床から手を離れた。

帰る気になったんだ。フンだ！ さようなら！

そして、片膝付くような格好から立ち上が……………らない？

ダンが戸惑ったように自分の足を見る。

ん？ なによ。

「早く帰って」

「う……………、うむ」

ダンは頷き、勢いよく立ち上が。

バターン！！

……………こけた。

受け身をとって、綺麗にこけた。

ダンは足を押さえ、眉を顰めている。

そこでようやく私は気付いた。

足が痺れてるんだ……………。

あんな僅かな時間正座しただけで痺れて動けなくなるなんて、情けない。

あーあーもう！ 仕方ないなあ！

私は立ち上がり、ダンの足を思い切り踏みつけた。

「ああー！ サツキー！」

うわ。大袈裟。

痺れた時は、ここうするのが一番なんだよ。痛みで痺れなんて吹き飛ばすからね。

もう一度足を上げて。

「サツキ！」

「きゃあ！？」

な、なにすんの！？

ダンが私の足首を掴んだ！ 私はバランスを崩してダンの上に倒れる。

「ダン！ 馬鹿馬鹿馬鹿！！！」

ほんつつと、怒ったからね！

身体を起こしてダンに馬乗りになり、制裁を加えようと拳を振り上げた時。

コンコン、ガチャ。

「サツキさ……」

ドアが開いてマチルダが現れた。

マチルダは私達を見ると目を見開き、そして何故か笑顔になった。

「お客様なのですがお取り込み中のようにですし、別室で待っていただきましようか？」

お客様？ 私に？

と訊く前に、マチルダを押し退けて顔を覗かせた人物。

「二ナ！」

うわ！ 彼女だ！

ハッ！ しまった。この体勢はマズい。

ダンがボコボコにしようとしたのがバレてしまう。いや、それよりまた浮気だなんだと騒がれてしまう。

私は慌ててダンの上から退いて、彼女の様子を窺った。だけど。

彼女は怒るところか笑顔で私達に近付いてきた。

え？　なんで？

「あらまあ！　ダン！　ウフフフフ」

うわぁ……。

どうしたの……彼女？　気持ち悪い笑い方してますけど。

「昨日はごめんなさい」

え！？　謝られた？

その上、彼女は私をギュッと抱きしめた。

え？　え？

「仲良くしましょうね」

……はい！？

ダンが眉を寄せながら立ち上がった。

あ、痺れ治ったんだ。

「二ナ、サツキが苦しい」

ダンはその彼女の手を私から引き剥がした。

「あら、ごめんなさい。ウフフフフ」

……ダンの彼女って、ちょっと、いやだいな変。

迷惑なので取り敢えずお引き取りただこうとした時、マチルダが大量のケーキを載せたワゴンを押して部屋に入って来た。

そつえば、マチルダがいつの間にかいなくなってたな。

「まあ、美味しそう」

彼女が目を輝かせる。

まさか、凶々しくも食べる気？

「どうぞ。まだまだ沢山ありますから」

「マチ……！」

なんで勧めるの！？

「あら、いいのかしら？」

「ちよ」

抗議しようとした私を彼女が引つ張る。

なにすんのよ！ 乳デカ女！

彼女は無理矢理私を椅子に座らせた。

「はい。サツキ」

更に更に！ 馴れ馴れしくも名前を呼び捨てされ、フォークを握らされる。

「サツキは細すぎるわよ、沢山食べてもっと太りましょうね。ウフフフ」

……はあ！？ それは嫌みですか？

「二ナ、帰れ」

ダンが彼女に言う。

二人一緒に帰れ。

「嫌よ」

ダンと彼女は椅子に座り、競い合うように猛烈な勢いでケーキを食べ始めた。

こ、この二人って……！

「ほらほら、サツキも食べて」

呆然とする私に、彼女が笑いながら言う。

「サツキ、一口」

ダンがケーキをフォークで掬い、私の口元に寄せた。

ふ・ざ・け・る・な！

私はダンの手からフォークを叩き落とした。

「ダンったら！ ウフフフ」

……もしかして、馬鹿にされてる？

そして大量のケーキを食べた彼女は、帰りぎわに私を抱きしめて耳元でこう言った。

「私達、もう友達よね？ いえ、すぐ家族になるかしら。ウフフフ」

……なんかよく分かんないんだけど。

友達？ 誰が？ ってゆーか家族って……。

ああ、そうか。家族ぐるみのお付き合いをしましょうみたいなのやっ？

……なにそれ？ 意味分かんない。

ダンに背中を押され、彼女が部屋から出て行く。

「ごめん。サツキ」

ドアを閉め、頭を下げるダン。

「……って、ダンも帰って！」

なんで残ってんの!?

私はダンを部屋から追い出し鍵を掛けた。

お馬鹿!!

第9話タン編

異国の拷問と迷惑すぎる妹

二ナの騒動の翌日、俺は朝起きてすぐにカタヤの屋敷に向かった。昨日はサツキに失礼な事をしてしまった。

あの後、二ナが夜遅くまで居座った為、サツキに謝罪が出来なかった。まだ怒っているだろうか？

いつものように客間に入ってソファーに座っていると、すぐにサツキが来る。

サツキは部屋に入るなり、開口一番こう言った。

「セ・イザ!!」

「……………セ・イザ？」

なんだそれは。

するとサツキは床を指差した。

「座る！」

座る？

なんだか分からないが、床の上に胡坐をかいて座った。

「違ーうね!!」

違っ？

どういう事かと訊こうとした時。

「……………!!」

サ、サツキが、サツキがドレスの裾を捲って足を俺に見せた！

「こっ！ こっね、座る！」

サツキは大胆にもドレスをギリギリまで上げ、足を折り曲げて床に座る。

細く綺麗な足が目の前に……………。

う！ い、いけない。

俺は慌てて横を向いた。

「ダン、こっち見る！」

「サツキ……、足を……その……」

見せないでくれ。

「ダン！ こっち見る」

「う……」

そんな……、いや、でもサツキが言うので仕方なく、仕方なく！

俺はサツキを見た。

「こつする、座る！」

「う……？ うむ」

俺はサツキを真似て、足を折り曲げて座った。

「ニホンは悪人、セ・イザする、謝る！」

悪人……？

謝るといふのは、昨日の事だな。

やはりまだ怒っているのか。

「……うむ」

妹が迷惑を掛けて、申し訳ない。

サツキは立ち上がり、俺の正面に椅子を置いて座って腕を組んだ。

「何考える？ あの昨日のあった事」

「すまない」

「『すまない』じゃない！」

「すまない」

サツキの怒りは相当強いようだ。

「なにね？ あの女！」

「すまない」

「胸から少し大きい、なにね！」

胸から大きい……？

意味は分からないが、謝っておこつ。

「すまない」

しかしサツキは目を吊り上げ、衝撃的な一言を口にする。

「……………もう、ここに来る、しないで」

「ええ！？ そんな、サツキ！」

カタヤの屋敷に来るなと言うのか！？

な、なんとか怒りを静めないといけませんが、どうすれば……………！

「その目する、駄目！」

俺は両手を床に付き、懇願した。

「すまない。二度と迷惑は掛けない。二ナにもしっかりと言い聞かせる」

「駄目。さよならーらーね」

「サツキ！」

そんな！ 話を聞いてくれ！

「帰れ！」

サツキはビシッとドアを指差した。

「サツキ……………」

話を、話を……………。

「帰れ帰れー！！」

「……………」

……………これは、無理だ。サツキは俺の話を聞いてくれそうにはない。仕方ない。一度帰って対策を練ってからまた来よう。

俺は溜息を吐いて、床から手を離れた。

そして片膝付くような格好から立ち上が……………れない？

「……………」

なんだ？ 足が痺れて動かない。

「早い帰れ」

「う……………、うむ」

よし、勢いをつけて立ちち上がろう。

一、二、三。

バターン！！

……こけた。

咄嗟に受け身はとったものの、サツキの前で、なんてみっともない。

俺は痺れている足を手で押さえた。

この痺れをどうにかしなければ……。

そう思っていると、いきなり！ サツキが俺の足を踏んだ。

「ああー！ サツキー！！」

な、な、な、なんだ！？

痺れに痛みが加わり、俺は驚いてサツキを見る。

すると……。

「……！！」

『無』……だ。

サツキの顔には、怒りも悲しみも喜びも、何もない。

無表情に俺の足を踏んでいる。

まるでそれは、仕事と割り切り罪人に拷問をする拷問官のようだ。

ああ……、そうか、そうだった。サツキは犯罪組織の一員だったのだ。

その時に、裏切り者や捕えた者達に、こうして拷問をしていたのだろう。

この『セイザ』とは、サツキの故郷に伝わる拷問の一種なのだ。

いけない。サツキは怒りのあまり、犯罪者だった頃に戻ってしまったっている。

救わなければ！ 暗い過去からサツキを！

もう一度上げられたサツキの足を俺は掴む。

「サツキ！」

「きゃあ!？」

バランスを崩し倒れるサツキを俺は受け止めた。

「ダン！ バカバカバカバカ!!」

サツキは奇声を発しながら身体を起こし、俺に馬乗りになって拳を振り上げる。

やめる、サツキ。もうこんな事をする必要はないんだ、サツキ

!!

コンコン、ガチャ。

「サツキさ……」

その時突然、ドアが開いてマチルダが現れた。

マチルダは俺達を見ると目を見開き、そして何故か笑顔になった。

「お客様なのですがお取り込み中ですのでし、別室で待っていた
だきましようか？」

お客様？ それどころではない！

そう俺が言う前に、マチルダを押し退けて顔を覗かせた人物。

「二ナ！」

何故ここに!？ しかも、よりによってこんな時に！

二ナが満面の笑顔でサツキに近付き、サツキが俺の上から退いた。

まずい、二ナはサツキの怒りの根源だ。

サツキは二ナを潰すつもりか？

俺は体を起こし、まだ少し痺れている足を根性でねじ伏せ立ち上がろうとした。

「あらまあ！ ダン！ ウフフフフ」

二ナ、呑気に笑っていないで空気を読め！

「昨日はごめんなさい」

ニナは笑顔でサツキに謝罪し、サツキをギュッと抱きしめた。
「仲良くしましょね」

サツキが戸惑った表情を見せる。
「ん？ もしかして、元の優しいサツキに戻った……、のか？
俺は立ち上がった。」

「ニナ、サツキが苦しい」

ニナの手をサツキから引き剥がしながら、俺はサツキの様子を確認する。

「あら、ごめんなさい。ウフフフ」

眉を寄せ、首を傾げるサツキ。

「うむ。戻ったようだ。良かった。」

そこに、マチルダが大量のケーキを載せたワゴンを押して部屋に入ってきた。

「まあ、美味しそう」

ニナが目を輝かせる。

「しまった。ニナも甘いお菓子が大好きなのだ。」

カタヤの菓子が美味いと知ったらまたここに来るかもしれない。
面倒な事になる前に追い返さなくては！

「どうぞ。まだまだ沢山ありますから」

「マチ……！」

先に勧められてしまった！

「あら、いいのかしら？」

ニナは嬉しそうにサツキを引っ張り、椅子に座らせた。

「はい。サツキ」

更に、馴れ馴れしくも名前を呼び捨てし、フォークを握らせる。

「サツキは細すぎるわよ、沢山食べてもっと太りましょね。ウフフフ」

「うむ。確かに細すぎる。」

「いや、そうではなくて。」

「ニナ、帰れ」

「嫌よ」

二ナは椅子に座り、ケーキを食べ始めた。

く……！ 仕方がない。ケーキが無くなれば帰るだろう。俺も座って、少し急いでケーキを口に入れる。

「ほらほら、サツキも食べて」

ん？ ああ、サツキは二ナの図々しさに呆れて食べられないでいるのだな。

「サツキ、一口」

俺はケーキをフォークで掬い、サツキの口元に寄せた。

しかし何故か、サツキは俺の手を叩く。

「ダンッたら！ ウフフフ」

サツキは俺をチラリと見て、自分のフォークをケーキに刺して食べ始めた。

そしてすべてのケーキが無くなると、二ナは満足したのか自ら帰ると言った。

ああ、良かった。

しかし、ホッとした俺の目の前で二ナはサツキを抱きしめ、耳元でなにかを囁く。

二ナ！ また余計な事を言ったのではないだろうな！

俺は二ナの背中を押し、部屋から追い出した。

「すまない。サツキ」

ドアを閉め、サツキに頭を下げる。

「……って、ダン、帰れーっ！」

ええ！？

サツキは怒りの形相で、俺を部屋から締め出す。

サ、サツキ……！

「……………」

なんと……いう事だ。

また二ナが、サツキを怒らすような事を言ったのだな。

「サツキ……………」

客間のドアを開けようとしたが、内から鍵を掛けられたようで開かない。

「サツキ……」

……仕方ない。帰って、夜もう一度謝りに来よう。

二ナ、本当に迷惑な妹だ。

……はあ。

第10話サツキ編

どうなってんの？

朝っぱらからまた来た。

しかも寝てる。宿直帰りか。

客間のソファで鼾をかいて寝ているダン。

いや、もう、本当に、ダンの頭の中はどうなっているのかな？

何度追い返しても来るんだから、もう！

「起きて」

「う……」

「『う』じゃない！」

頬をペチペチと叩くと、ダンは薄く目を開いた。

「眠い……」

「じゃあ自分の屋敷に帰って寝なよ」

隣なんだからさあ、って言ってる尻からまた鼾？

「ちよつとダン！」

寝るな！

「駄目だ……、眠い……動けない……」

動けない？ なに甘ったれてんの？

「ダン！」

もう一度頬をペチペチしてしたら、あ！ ダンに右手首を掴まれた。

「ダン！ こら、離して」

馬鹿力！

「昨夜は……、大変だった」

ダンは目を瞑ったまま語りだした。

「なによ！？」

知らないよ、そんな事。それより離してよ！

「城の外の見回りをしていたら……、急に周りの火が消え……」
だから何よ！

「暗闇の中……、何かが……俺の背中を……」

だから……、ん？ んん？ ちよつと待って。ダンはいった
い何の話をしてるの？

急に火が消えた？ 背中を、なに？

「俺は大声で仲間助けを求めた……」

いやいやだから、背中を、なに？ 助けを求めた？

……。

それってそれって、もしかして。

「近くに居る筈なのに……、何故か誰も来ない」

「ダン！ まさか！」

それは禁断の。

『本当にあつた怖い話』ってやつ！？

あああああー！！

一気に体に寒気が走る！

私、私、駄目なんだよ！ 怖い話大嫌い！

夜一人じゃ眠れなくなる！ いや、それどころかお風呂もトイレ
も怖くて行けない。

想像しちゃうの、便器の中から手が出てきたりするところ！

赤い紙いるかって？ いらないよー！ そんなもの貰うくらいな
ら拭かずに我慢する！

「必死に……見えない敵と戦っている……、ぼおっ……と火が浮
かび上がり……、驚いて見ると……そこには……」

「やめてよ！ ちよつと、ダン！」

ヒイイ！ 駄目！ ホントに、それ以上言わないで！

左手で服を掴んで必死に揺さ振ると、ダンは眉を寄せて目を開け
た。

「……サツキ？」

「ダン！ なんでこんな」

バツターン!!

「きゃああ!!」

な、な、なにこの音!?

思わずダンにしがみ付いて音のした方を見ると……。

「え? お父様?」

全開にされたドアと、床に跪き呆然としているお父様。その後ろにはお母様とマチルダが立っていた。

お父様は私と目が合うと立ち上がり、老人とは思えない見事なフォームで走り去った。

「え? え?」

どうしたの、お父様?

ていうか、みんな揃ってなにしてんの?

啞然としていると、お母様が頬に手を当てて困ったような表情で笑った。

「まあまあ。気持ちは分かるけど、ちょっと早いでしょう? それ
は」

「お母様?」

「用意しないとね。ああ、忙しくなるわ」

お母様はブツブツと呟きながら立ち去り、マチルダがニッコリ笑ってそつとドアを閉めた。

え……、なに?

なにが。

「どうなっているのだ?」

聞こえた声に顔を上げると、ダンが眉を寄せて私を見ていた。

「……分かんない」

怖い話も吹き飛んだよ。うん、いやまあ、それは良かったけど。

なにがなんだかさっぱり分からない。
私達は首を傾げ、閉じられたドアを見つめた。

宿直帰り、いつものようにカタヤの屋敷に直接行き、重い体を客間のソファアに横たえて俺は寝ていた。

「起きるね」

「う……………」

「サツキ……………」

「『う』違っ！」

頬をバシバシと叩かれて俺は目を開けた。

「眠い……………」

「じゃあ自分、屋敷に帰る、寝る」

ああ、瞼が落ちていく。

「ちよつとダン！」

「駄目だ……………、眠い……………、動けない……………」

もうクタクタなのだ。頼むから少し寝かせてくれ。

「ダン！」

パンパンパンパンパンツッ！

……………痛い。

往復ビンタはやめてくれ。

俺はサツキの手首を掴んだ。

「ダンこら！ 離すね」

本当にもう、寝かせてくれ。

「昨夜は……………、大変だったのだ」

「なにね!？」

「城の外を見回りしていたら……………、突然周囲のかがり火が消え……………、異常な事態に俺は身構えた。」

「暗闇の中……………、何者かが……………背後から俺を……………」

斬り付けてきた。

敵は夜目がきくのか、素早い動きで的確に急所を狙ってくる。

「俺は大声で仲間に援護を求めた……」

しかし。

「近くに居る筈なのに……何故か誰も来ない」

数人の班で行動していたのだ。俺の前後には仲間がいる筈だった。

「ダン！ まさーか」

「必死に……見えない敵と戦っていると……、ぼおっ……と火が浮かび上がり……、驚いて見ると……そこには……」

隊長がランプを持って立っていた。

抜き打ち夜間訓練だったのだ。

襲ってきたのはトーラ騎士団の中でも極めて優秀な者達の集まりである特殊部隊。他の者達は皆、最初の一撃を避けきれずに気絶させられていた。

そして不甲斐ない結果に隊長はカンカンに怒り、朝までしごかれてしまった。

「やめるね！ ちょっと、ダン！」

ん？ なんだ？

サツキが俺の胸ぐらを掴んで揺さ振るってくる。

俺は仕方なく目を開けた。

「……サツキ？」

サツキ、何故涙目だ？

「ダン！ なにね、これ」

バッターン！！

「ぎゃああああー！！」

ん！？

ドア付近から聞こえた大きな音。

悲鳴を上げてしがみ付いてくるサツキを抱き止めながら、音のし

た方を見るよ……。

「え？ おとさま？」

全開にされたドアと、床に跪き呆然としているカタヤの当主。その後ろには夫人とマチルダが立っていた。

カタヤの当主は唇を噛みしめ俺を睨み、走り去った。

「え？ え？」

サツキが戸惑った声を出す。

何が起こったのだ？

啞然としてしていると、夫人が頬に手を当てて困ったような表情で笑った。

「まあまあ。気持ちは分かるけど、それはちょっと早いのではないかしら？」

「おかさま？」

「準備しなければいけないわね。ああ、忙しくなるわ」

夫人は意味不明な事を言いながら立ち去り、マチルダが笑ってそつとドアを閉めた。

これは……。

「どうなっているのだ？」

俺の眩きに反応してサツキが顔を上げる。

「……分かってんねえ」

サツキも眉を寄せ、困った顔だ。

なにがなんだかさっぱり分からない。

俺達は首を傾げ、閉じられたドアを見つめた。

「さあ！ 好きな物をいっぱい選んで」

え？ なんですか、お母様。

テーブルの上に山と積まれたカタログ。

ドレスに家具に宝石に……買ってくれるの？ って、どうしていきなり？

「これはどう？ 似合うわサツキ」

お母様はドレスのカタログを開き、ピンクの超ビラビラドレスを指差した。

うわー、少女趣味。

無理。それは無理ですお母様。

「ああ、これもいいわね。これもこれも……マチルダ」

「はい」

サツと私達の前に立ったマチルダに、お母様はカタログを指差しながら言った。

「ここからここまで全部注文して」

うわあ、セレブ買いだ。さすが金持ち。

「サツキも選んで」

えー、そうですか？ では。

私は積まれたカタログから一冊選んで指差した。

「ここからここまで全部」

「はい。サツキ様」

マチルダが頷き、お母様が笑顔になる。

凄いなあ、宝石をセレブ買いしても怒られないなんて。日本円で言ったら何億もするんじゃない？

「サツキ、これも」

お母様が家具のカタログを開く。

細工が綺麗なドレスサーやベッドの絵が描いてあるけど……。
「要らない」

髪は結える程長くないし、化粧もあんまりしないからドレスサーは要らない。

ベッドも今使ってるのも十分広いのに、絵の通りだとすればコレかなーり大きいよ。五人眠っても余裕がありそうだもん。

だけとお母様は珍しく怒った顔をして、私の額を人差し指でチョンと突いた。

「サツキ駄目よ。これが一番大事なのだから」

「大事？　なんで？」

「これにしましょう。マチルダ」

「はい」

私の疑問を華麗に無視してお母様を選んだのは、天蓋付きお姫様ベッド特大サイズ。

それからお母様は、ドレスサーと櫛なんかの小物類、下着や靴やバッグにやたらセクシーなネグリジェまでガンガン注文しまくった。

「ああ、これでいつでも大丈夫ね。ダンの挨拶はいつかしら」

満足げな笑みを浮かべながら、お母様はお茶を飲む。

ん？　ダンの挨拶？　何故今ダンの話になるの？

今日は朝から晩まで仕事が忙しいらしく、珍しく来ていないのに、思い出させないでお母様。

「お隣というのは運が良かったわね、あなた」

あ、お父様居たんだった。

もの凄く静かにソファアの端っこに座っていたから忘れてた。

でもお父様、なんか顔色悪くない？

私は立ち上がってお父様の前に行き、そこで跪いてお父様の顔を覗き込んだ。

「お父様、気分悪いの？」

お父様は力なく首を振り、私の手を握りしめた。

「お父様？」

「サツキ……」

え？ ちよつとちよつとどうしたの？ お父様が泣き出しちゃったよ。

「お父様？」

「サツキ！」

お父様は私をギュツと抱きしめる。

「手に入ったばかりなのに、こんなに早く盗まれたなんて……！」

……はい？ 盗まれた？

「仕方がないでしょう？ こういう事は」

苦笑するお母様。

えーと、なんの話かな？

「大事にしていたのに、突然来た男が盗って行った」

……突然来た男が盗む？ 盗む盗む……ってまさか！？

「え！？」

この屋敷、泥棒が入ったの！？

えー、いつの間に。

お父様の大事にしていた物が盗まれちゃったんだ。

「ほら、そんな事言うからサツキが驚いているでしょう？」

いや、本当に驚き。

あ、でもだからこのカタログなんだ。色々盗まれたから新しいの買っつて事か。

お母様ったら、私に心配掛けないように黙っていたんだね。

でもベッドとかは盗まれてないから要らないんじゃないかな？

ついでだから家の中の物を一新しちゃおう！ って思ってたのかなあ。

「うつつ、サツキ」

お父様が私の肩に顔を押し付けて嗚咽する。

うーん、余程大切にしていたものを盗られたんだ。可哀想、お父

様。

「そうだ！ 色々新しく買うのもいいけど、根本的な問題を解決しなければいけないよ。」

「盗まれないようにしようよ。」

「セキユリテイだよ！」

「だいたいこの屋敷は門も開けっ放しの事が多いし、警戒心が無すぎるんだよね。」

「盗まれないように……？」

「お父様が顔を上げる。」

「そう。ちよつと屋敷を新しくして、使用人も増やして。大勢住んでも大丈夫でしょ？」

「この広い屋敷に使用人が二人って少なすぎだよ。」

「あと簡単に泥棒が入って来られないように改築、門とかドアとか窓とかしっかりと鍵付きにしよう。」

「私がそう提案すると、お父様は目を見開いた。」

「サツキ！」

「私をギュッと抱きしめてお父様はお母様を見る。」

「あれ？ お母様が泣いてる。どうして？」

「素晴らしい考えよ。ありがとうサツキ」

「お母様はハンカチで涙を拭きながら笑った。」

「早速今夜にでも話をつけるか」

「いえ、その前にワーガル夫妻に味方になってもらいましょう」

「そうだな。あいつが嫌がったら説得してもらおう」

「ワーガルってダンの両親？ なんて？ 『あいつ』ってダンのことかなあ。」

「じゃあダンがうちの改築を嫌がる……音がうるさいとか苦情を言うってくるって事？」

「手紙を書こう」

「お父様は立ち上がり、部屋を飛び出して行った。」

「おーい、お父様あ。」

「サツキ」

お母様が手招きをする。

「なに？」

お母様の隣に座ったら、頭を撫でられた。

「なんて優しい子」

はあ……、ありがとう？

「あなたが来てくれて、私達幸せよ」

うん。私も凄く幸せだよ。

「大好き、お母様」

「サツキ……！」

お母様は私を抱きしめて頬擦りをする。

あ、いい匂い。安らぐなあ。

お父様もお母様も、本当にいい人で大好き。

こないない人達から盗みを働くなんて、どこの誰だか知らないけれど最低！

早くセキュリティ強化しようね！ ダンが「うるさい」って文句言ってきたら、私が怒ってあげるから。

ところで、さつきダンの両親に手紙書くって言ってたけど……、ジャングルに手紙って届くのかな？

愛する息子ダンへ

頑張っていますね。

こちらは今、作物の収穫で大忙しです。

ところで、カタヤ家のお嬢さんと仲良くさせていただいているようですね。

屋敷の事はカタヤ夫妻と相談して決めなさい。

最後に、あなたは騎士なのでから騎士らしい振る舞いを。

両親

より

「……なんだこれは」

田舎へ引越して以来一度も連絡が無かった両親から、初めて手紙が届いた。

しかしこの内容は……、なんだ？

『頑張っていますね』？ 何故断定的なのだ。

『カタヤ家のお嬢さん』？ まあ確かに友人ではあるが。

……二ナか？ サツキの事を伝えたのは。まったく余計な事をして。

屋敷の事を相談、というのはなんだ？

最後の騎士らしい振る舞いというのもいい……。

「……うーむ」

何故このような難解な手紙を寄越すのだ。

もっと分かりやすく書けるだろう、子供では無いのだから。

それに便箋一枚に走り書きとは、失礼極まりない。

……はあ、まあいい。どうせたいした意味は無いのだろう。もし重要な事柄を伝えたいのなら、あの両親であっても、こんな紙切れ一枚で連絡してくる筈はない。

それより早く甘い物が食べたい。

俺は手紙を引き出しに片付け、カタヤの屋敷へと向かった。

あー、眠い。

夜もすっかり寝ているのに、なんでこんなに眠いんだろ。

やっぱりこのポカポカ陽気が原因かなあ。

凄いよね、ポカポカパワー。人を眠りに誘う力が秘められてるよねー。

あー駄目。ちょっと昼寝しよ。

ベッドに潜り込んで……。

おやすみなさい。

トントントン。

この叩き方はマチルダだ。って事はまさか……。

「サツキ様、ダン様がおみえになりましたよ」

ドアを開けて入って来たマチルダ。

もっ！ こんな時に。

「私、寝るから」

「駄目ですよ。ほら立って下さい」

マチルダは私をベッドから引き摺り出して、乱れた髪とドレスをサツと整えた。

ふあーああ、眠いよ。欠伸が止まんないよ。

「さあ、サツキ様」

背中を押され、私は渋谷客間に行った。

「サツキ」

あーはいはい。こんにちは。

もっいいいや、ここで寝よ。

私はソファ―に横になり眠った。

「サツキ、起きて」

「……ん？」

この優しい声は、お母様？

「う……、まだ眠いよう、お母様」

「まあ、サツキったら」

クスクスと笑うお母様。

私は目を擦りながら体を起こした。

あれ、お父様も居る。

「サツキ、ダン、見てくれ」

お父様は満面の笑顔で、手に持っていた大きな紙をテーブルに広げる。

ん？ これは……凶面？

「これが新しい屋敷だ」

え？ ああ、セキュリティ強化の……って、なんか部屋数めっちゃくちや増えてない？

そう思っていると、お父様は凶面を指差して衝撃的な一言を言った。

「ダンの屋敷とこの屋敷を繋ぎ」

「なに！？」

「え……？」

ダンと私が同時に声をあげる。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ 何故ここで俺の屋敷が出てくる？」
ダンが焦った感じでお父様に詰め寄った。

「ダンの両親と話は終わっている」

「両親が！？」

「何よりサツキの出した考えだぞ。嫌なのか？」

「サツキが!？」

ダンが目を見開いて私を見る。

えーと……?」

セキュリティ強化の話はしたけど、なんでこんな話になってるの？
てゆーか寝起きで頭が上手く働かないんですけど。

「いや、しかしこれは」

ドンッ!!

お父様が拳でテーブルを叩いた。

「ダンは私達から、夢も望みも奪う気か!」

え……、夢と望み？

お父様はダンを睨み付け、肩で息をする。

ダンが唾然としているよ。まあ、そつだよね。私もびっくり。
それにしても……。

「お父様の夢？」

「ああそつだ! 大きな屋敷にして一緒に住もう!」

うーん。お父様つたら、こんな大きな屋敷に住んでいて、更に大
きい屋敷に住みたいの？

ダンの両親との話が終わってるって、セキュリティ強化ついでに
隣の屋敷も買っちゃったのかあ。

ん? あれ? じゃあダンはこれから何処に住むの? 引つ越す
のかな。

……ダンが引つ越す?

……。

そつだよね、ダンの屋敷はお父様が買っちゃったし。

……。

へえ、まあ迷惑だったし、うん。

……………。

どっか行っちゃうんだ。もうお菓子食べに来なくなるのかな？
まあ迷惑だったし、彼女いるし。

うん、そう。彼女いるし。

……………。

「えええええー！！」

うわ！ ダン、いきなり叫ばないでよ！ びっくりした！

「な、ななななにを！？」

『何を』って何が！？

ダンがゆつくりと私達を見回す。

「ダン？」

「サツキ、大変だ！ お、俺達がけけけけつこー！」

え？ コケコッコ？ ニワトリの真似？ なに言ってるんだろ。

あ、そうか。屋敷をジャングルの両親に勝手に売られて動揺して
るんだ。

「大変だね」

「大変だ！」

ダンは可哀想な程おろおろとしている。

そんなダンの肩にお父様が手を置き……というかグツと掴んだ。

「いいだろう、ダン」

「駄目です！」

「な！？」

ダンに即答されたお父様が、信じられないという表情で後ろによ
るめいた。

「違うんです！ サツキと俺はそんなの関係ない！」

ダンは両手を振り回しながら叫ぶように言った。

えーと、『そんなの関係ない』って、つまり『お前の夢など知っ

たこつちやねえ！』って事？

そりや確かに大きな屋敷に住みたいなんて子供っぽい夢だけどさあ、でも私はお父様のそういう少年のようなところもいいと思うよ。屋敷売られたダンには迷惑だろうけど。

「なにを今更まさか！ 遊びではないのだぞダン！」

お父様がダンの胸ぐらを掴む。

うん。遊びで大金出して隣家買ったりしないよね。

分かってるよ、お父様が本気で夢を追いかけてるって。

でも喧嘩は駄目だよ、話合おうよ。

「いや、だから……」

ダンが眉を寄せ、私を見る。

「……………」

「……………」

はあ？ 何その目は。

なんで私がガン飛ばされなきゃいけないの？ まるで私が悪いみたいじゃない。

それに、うん、そうだよ！ よく考えたら、屋敷を勝手に売り払ったダンの両親が一番悪いんじゃない！

「ごめん！ サツキ！」

ダンは唇を噛みしめ、お父様の手を引き剥がして猛ダッシュで部屋を出て行く。

「ダン、待ってちょうだい！」

お母様がその後を追いかけて走るが、すぐに戻って来て首を振った。

「くそ！ 分からない人だ！」

ドン！ っと、お父様がまたテーブルを叩く。

……………。

えー……と。なんだろ、この重苦しい雰囲気は。なんだかもの凄く気まずいなあ。

「サツキ……」

お母様が近付いてきて私を抱きしめる。

う。う。……。

サツキ、なかなか来ないな。

いつも俺がこうして客間で待っているとすぐ来るのに、どうしたのか。

少々心配になりマチルダを呼ぼうかと立ち上がるうとした時、ドアが開いてサツキが入って来た。

ん？ サツキが何故かフラフラしている。

「サツキ」

声を掛けるとサツキは力なく俺に右手を振りソファーに寝転んだ……と思ったら、すぐに寝息が聞こえる。

眠かったのか。もしかして昼寝中だったのかもかもしれない。

それにしても……。

サツキ、なんて無防備な寝姿だ。

余程眠かったのか。起こすのは可哀想だな。

サツキの顔は実に幸せそうで、見ていると暖かい気持ちになってくる。

少し開いた口も小さな鼾も、なんて愛らしい　愛らしい!？

な！ え！ お、おお、おおお俺は何を!？

自分の考えていた事に愕然としてサツキから目を逸らす。

そんな、愛らしいなんて。俺は少し疲れているのどろろか？　い

や、でも、これは……。

視線を戻すと　幸せそうな寝顔。

やはりこれは……。

トントントン。

突然聞こえたノックに、俺は驚いてビクリとした。

ドアが開いて入って来たのはカタヤ夫妻とマチルダだ。

カタヤの当主は手に筒状に丸めた大きな紙を持っている。

「こんにちは、ダン」

カタヤ夫人がにこやかに挨拶してきたので、おれも軽く頭を下げて挨拶を返した。

「こ、こんにちは、カタヤ夫人」

「あらダン、『カタヤ夫人』だなんて堅苦しい。昔のように『おじ様・おば様』って呼んでくれて構わないのよ。いえ、違うわ『お義父様・お義母』ね。ねえ、あなた」

……お義父様、お義母？ どういう意味だ？

「まだ早い。『おじ様』と呼びなさい」

おじ様……、確かに子供の頃はそう呼んでいたが……。

「分かったか、ダン」

「はあ……」

正直よく分からないが、カタヤの当主がそういうのなら、おじ様・おば様と呼ぼう。

「あら、サツキは寝ているの？」

「え？ はい」

カタヤ夫人……いや、おば様はサツキに近付き肩を揺さ振る。

「サツキ、起きて」

「う……、まだ眠いねえ、おかさま」

子供のようにあどけなく、舌足らずな感じでぐずるサツキ。

なんて可愛 違う！ いや、違わないが、そうではなくて！

う。落ち着け自分。

「まあ、サツキったら」

おば様がクスクスと笑うと、サツキが大きな欠伸をして目を擦りながら体を起こした。

まだ寝ぼけている様子でポーと部屋の中をみまわして、サツキはもう一度大きな欠伸をした。

「サツキ、ダン、見てくれ」

サツキが起きた事を確認し、おじ様は手に持っていた大きな紙を

テーブルに広げた。

これは、図面？

「これが新しい屋敷だ」

ほお、屋敷を建て直すのか。

それにしてもこれは大きすぎないか？ 敷地内にこの建物が入るのだろうか？

そう疑問を感じていると、おじ様が衝撃的な言葉を口にした。

「ダンの屋敷とこの屋敷を繋ぎ」

「なに！？」

「え……？」

サツキと俺が同時に声をあげる。

「ちよ、ちよっと待って下さい！ 何故ここで俺の屋敷が出てくるのですか？」

「ダンの両親と、話についている」

「両親が！？」

どういう事だ！ 両親が！？

つまりはカタヤに屋敷を売ったのか！？

あの親、何て勝手な事をしてくれるのだ！

「何よりサツキの出した考えだぞ。嫌なのか？」

「サツキが！？」

な、何故サツキが！？

うちを欲しがったのか、サツキが！

カタヤの屋敷はうちより大きいのに、まだ更に大きな屋敷に住みたいと言うのか！？

「いや、しかしこれは」

ドンッ！！

おじ様が拳でテーブルを叩く。

「ダン是我々から、夢も希望も奪う気か！」

え……、夢と希望？

俺を睨み付け、肩で息をするおじ様。

な、何故俺が怒られなければならない？

「おとさま、夢？」

「ああそうだ！ 大きな屋敷にして一緒に住もう！」

サツキもおじ様も建て直す気満々なのだな。

どうすれば良いのか……。諦めて騎士の宿舎にでも住むか？

いや、冷静になるんだ。

まだ口約束のみで契約を交わしていないかもしれない。そうだ、

その可能性はある。

「あの」

「ダン」

おじ様に確認しようとした時、いつの間に近付いていたのか、俺の前に立ったおば様が困ったような顔で話しかけてきた。

「ダン、私達の気持ちも考えてくれない？」

「気持ち……？」

それならば、いきなり両親に住みかを売り飛ばされた俺の気持ちも考えて欲しい。

「いくら隣とはいえ、可愛い娘がいなくなるのは辛いわ」

……………。

ん？ なんの話だ？

「娘がいなくなる？」

娘とはサツキの事だろう？ それと今話している事と、どういう繋がりがあるのだ？

しかもサツキがいなくなるとは、どういう意味だ。

「確かに新婚生活をサツキと二人でというあなたの気持ちも分かるけど」

……。

なんだって？ 新婚生活？ サツキが、誰と？
「屋敷を一つにして、あなたとサツキが結婚しても一緒に住みたいの」

あなたとサツキ……？

…… 『あなた』とは……俺だな。

あなた　つまり俺とサツキが？
結婚しても。

俺とサツキが……結婚しても。

俺とサツキが　結婚！？

「えええええー！！」

「な、ななななにを！？」

言っているのだ！

冗談か？ 冗談なのだな！

しかしおじ様もおば様も真剣な表情だ。

「ダン？」

これはまさか、とんでもない勘違いをされているのではないか！？

「サツキ大変だ、お、俺達がけけけ結婚と！」

「大変だね」

「大変だ！」

誤解をとかねばならない。

そんな焦る俺の肩をおじ様がグッと掴む。

「いいだろう、ダン」

「駄目です！」

「な！？」

俺が即答すると、おじ様は信じられないという表情で後ろによるめいた。

「違います！ サツキと俺はそんな関係ではないのです！」

俺達は友人で、それに……それにサツキには好きな人がいるんだ！

「今更なにを！ まさかダン、遊びだったのではないだろうな！」

え！？ そんな、『遊び』だなんてそんな訳ないだろう！

サツキはこんなに可愛くて優しく愛らしくて……いやいや俺は何を言っているのだ！

「いや、だから……！」

どう説明すれば良いのか。

俺はサツキを見た。

「……………」

「……………」

怒っている、サツキが。

眉を寄せ、俺を睨み付けている。

それはそうだろう。サツキには好きな人がいるのだから、俺なんかと誤解されたら不機嫌にもなるだろう。

でも……いや、何を考えているのだ俺は！

「すまない！ サツキ！」

おじ様の手を引き剥がし、俺は走った。

「ダン、待ってちょうだい！」

おば様の声が聞こえたが、止まる事も振り返る事もできない。

サツキ……俺は……！

乱暴にドアを開け、庭を走り、俺は自分の屋敷に逃げるように戻った。

ダンが来ない。

追い返しても追い返してもしつこくうちに来ていたくせに、もう五日も来ない。

やっぱり屋敷を売られたのがショックだったのかな？

私と違って住み慣れた場所を去るのは、ダンにとって辛い事なんだね。

あれからお父様は凄く怒っているから、ダンを強制退去させるかもしれない。

そうするとダンは何処に行くんだろ。

ベッドでゴロゴロしながらそんな事を考えていたら、ノックの音が聞こえてマチルダが入ってきた。

一瞬ダンの来訪を告げに来たのかと思ったけど、マチルダの手にはお盆が載ってて、その上には紅茶とケーキがあった。

「サツキ様、どうぞ」

マチルダはサイドテーブルに紅茶とケーキを置く。

ケーキ……。

ダンってば毎日うちで甘いお菓子を食べてたから、今頃禁断症状で苦しんでないかな。

……持って行ってあげようかな。

でも私は言わば敵の娘、歓迎される訳ないよね。

そんな事考えながらじつとケーキを見ていると、不意に声が聞こえた。

「意見が合わない時もあります。でもそれも二人なら分かりあえる。愛し合っているからなのです」

……はい？

顔を上げるとマチルダが微笑んでいる。

そしてドアのところにも、いつの間にかヤンが立っていた。

「ダン様の屋敷に行つて、話し合いをして下さい。愛を持っていればきつと気持ちに通じます」

愛を持って……。

ああ、そうか。つまり自分達夫婦を例に話し合いの大切さを説いているんだね。そして慈愛の精神があれば気持ちは通じる……か。

でもさあ、そんな綺麗事言われてもどうすればいいのかわかんないよ。

「旦那様も奥様も、みんなで新しい屋敷に一緒に住みましょう」

お父様の夢だから叶えてあげたいよ、私も。

新しい大きな屋敷と一緒に……、ん？

ちよつと待つて。

私は顎に手を当て、お父様が見せてくれた図面を思い出した。

そうだ、新しい屋敷は確か部屋数がめちゃうくちや増えていた。という事は……。

私は勢いよく立ち上がり、走つた。

そうだ！ その手があつた！

ダンが私の考えを受け入れさえしてくれたら、問題はすべて解決する。

玄関から外に出て、お隣へ。

門を勝手に開けて庭を走り、ダンの屋敷のドアの前に立って数回深呼吸。気合いを入れる。

「よし！いくぞ！」

私は背伸びをして、少し高い位置にあるドアノックを握つた。

俺はなんて馬鹿なのだろう。

年頃の娘の居る屋敷を度々訪問するなど非常識だった。誤解されても仕方ない。少し考えれば分かる事なのに……。

両親からの手紙は、おそらくこの事を指摘していたのだろう。ベッドに寝転がり、俺は溜息を吐く。

騎士らしい振る舞い……か。

うむ、そうだな。騎士らしく潔く サツキから離れよう。

この屋敷を手放す決心はついた。昨日、騎士宿舎を借りる手続きもした。

隊長は『お前、自分が伯爵様だと分かっているか？』と呆れていたが、だからなんだ。伯爵は騎士宿舎に住んではいけないという規則でもあるというのか？ そんなものは無いだろう。

だいたい爵位など父さんから引き継いだけで、己の功績で手に入れたものでもあるまいし、俺にとっては意味無いものだ。

後は身の回りの物を鞆に詰め込んで出て行くだけ。

そうだ、今夜にでも出て行こう。こういうことは、早めに決行するのが一番だ。

サツキは俺とでもう顔も合わせたくないだろうから静かに……。

……サツキ。

もう会えないのか。

いや、これも自分の軽率な行動が招いた結果、自業自得だ。

サツキには好きな人がいる。俺の存在は迷惑なだけだ。

でも。

サツキ……。

最後に一目、遠くから見るだけでも……いや、駄目だ。

未練がましい行動をしてはいけない。騎士らしく、潔く、だ。だが……。

ギョツと目を瞑り頭を振るが、サツキの笑顔が頭の中から離れない。

折れそうなほど華奢な体、短い艶やかな黒髪、つぶらな黒い瞳、可愛い唇。暗い過去にも負けずに、いつも明るいサツキ。優しく愛らしくて　だから駄目だ！　俺は何を想像している。

両手で自分の頬を叩き、頭を掻き毟る。

仕方がないのだ、俺は離れなくてはならない。もう忘れるんだ。

サツキは他の誰かが好きなのだから。そう、他の男が……。

ダン……ダン！

ああ、幻聴まで聞こえるではないか。これはどういうことだ。

俺の頭はどうにかなってしまったのか？

サツキ……。

会いたい。

トントントン。

私は背伸びしてダンの屋敷のドアノッカーを叩いた。
でも応答無し。

トントントン。

もう一回叩いたけどやっぱり応答無し。

うーん、居ない？ いや、聞こえて無いのかもしれない。

よく考えたらさあ、このドアノッカーって音小さいよね。こんな
でっかい屋敷なのに、こんな小さい音聞こえる訳ないじゃない！

よし、ドアを開けよう。

ドアノブを掴んで引く張った……けど開かない。押ししても開か
ない。

鍵が掛かっているのか。

「ダンー！ ダンー！！」

呼んでみても返事なし。

私はダンの名前を呼びながら屋敷の外壁に沿って歩いた。

「おい、ダン！ 居ないのー？」

うーん、やっぱり居ない？ 帰ろっかなあ……て、あ！ 窓が開い
てる！

なんだ、居るんじゃない。

窓から中を覗くと、大きなベッドの上でうつ伏せに寝ているダン
を見付けた。

「ダン！」

あれ？ 起きない。熟睡してるのかな。

私は窓をよじ登って部屋の中に入り、ベッドに上がってダンの体を揺さ振った。

「ダン、起きてよダン！」

するとダンがゆっくり顔を上げ……飛んだ。

正確にはジャンプして後ろに下がったんだけど、ジャンプ力が凄くて一瞬飛んだように見えた。

ベッドがボヨンボヨン波打ってるよ。

「サ、サツキ、ここにどうして」

ダンは小刻みに震えながら私をじっと見る。

もしかして、もの凄く警戒されてる？

何しにきやがった！ とか思ってるのかな。

「ダン、話があるの」

「話……？」

「うん。あのね」

私は這うようにしてダンに一步近付いた。

「一緒に住もうよ」

「え……？」

「新しい屋敷にダンも一緒に住もうよ」

あれだけ部屋があったらダン一人くらい下宿させたって大丈夫だよね。

ちよつと建て替えちゃうけど、同じ場所に住めるんだからダンにとつてもいい筈。

「優しい私、ナイスアイデア！ これで問題は解決だよ。」

私は満面の笑顔でダンに言った。

「……………」

ん？ ……嫌がってる？ ダンが眉を寄せて動かない。

ちよっとちよっと！ 私の素晴らしい提案にケチ付けるっていうね！？

プチツとキレそうになったけど、ううん、駄目。冷静にならなきゃ。

お父様の夢が掛かっているんだから、ここは根気よく説得だよ！

「ダン、一緒に住もうよ」

ダンは考えている感じだったけど、少ししたら首を横に振った。

「駄目だ」

う。手強い。ダンのくせに。

えーとえーと、どう言えば分かってもらえるかなあ。

「一つ屋根の下、ダンと住みたいな」

和気あいあいみたいな感じ？ きつと楽しいよ。

お菓子だつて食べ放題なんだから！

「……………」

あれ？ ダンが固まった。

どうしたの？ 駄目なのかなあ。

「ダン……………」

「えええええー！！」

うわあ！ びっくりした。

なにになに？ 急に叫んで。

ダンは真っ赤になって後退る。

うん？ 怒ってるのかな。

でもここで引き下がれないよ。

「待って！」

えい！ と飛び付いて逃げるダンを捕まえた。

「お願いダン」

上目遣いでダンを見つめる。

日本にいた時、テレビでタレントさんが『女の上目遣いに男は弱い』って言ってたから、きつとダンもコロっといく筈だよな！

じくっとダンの目を見つめ続ける。

ダンも私の目を見つめる。

「……………」

おーい、まだあ？

早く何とか言っつてよ。首が痛い。

「ごめん！ サツキ！」

うぎゃああああー！！

痛、苦し、息、息が出来ない！！

ダンが私の体をギュウギュウ締める。

何で！？ 苦しい！ 殺されるの、私！　そこまで憎まれてるの！？

あ……、力が弱まった。

ぶはあ！　息が出来る。　はあ苦しかった。

零れた涙をダンがごつい指で拭った。

う……、危うく死ぬところだった。

ダンがここまで怒ってるなんて……そっか、もう無理だね。　いい考えだと思ったのに残念だよ。

そっか……うん……仕方ないよね……。

「サツキ、分かった」

そっか……分かった……分かった！？

「え！？　本当？」

ダンは穏やかな表情で頷いた。

「今からおじ様とおば様に挨拶に行こう」

「……………」

「サツキ？」

本当に…………？ ダン、分かってくれたんだ。

「やったあ！」

嬉しさのあまりダンのホッペにチュツとキスした。

あ、ダンったら茹でダコみたいになって俯いちゃった。うん、可愛いじゃない！

「用意するから少し待っていてくれ」

「うん」

そうだよ。寝起きだから顔洗ったりしなきゃね。

ダンに客間っぽい所に連れて行かれて、私はそこでダンの身支度が整うまで待った。

暫くして来たダンは、まるでパーティーにでも行くような格好してたけど…………何でかなあ。ま、いっか。

「サツキ、行こう」

「うん」

ダンが手を差し出してきた。

え？ 手を繋ぎたいの？

子供みたいな所があるんだね。仕方ないなあ、ダンは。ダンの掌に、自分の掌をのせる。

よし、行こう！ カタヤの屋敷へ！

お父様、喜んでくれるかな？

第14話ダン編

大胆な告白

うつ伏せになって枕に顔を埋め、俺は溜息を吐く。

ああ、幻聴が聞こえる。

サツキ……。

「ダン、起きるねダン」

ん？ 背中を叩かれている……？

それにやけにはつきりとした幻聴だな。

……いや、違う。まさかこれは現実か？

ゆっくりと顔を上げると、サツキの顔が目の前に……。

驚いた俺は、咄嗟に後ろに飛びすさった。

「サ、サツキ、どうしてここに」

幻ではない！ 本物のサツキだ。

しかしどうして……。

「話があるね」

「話……？」

「うん。あのねえ」

サツキが這うようにして俺に近付く。

「一緒、住むね」

「え……？」

「新しい屋敷、ダン一緒、住むね」

一緒に住む？ どういう意味だ。

「ね」

いや、『ね』と言われても……。

「ダン、一緒、住むね」

サツキは繰り返す。

もしかして……、新しい屋敷に俺も一緒に住もうと言っているのか？

「駄目だ」

そんな事すれば、また誤解される。

俺達は離れた方がいいんだ。

ありがとう、サツキ。最後に会えて良かった。

さようなら。

俺が覚悟を決め別れを告げようとした時、サツキが口を開いた。

「屋敷に住む。ダンの下に一つになりたい」

……え？

俺の下に一つになりたい？

何だそれは。

サツキを見つめて考える。

俺の下に一つ……。うーむ。

俺の下に一つになる……。つまり。

俺の下になって一つ……。

「えええええー!!」

それは、え、いや、まさか、そういうことなのか!? 何故!

「待つね!」

思わず後ずさる俺に、サツキが勢いよく抱きついてきた。

「お願い、ダン」

潤んだ瞳で見上げてくるサツキ。

そんな……。やめてくれ……。どうして……。サツキには好きな人が……。

そこで俺はハツとした。

もしかして、いやでも、そうとしか考えられない。何ということだ！

サツキが好きなのは……俺だったのか！

そうだ！ よく考えれば分かったのに！

カタヤの屋敷に出入りしているのは俺しかない。

サツキは口には出さないけど、一生懸命俺に好きだと訴えていたんだ。

それなのに鈍い俺は気付かずに……、そうか最近機嫌が悪かったのも、俺がいつまでたってもサツキの想いに気付かないからイライラしていたのだな。

そして、屋敷を買収して俺と結婚するという強行手段に出たのか！

「すまなかった、サツキ！」

ギュッとサツキを抱きしめる。

ああ、なんて愛しい。

サツキの目から流れる大粒の涙を俺は指で拭いた。今、気付いた。

俺は サツキを愛している！

自分の気持ちに気付かないなんて、俺は馬鹿な男だ。こんなにサツキを泣かせて……。

サツキは頬を赤く染め、俺に縋り付いている。

「サツキ、分かった」

受け止めよう、この想い。

「え！？ 本当？」

ああ。結婚しよう。

「今からおじ様とおば様に挨拶に行こう」

「……………」

「サツキ？」

サツキが俺を黙って見つめている……………と思っただら次の瞬間。

「やったあ！」

子供のように両手を上げて飛び上がり、サツキは俺の頬に口付けた。

う！ サツキ。先程の大胆な告白といい、積極的なところもなんて可愛いのだ。

「準備するから少し待っていてくれないか」

「うん」

居間にサツキを連れて行き、そこで身支度が整うまで待つてくれるようお願いして、俺は急いで服を着替えたり顔を洗ったりした。結婚の挨拶に行くのだから、それなりの格好をしないとイケないな。

鏡で姿を確認して、俺はサツキの元に向かう。

「行こうか」

「うん」

手を差し出すと、サツキが笑顔で俺の手を握る。

この小さな手を、笑顔を、俺はこの先ずっと守っていつ。

手を、心を繋いで俺達は歩く。

二人の明るい未来へと。

第15話 サツキ編

手が掛かる下宿人

「おはようございます」

マチルダに揺さ振られ、私は目を覚ました。

「……………」

部屋の中が暗いよ、マチルダ。

時計を見ると……………あー、やっぱり五時三十分。

この世界の時間も日本と同じ二十四時間制なんだよね。

覚える手間が省けて良かった……………って、今はそんな話じゃなくて。

「眠い」

「駄目です」

う。掛け布を引つpegがされてベッドから引き摺り下ろされた。

仕方なく顔を洗って着替えて髪も整えて、部屋を出る。

うー。眠い。なんで私がこんなに早く起きなきゃいけないの！

まったく、こんなに大変だって知ってたら、下宿を勧めなかったのに。

私はダンの使っている部屋の前に着くと、ノックも無しにドアを開けた。

「こら！ 起きろ！」

繰り返し言いながらベッドまで行く。

「起きて、朝だよ。仕事に遅れるよ」

今日は早出の日なんだからね！

ベッドに上がり、掛け布に包まるダンを何度も叩くが反応無し。

本っっ当にもう！

ダンってなかなか起きてくれないんだよね。

だから忙しいマチルダが、私にダンを押し付けてくるんだよ。

「起きてってば！」

必殺ヒップアタック！

「おはよう、サツキ」

ようやくダンが目を開けた。

毎日毎日、ヒップアタックでしか起きないなんて……はあ、疲れ
る。

体を起こしたダンが、私の手を握って甲にチュツとする。

……起こしに来る度になんて手にキス？ まあいいけど。

「ほら、着替えて」

ベッドから下り、テーブルの上に用意されている騎士の制服をダ
ンに渡して私は背中を向ける。

そのまま少し待っている衣擦れの音が止み、振り向くとダンが
着替え終わっていた。

着替え終わっていたんだけど……、どうしてヨレヨレ？ せつか
く格好いい制服なのに。

手をチヨイチヨイと振ると、ダンが屈む。

襟を整え皺になってる部分を引っ張って伸ばし、洗面所に連れて
行った。

「顔洗って」

桶に入った水で顔を洗わせ拭いてあげ、髪を梳かしてあげて
っってお前は子供か！

ダンってば、よく今まで一人でやってこられたね。服一つ一人じ
や満足に着られないのに。

食堂に連れて行って、一緒に朝ご飯を食べる。

その後お茶を飲んでいると、まだ早朝だというのに人がぞろぞろ
やってきて、工事が始まった。

うーん、なんか凄いですピードで改築されていくなあ。

うちもダンの屋敷もそれほど劇的に変わるわけじゃないみたいだ
から、結構早く工事終わるかな？

ダンがうちに下宿するのを決めた日、その事をお父様お母様に言

つたら二人とも凄く喜んでくれた。

そして速攻でマチルダに大工さんを呼びにいかせ、ダンの荷物をうちの屋敷に運んで、もうその日からガンガン工事しはじめたんだよね。

お父様つたら「早く完成させる」って言って、凄く張り切ってるよ。

そんなに大きな屋敷になるのが嬉しいのかな？

それにしても……。私は頼杖についてダンを見る。

朝ごはん食べた直後によくこれだけのケーキがお腹に入るよね。寝起きとは思えない食べっぷりだよ。

思わずじーっと見ていると、ダンが顔を上げて時計をチラリと確認した。

あ、出勤時間だ。

ダンはテーブルに残っていたケーキを綺麗に食べて立ち上がった。私も立ち上がり、ダンをもう一度洗面所に連れて行って歯磨きさせてしっかり身だしなみチェック。

うん。いいね。

玄関に行つて、私は手を振った。

「いつてらっしゃい」

早く行つてよ。私、もう一度寝るんだから。

「うむ」

ダンが頷いて私の手を取り甲にキスし、背を向けて歩いて行く。だからなんでキス？

まあ……。いいけど、ね。

朝、目が覚めた俺は、まず時計を見た。

五時か……。起きなければならぬな。

ベッドから下りて、勤務に備えて軽く体をほぐす。

すっかり準備をしておかないと、いざという時に動けなかったり怪我をする恐れがあるので、これは騎士になってからの習慣となっていた。

三十分程柔軟体操などをしていると、廊下からパタパタと小さな足音が聞こえてくる。

来たか。

急いでベッドに戻って掛け布に包まると、足音が部屋の前で止まり、次いでノック無しでガチャツとドアが開いた。

「いらあ！ 起きるね！」

サツキのちょっと怒ったような声がこちらに向かって来る。

「起きるね、朝よ。仕事遅くなるね」

サツキがベッドの上に乗し、俺をバシバシと叩く。

それでもまだ寝た振りをしていると、「起きる言うね！」「という言葉と共にドンツと衝撃が走った。

「おはよう、サツキ」

そこでようやく目を開ける。

サツキは俺の腹の上に跨って頬を膨らませていた。

ああ、今日もなんて可愛いのだ……！

この俺を起こす時の子供っぽい行動や表情があまりにも可愛くて、
ついつい寝た振りをしてしまう。

俺はサツキの小さな手を取り、その甲に口付けた。
本当は頬や唇に口付けたいのだが、まだ結婚していないのにそこ
までするのは早いから我慢だ。

「ほら、着替えるね」

ベッドから下りたサツキが、サイドテーブルの上に準備してあつ
た騎士の制服を俺に渡して後ろを向く。

サツキは俺が着替えている間も部屋を出て行かない。

いや、最初の二日は部屋の外で待つていてくれたのだ。

しかし、着替えが終わらないうちに再び部屋に入つて来て更に『
遅い』と怒られ、それ以降こうして背を向けるだけになった。

そんな事を思い出しながら俺が着替え終わった直後、サツキが振
り向く。

サツキは眉を顰めて手で俺にしゃがむように指示した。

素直にしゃがむと、襟を整えたり裾を引っ張ったりしてくる。

そして俺の手を握り、洗面所へと導くのだ。

「顔、洗うね」

桶に入っている水で顔を洗うと、もう一度しゃがむように指示さ
れ、サツキが俺の顔を拭いて髪を梳かしてくれる。

そんな事くらい自分で出来るのだが、サツキが甲斐甲斐しく面倒
をみてくれるので、せっかくなのでやってもらっている。

こんなに優しく面倒見の良いサツキと結婚出来るなんて、俺は
なんて運が良いのだろう。

その後食堂に移動して朝食を食べ、食後のお茶とデザートになつ
た頃、大勢の職人が屋敷にやって来た。

サツキの想いを受け止めたあの日、俺達の報告を聞いたカタヤ夫
妻はとても喜んでくれた。

すぐに職人を呼んで工事を開始させ、俺も城に行つて頼んでいた
宿舎を断り、隊長に婚約の報告をした。

隊長は『そんな相手が居たのか』と非常に驚いていたが、すぐに破顔して祝福してくれた。

新しい屋敷が完成したら、婚約披露をして結婚式の内容を決めて……そうだ、両親にも来てもらわなくてはならないな。

今後の事を考えながらケーキを食べていたが、ふと気付いて時計をみれば、もう出勤時間になっていた。

残っているケーキを食べて立ち上がる俺に合わせ、サツキも立ち上がった。

手を繋いでもう一度洗面所に行くと、サツキが歯ブラシに歯みがき粉を付けて渡してくれる。

歯を磨き終え、サツキが身だしなみの最終確認をして頷いたら、玄関までまた手を繋いで行った。

「いつてらっしやいませ」

サツキが小さく手を振る。

ああ、別れるのは辛いけど、サツキの為にも頑張ってくるよ。

手を取り甲に口付けて、サツキに背を向ける。

振り向きたい気持ちをこらえて俺は城に向かった。

もうすぐ完成だなあ……。

暖かな日差しが降り注ぐ中、私とダンは庭でお茶を飲んでいる。この世界つてもしかして一年中春なのかな？ 全然季節が変わる心配がないなあ。過ごしやすくもいいけど。

まあそれはともかく、今日はダン、お仕事お休みなんだって。

屋敷は大きい工事が終わって今は内装をやっている。だから屋敷の中より庭に出ている方がうるさくなくていいんだよね。

私は屋敷を見ながらお茶を口に運ぶ。

それにしても……、この屋敷って部屋数多いよね。元々必要以上に大きな屋敷を二つ繋げたんだから当たり前だけど。

日本で言うところのマンションとかアパートとかみたい。しかも『外国の貴族の別荘』ばいお洒落な外観は、お金持ち若夫婦が住むような感じがする。

そういえば、屋敷の中も明るい雰囲気になってきてるなあ。

そしてお父様とお母様、ついでにマチルダとヤンもやたら明るい。みんな楽しみなんだね。

私はお茶をテーブルの上に置いて、再び屋敷を見る。

これだけ広い屋敷じゃ、この先使用人が増えたとしても絶対部屋余るよね。勿体ないなあ。何かに使えないかなあ。

うーんうーん。

その時、何だか視線を感じて私は正面に座っているダンを見た。

あ！ そうだ、そうじゃない！

下宿人を増やせばいいんだ！

そうすれば部屋が埋まって家賃収入も……、でもなあ。

うちはお金持ちだから、これ以上お金はいらないかな。
もつところ、お金持ちならではの……あ！
もの凄い事思い付いた。私ってはこの世界に来てから冴えてる！
金持ちといえ、そう。あれがあった。

芸術家支援！

芸術家のタマゴが『お金はないけど夢がある』な状態なのはおそらくこの世界でも共通な筈。

絵や彫刻、音楽、ダンス等々、優れた才能を持ちながらも埋もれている人達を探して屋敷に住まわせて、有名になったら『私が育てましたの』とか言って自慢する。

芸術を志す人と私、双方にメリットがある素晴らしい考えだよ。あ！音楽団とか、あと劇団丸ごとって言うのもいいかも。

『天才子役』って日本でもちょっと話題になったよね。そういう子を育てあげるってのもいいじゃない！

「サツキ」

今後の計画を頭の中で立てていると、ダンが話し掛けてきた。

「ん？」

「何を考えている？」

お？なんて良いタイミング。聞きたい聞きたい？
私はわくわくとして話し始めた。

「屋敷の空いている部屋に芸術家を住まわせるの！」

「芸術……？」

首を傾げるダンに私は頷く。

「絵描きとか音楽家とか踊り子や作家、劇団。そして天才子役もいっばい！」

私話を聞いたダンが目を見開いた。

フツツ、驚いてる。

「ね、いい考えでしょ？」

私が身を乗り出して言うと、ダンは一ツとして何度も頷いた。

「あ、ああ。素晴らしいよサツキ」

「おお！ やっぱりそう思う？」

余程私の素晴らしい考えに感動したのか、ダンの顔が興奮して赤くなってるよ。

ダンもたぶんお金持ちだから、こういう支援活動に共感出来るんだろうね。

「そうだ、俺が剣を教えよう」

「剣？」

そういえば日本にも殺陣ってのがあったし、役者なら剣も扱えた方がいいよね。あと派手なアクションとかも。

そしていずれば街のど真ん中辺りに劇場を建てて、国内は勿論、国外からも客が来るくらい有名な劇団になるの。

「うん。お願い。名前は何にしようか」

「ここはやはりシンプルに『劇団サツキ』かな？」

「ダンは少し考えてから訊いてきた。」

「『サツキ』は何て意味だ？」

「ん？ 私の名前の意味？」

「えーと、『五番目の月』かな」

「私、五月生まれなんだよね。」

「で、単純に『五月』と書いてサツキ。」

本当は『皐月』って漢字にする予定だったんだけど、出生届け書く時に字が思い出せなくて『五月』にしたんだって。

「じゃあ調べてから書けば良かったのに。」

「そこら辺のいい加減さが日本の両親の悪いところだったなあ。」

「素敵な名だ」

「ダンが真面目な顔で言う。」

「え？ そう？」

「そうかなあ。でもそう言われるとちょっと嬉しいな。」

「ありがとう」

ダンが私に手を差し出す。

「『サツキ』みたいに素敵な名前を一緒に考えよう」

一緒に考えてくれるんだ。

じゃあもつとかっこいい名でもいいな。

「楽しみだね！」

「楽しみだ」

まずは芸術家のタマゴを探さなきゃね！

私達はガツチリと握手をした。

もうすぐ完成だな……。

暖かな日差しが降り注ぐ中、俺とサツキは庭でお茶を飲んでいる。今日は仕事が休みなので、こうしてサツキとゆっくり出来るのが嬉しい。

屋敷は大きい工事が終わって今は内装をやっている。

カタヤ夫妻は俺達の為に素敵な部屋を用意すると言っていた。どんな部屋になるのか、今から楽しみだ。

サツキも先程からずっと屋敷を見つめているが、きっと俺と同じ気持ちなのだろう。

屋敷を見つめるサツキの可愛い横顔を見ると、不意にサツキがこちらを向いて、軽く目を見開いた。

しまった。じっと見すぎていたか。

サツキが軽く眉を寄せたので怒られるかとヒヤヒヤしたが、しかしサツキはパツと明るい表情になり、俺にとびきりの笑顔を見せてくれた。

とたんに俺の心臓がドクリと大きく鳴る。

本当に、こんな愛らしいサツキと結婚出来るなんて夢みたいだ。

サツキが屋敷をチラチラ見る。何かを考えているようだ。

口元が緩んでいるので、楽しい事を考えているとすぐ分かる。

「サツキ」

声を掛けるとサツキが振り向く。

「ん？」

「何を考えている？」

やはり俺達の部屋の事か？

サツキは俺にニコツと笑い、話し始めた。

「屋敷、人ない部屋、芸する人住むね！」

「芸する人……？」

空き部屋に芸人を住まわせると言うのか？

確かに抱えの芸人が居る屋敷もあるが……、サツキは大道芸や奇術が好きなのだろうか？

「絵を描く、音楽する、踊る、本書く、芝居する」

ああ、芸術の事か。

では芸術する人とは芸術家か？

「そして頭のいい子供、いっぱいね！」

「……………！」

な、何だつて!？

『頭の良い子供』、それはつまり……俺達の子供の事か？

なんと、サツキはもう子供の話をしているのか。しかも英才教育を考えているのだな。

芸術をする　つまり絵や音楽、踊りなどを教えて感性を育て、本でしっかりと勉強し、頭の良い多方面で活躍出来る子を育てようというのか。

屋敷の部屋が埋まるくらい沢山の子供が欲しいだなんて……そんな……なんて嬉しい事を言ってくれるのだ。

俺もサツキとの子供なら何人でも欲しい。

「いい考え思つか？」

可愛いサツキと愛らしい子供達に囲まれた光景を想像していると、サツキが身を乗り出して俺に訊いてきた。

「あ、ああ。素晴らしいよサツキ」

慌てて頷くと、またもやとびきり可愛い笑顔を見せてくれた。

子供は是非サツキ似の女の子が欲しいな。

いやでもやはり男の子も。

「そつだ、俺が剣を教えよう」

「剣？」

俺の父親も騎士だった。

俺が騎士になると同時にあっさりと辞めて母と田舎に行ってしまったが。

小さな頃、よく父さんは俺に剣を教えてくれた。

父さんは、まだ子供の俺に、玩具の剣ではなく本物の剣を持たせ、その上本気で叩きのめした。

当時はそれが普通だと思っていたが、大人になった今考えるとあれはやり過ぎだな。

それでも騎士としての父さんを俺は尊敬していた。だから俺も騎士になった。

子供が大きくなって騎士になれば、一緒に働く事も出来る。勿論強制するような真似はしないが、そうなれば嬉しい。

更に鍛練をして『お父様のような立派な騎士になりたい』と言われるようにならなくてはいけないな。

「うん。頼むね。名前どれにするか？」
名前……か。

男の子なら勇気と優しさを兼ね備えた、女の子ならサツキのように可愛く愛らしい花のような名にしたいな。

そつえば『サツキ』とは、どういう意味なのだろう？ トーラでは聞いた事のない言葉だ。

「『サツキ』とはどういう意味なのだ？」
俺はサツキに訊いてみた。

「んーと、だぶんね『五つの月』ゆう意味」
ほお、『五つの月』？ 変わった名だな。

しかし、夜空に月が五つ浮かんでいる様子を想像すると、成る程これは幻想的で美しいではないか。

サツキという名前を考えた人物　おそらくサツキの両親は、優れた感性の持ち主だったのだろう。

「素敵な名前だな」
俺が言うとサツキは嬉しそうに笑った。

「ありがーとーね」

サツキに向かって両手を伸ばす。

「『サツキ』のように素敵な名前を一緒に考えよう」

サツキも両手を俺に向かって伸ばす。

「楽しいね！」

「楽しみだ」

二人で協力して素晴らしい家庭を作り、そして子供達を立派な大人に育てよう。

俺達はしっかりと手を握りあった。

ついに屋敷が完成した。

うーん。大き過ぎの部屋余り過ぎ。やっぱり芸術家を探して住まわせるべきかな。

まあ、それは後々考えるとして、今日はご近所さん達を招いて完成披露パーティーを開いた。

大広間には沢山の人。

初めて会う人達ばかりだけど、みんな凄く着飾ってまさにセレブパーティー！。

この周辺って高級住宅街みたいだから、集まる人達もセレブばかりで当然だよな。私もお母様を選んだピンクのヒラヒラドレスにネックレスやら指輪やらを着けて着飾っている。

あ、髪飾りはダンからのプレゼント。一見お花みたいな不思議な宝石が付いた髪飾りなんだけど、大広間に入る直前にダンが私の頭に挿したの。結構高そうな代物だけど、せっかくだからありがたく戴いておくことにした。

さて、パーティーの始まりだよ。

私達家族とダンは部屋の奥の方に立ち、お父様が来てくれた人達に挨拶をする。

「今日は二人の為に来てくれてありがとう」

ん？ 二人？

お父様ったら、ダンはともかく私の存在忘れてる？

ちよつと待ってよお父様！ …… って大きな声で注意したいけど、こんな注目浴びてる状態で間違いを指摘したらお父様が笑われちゃうかも。

う……。仕方ないから我慢……でも気になる。なんて思ってたなら、

ダンが私の肩に手を置いた。

「サツキ」

上を向くとダンと目が合う。ポンポンと慰めるように肩を叩かれた。

あ、ダンもお父様の間違いに気付いてくれたんだ。

『忘れるなんて酷いよねえ、お父様』

って心の中で言ったらダンが頷く。

おお？ 以心伝心？ ちょっと凄じやない。

感動してたらいつの間にかお父様の挨拶が終わっていた。

ワツと拍手が起こり、一応ニッコリ笑って愛想を振りまく。

招待客達がバラバラと散って周りの人達と談笑したり料理を取ったりし始めたので、私は急いでお父様に抗議をした。

「お父様、二人じゃないよ。私もお父様とお母様と一緒に家族だよ。忘れないで」

するとお父様は目を見開いて驚いて、私をギュッと抱き寄せた。

「ああ！ そうだな。ありがとうサツキ」

もしかして大勢を前に緊張してたのかな？ 分かってもらえたみたいだし、許してあげる。

「サツキ、ダンとあっちに行っておいで」

お父様に言われて、私とダンは二人で広間のだ真ん中に行った。

私達が部屋の中心に立つと、招待客が次々にお祝いの言葉を言いに来る。

「おめでとつ」

「ありがとうございませす」

何度も繰り返し、やっと挨拶も終わりかな？ と思った時、五十代くらいのグレーの髪をオールバックにした男の人が私の前に立つ

た。

「おめでとじ」

「ありがとうございます」

男の人はニコニコと笑いながら私の頭に手を置く。

「こんなに可愛いなんて思わなかった。これは幸せだな、ダン」

そう言いながら私の頭をグリグリと撫でる。

ん？ 何このおっさん。やけに馴れ馴れしいなあ。歳の割にマツチヨな体つきや雰囲気から考えると、もしかしてダンの上司？

一応愛想振りまいておこうかな……と思った瞬間、ダンに腕を引っ張られた。

「隊の長！ 触らないでくれ」

ダンの太い腕に抱かれ、ギュツとされる。

あ……、やっぱり上司か。ダンに宴会芸を無茶ぶりした人だよ。上司は一瞬ポカンとして、それからすぐに大爆笑し始めた。

「そうかそうか。悪かった、良かったな」

バシバシとダンの腕を叩きながら笑う上司。衝撃がダンの腕の中の私にまで伝わってきて痛いよ。

そしてその時、背後から聞こえてきた笑い声。

「ウフフフフ」

この聞き覚えのある不気味な笑いは……。

ダンが私を離す。振り向くとやっぱり！ ニナだ。

ニナは胸元が大きく開いて胸がポロツとこぼれそうなセクシードレスを着ている。

来てたんだ。まあダンの彼女だし来てたとしてもおかしくないけど。

「おめでとじ」

「ありがとう」

二ナが唇を引き上げてニツと笑う。

「仲良しね」

あ……。

私はダンから慌てて離れた。また泥棒猫呼ばわりされたら嫌だものね。

「サツキ」

ところがダンが私に向かって手を伸ばしてきた。

ちよつと！ 何よもつ！

引き寄せようとする手を叩く。

「おいおい、それは今からどうする」

本当に！ 何よこの手は。

ダンつてば空気読めないよね。上司、もつと言ってやって！

……ところで、二ナの後ろにいる冴えない男の見本みたいなのは誰？ 寝てるのか起きてるのか分かんない目に小太り、背も低い。

私の視線に気付いた二ナが男を紹介する。

「サツキ、私のリックよ」

私のリック？ 何それ。

「はじめまして。リックです」

リックが会釈する。

「はじめまして」

挨拶されたから挨拶を返す。

二ナがリックの背中を叩く。

「乾杯しましょう。飲み物を取ってきて」

あ、そうか分かった。この人、二ナの下僕だ。

リックが近くのテーブルから飲み物を持ってきて私達に配る。

「乾杯！」

グイツと飲むと、上司がガハハと笑った。

「いい飲みっぷりだな」

「ありがとう」

そうだ！ 今日の為に私、お寿司を作ったんだった。お祝いと言えは寿司だよな！

私はテーブルの上に置いてあったお寿司を持って来た。

カリフォルニアロールっぽいやつんだけど、珍しい料理だから敬遠されてるみたいで、誰もまだ手を付けていなかった。

「これは……？」

上司が顎に手を当てじっとお寿司を見る。

「私の国の料理です」

「ほおー。国は何処なんだ？」

「日本です」

「ニホン？」

上司が首を傾げる。

異世界だから知らなくて当然だよな。

「トーラでは知られていないと思います。小さい国ですよ。はい、どうぞ。食べてみて下さい」

お皿を上司に差し出す。

「サツキー!!」

ん？ 何よ。

ダンが大きな声を出すから、周りの人達が驚いて私達に注目したじゃない。

「それは……」

何だろ？ 食べたいのかな。

仕方ないなあ。

一切れ摘んで差し出す。

「はい」

「う……」

「ほら」

ダンが屈んで口を開けたから、お寿司をポイと放り込む。

ダンは真剣な表情でゆっくりと味わうように咀嚼して、それから驚いたように目を見開いた。

「……………美味い！」

周りからクスクスとした笑い声が聞こえる。ダン、笑われてるよ。食べさせてもらうなんて子供みたいだもんねえ。本当に手が掛かる男だよ。

将来もし結婚したら、ニナは大変だろうね。

……………結婚したら？

……………。

何だろ、なんだかモヤモヤした気分。

凄く腹が立つ。今すぐダンを殴り飛ばしたい。

どうして……………？

「一つくれ」

上司に言われてハッとする。

いけないいけない、ポーツとしてた。

「どうぞ」

ニッコリ笑って皿を差し出す。

「美味いな」

「ありがとうございます」

ダンと上司が美味しいって言うてくれたからか、周りにいた人達も寄って来て次々にお寿司を掴む。

「美味しいわ」

「うん、美味しい」

おお？ 凄いじゃない。

もしかして、トーラ人の味覚にお寿司って合ってるのかな？ お寿司屋さんオープンしたら流行るかも。そうになったら私は社長さんか。うーん、それもいいかも。

そんな事考えながらダンを見ると……二ナと顔を寄せ合って話をしている。

……へえ。仲睦まじいじゃない。

……。

「君みたいな子に会って良かった」

ん？ あ、上司。何よ、何か用？

「ダンは変わってきた」

「変わる？」

「顔が良くなった」

うん？ 顔？

出会った時から特に変わり無いと思うけど。

「ダンを頼むよ。君に任せれば大丈夫だ」

何言ってるんだろ、この人。頼む？ ダンを？

よく分かんないけど……ダンは手が掛かる子供みたいな男だから心配なのかな？

……うん、そう、そうだね。大家さんとして下宿人の面倒はしっかりみるよ。

「頑張ります」

「ありがとうございます」

上司が私の頭に手を置いた、その時

「きゃあ！」

え！？ 何？ 浮いてる……ってダン！？

無表情なダンの顔が目の前にある。

急に抱き上げないでよ！ びつくりするじゃない！

いや、それより何で抱っこされなきゃいけないわけ？

上司と二ナが爆笑して、他の人達もクスクス笑っている。

私はチビだから、『お父さんに抱っこされてる子供』みたいに見えるんだろうなあ。恥ずかしいよ、もう。

はああ、困った男。上司が心配するのも当然だよな。

図体ばかりでかい子供だもん、放っておけないよね。

だから……私が面倒見てあげる。うん、そう、仕方ないから。

ダンの頭を右手でペシペシ叩く。

それにしても、お寿司のお皿を落とさなかった私、偉い！

ついに屋敷が完成した。

そして今日は、親交のある方々を招いて婚約披露パーティーを開いた。

大広間には沢山の人。

二ナ夫婦と騎士仲間、隊長も来てくれている。

ちなみに両親は『家畜の出産が間近』という信じられない理由で欠席だ。

ピンクのドレスを着たサツキはとても可愛い。

俺はサツキの髪に、婚約者がいる事を示す髪飾りを挿した。

トーラでは昔から、これを挿している女を口説いてはいけないという決まりがある。

これでいくらサツキが可愛くても横取りしようという馬鹿は現れないだろう。

パーティーが始まり、カタヤのおじ様が招待客達に挨拶をする。

「本日は二人の為に来て下さりありがとうございます」
すると、サツキが急にそわそわとし始めた。

ん？ どうしたのだろう。

「サツキ」

小声で名を呼び肩を抱くと、サツキが俺を見上げる。

不安げに揺れる瞳。

ああ、そうか。緊張しているのだな。

軽く肩を叩くと、サツキの表情が和らぐ。

『俺が付いているから恐がらなくていい』

心の中でそう語り掛けると、サツキがニコツと笑った。

ああ！ 凄いいではないか。

サツキと俺は言葉に出さなくても気持ちを通じ合うのだな。感動していたらいつの間にかおじ様の挨拶が終わっていた。ワツと拍手が起こり、サツキが招待客に笑顔を見せる。そして拍手が止み、招待客がサツキの可愛さについて語り合い始めると、サツキはおじ様に向かって唇を尖らせながら言った。

「おとさま二人違う、わたしとおとさまおかさま一緒家族。忘れる無い」

サツキ……、何て優しいのだ。

『結婚しても、お父様とお母様と私は家族だよ。いつまでも一緒にいようね』と言っているのだな。

こんなに素晴らしいサツキと結婚出来るなんて、本当に幸運だ。

「ああ！ そうだな！ ありがとうサツキ」

おじ様も感動してギュツとサツキを抱きしめ、おば様はハンカチで涙を拭ったる。

「サツキ、ダンとあちらに行っておいで」

おじ様に言われてサツキが俺の腕の中に戻る。

俺達は広間の中心付近に行き、招待客に挨拶をした。

「おめでとつ」

「ありがとうござつね」

お祝いの言葉を下さる方一人一人にサツキは微笑んで礼を言う。騎士仲間達が俺の耳元で「可愛いなあ」とか「羨ましい」と、からかうように囁くのが少々照れくさい。

何人もの人が入れ代わり立ち代わり祝ってくれ、そろそろ挨拶も終わりかという頃、俺の所属する部隊の隊長がサツキの前に立った。

「おめでとつ」

「ありがとうござつね」

隊長はニコニコと笑いながらサツキの頭に手を置く。

「こんなに可愛いとは思わなかった。ダンは幸せ者だな」

そして隊長はサツキの頭を撫でるのだが……ちよっと待ってくれ！
髪飾りが見えないのか！？

隊長とは言え俺のサツキに許可無く触るな！

「隊長！ 触らないで下さい」

慌ててサツキを引つ張りギュツと抱きしめる。

隊長は一瞬ポカンとして、それから大爆笑した。

何が可笑しいのだ！

「そうかそうか、悪かったよ。良かったな」

強い力で俺の腕を叩きながら隊長が笑っていると、別方向から聞き慣れた笑い声が聞こえてきた。

「ウフフフフ」

……二ナか。

サツキを離し振り向くと、やはり二ナが夫であるリックを従えてこちらに向かって来ていた。

「おめでとう」

「ありがーとござうね」

二ナが片目を瞑り、口角を上げる。

「仲がいいのね」

その途端、サツキが慌てて俺から離れる。

二ナ、サツキをからかうな。もうすぐ結婚するのだから仲が良くて当然だろう。

まったく、どうしようもない奴だな。

「サツキ」

恥ずかしがるサツキを引き寄せようとすると、手を叩かれる。

「おいおい、今からそれでどうする」

隊長が横から茶化す。

尻に敷かれているとでも言いたいのか？

隊長、自分がそうだからって俺も同じだと思わないで下さい。

サツキは眉を寄せて顔を逸らし、そこでふと二ナの後ろにいるリックの存在に気付いた。

二ナがリックを紹介する。

「サツキ、私のリックよ」

……本当に独占欲が強いな。

リックもこんな女と夫婦では大変だろう。

「はじめまして、リックです」

「はじめてね」

サツキが挨拶を返すと、二ナがリックの背を叩いて飲み物を持って来てと頼んだ。

リックはトレーに飲み物を載せてきて俺達と隊長にも配る。

「乾杯！」

サツキがグイッと呷る。

……これ酒なのだが、そんな飲み方して大丈夫なのか？

俺の心配を余所に、隊長がガハハと笑う。

「良い飲みっぷりだな」

「ありがーとね」

うむ、平気そうだな。

しかしサツキは華奢だから、あまり飲ませないように気を付けなくてはならないな。

そんな事を考えていると、サツキがハッと何か思い付いた表情をして、空のグラスをリックに押し付けてテーブルに向かって走る。

そして妙な料理が載った皿を持って帰って来た。

野菜や魚などが穀物でクルクルと巻かれているようだが……まさ

かこれは。

「これは……？」

顎に手を当て料理をじっと見る隊長にサツキが笑顔で答えた。

「わたーし、国の料理ね」

やはりそうなのか！

あのとんでもない根性試しを隊長でもやろうというのだな。

「ほおー。ちなみに国は何処だ？」

「ニホンね」

「ニホン？」

隊長が首を傾げる。

隊長もニホンを知らないのか。いや、それより……。

「トーラ人、知らないと思う。国、小さいね。ほら、どうぞ。食べる
してみるね」

サツキが隊長に皿を差し出す。

「サツキ……！」

駄目だ！ そんな事してもし隊長が倒れでもしたら、大混乱になる。

サツキが振り向き、不思議そうに首を傾げる。

「それは……」

何と言えば良い？ サツキを傷付けず、尚且つ根性試しを諦めさせるには。

悩んでいると、サツキが謎の料理を一切れ摘んで俺に差し出した。

「はい」

「う……」

つまり、隊長の代わりに俺に食べと言っつのか。

あの時の苦く酸っぱく甘い味が蘇る。

「ほら」

しかし、断ればサツキが傷付く。大勢の前で恥をかかす訳にもい

かない。

ここは思い切って、この料理を俺が独りですべて食べよう。そうすれば丸く収まるのだから。

屈んで恐る恐る口を開けると、謎の料理をサツキが放り込む。

根性を出して咀嚼　ん？　んん？　おかしい、これは！

「……美味しい！」

美味いではないか！

以前食べた料理とは全然違う。

そうか、そうだな。サツキが客を使って根性試しをする訳がないじゃないか。俺は少しどうかしていた。

サツキが頬を膨らませて俺を見つめる。すまない、許してくれ。

心の中で深く反省していると、隊長がサツキに料理を一切れくれと言った。

サツキが笑顔で皿を差し出し、他の招待客も次々にサツキから料理をもらう。

ニコニコと笑うサツキ。

……良かった、怒ってはいないようだな。

ホッと胸を撫で下ろしていると、耳元でウフフと笑い声がする。

「……二ナ」

「本当に可愛いわね」

「当然だ」

俺のサツキは世界一可愛い。

「それだけではなく、優しくて面倒見が良い素晴らしい女性だ」

「まあ！　ダンッたら」

そうして二ナと話をしていると、　またもや隊長がサツキの頭を触っているではないか！

慌ててサツキを抱き上げる。

いい歳した大人がひとの婚約者に馴れ馴れしくさわるな！

俺が怒っているのが分からないのか、隊長と何故かニナも爆笑する。

周囲の者達もクスクスと笑い始めるし、いったいどうなっているのだ？

訝しく思いながらサツキを見ると　ああ、なんて可愛らしい。

輝く笑顔がそこにあった。

サツキは慰めるように俺の頭をポンポンと叩く。

やはりサツキは優しい。

サツキに出逢えた奇跡を、俺は心の底から神に感謝した。

第17話ダン編

婚約披露パーティー（後書き）

早坂器乃様が素敵なイラストを描いて下さいました！

とても可愛いサツキとダンです。

皆様是非見に行ってみて下さい。

（ブログURL <http://subbuta.seesaa.net/article/171432580.html>）

（又は、検索 シーサーブログ 狐の森ゲーム制作日記：2010年12月01日の記事）

あー、なんかムカつく。

朝っぱらから二ナが来ている。

まあ別にダンの彼女だから来てもいいけど、ちょっと早すぎない？ さつき朝食が終わったばかりなんだけど。

今日ダンは仕事昼からだから、その前に会っておこうと思ったのかな。

でも人ん家の居間でイチャイチャするのは止めてほしいな。普通少しは遠慮しない？

まあ……彼女だから仕方ないけど。

「それでダンがね……」

二人の思い出しちい私に語るのもやめてくれない？

小さい頃から笑わない？ へー、二人は幼馴染なんだ。

三段重ねの特大ケーキを一人で食べた？ ……別に今と変わらないじゃない。

そんな事くらい私だって知ってるわよ。

なんなの？ 幸せいっぱいだって自慢したいの？

へー。それは良かったね。

「サツキ、ダンの何処がいいと思う？」

……はあ？

知らないよ、そんなの。

なんで私に訊くわけ？ 勝手にやってれば？

ああー！ なんかもう、もう ダンを殴り飛ばしたい！！

「サツキ？」

立ち上がった私の手をダンが握る。

「何処へ行く」

うるさいなあ。何処へ行こうと私の勝手でしょ！

だいたい彼女と二人で楽しくお喋りしてるところに、何で私が参加しなきゃならないの？

手を振り払おうとしたけど、ガツチリ握って離してくれない。

あーもう！ イライラする！

私は思いつきりダンの足を蹴った。

「サツキ？」

「トイレ！」

やっと手を離れたので私はドアに向かって歩きだす。

すると驚く事に、ダンが立ち上がって付いてきた。

え！ この男本気！？ 乙女が『トイレ』って言うてるのに？

「付いて来るな！」

「サツキ……」

何？ その『置いてかないで』って顔は。

ママが居ないと不安になる子供か！

確かに普段は仕方なくあれこれやってあげてるけど、今は二ナがいるんだから二ナに面倒見てもらえばいいでしょ！

私はダンを睨み付けて部屋から出た。

ああ、ムカつく。

長い廊下を私は足音高く歩く。

どうして今日はこんなにイライラするんだろ、おかしいなあ。

特に二ナを見てると凄く嫌な気分になる。

うーん……、やっぱりあの胸が原因かな？

私は自分の胸を見る。

う……、小さい。

決してペツタンコではない。でも小さい。

そりゃ私だつて二ナみたいな爆乳に生まれたかつたけど、こればっかりはどうしようも無いじゃない。

豊胸手術でも出来れば別だけど、トーラじゃ無理だよな。

お金は腐る程あるのに残念だな。

……。

もう自分の部屋に戻ろう。

良く考えたら二人の話に付き合う必要ないもんね。何やってたんだろ、私。

うん。部屋に帰って久し振りに本でも読も。

そう思つて部屋に向かおうとした時、丁度目の前のドアが開いてマチルダが現れた。

「サツキ様」

「あ……、マチ」

働き者のマチルダは、お掃除中だったみたい。手にホウキや雑巾を持っている。

さすがにこれだけ大きな屋敷だと一人じゃ出来ないみたいで、今は数日に一度の割合で通いの使用人さんが来ているけどね。

「何をしていますか？」

マチルダが首を傾げる。

「え……と、部屋に戻ろうかなつて」

「ダン様は？」

「……」

「サツキ様？」

う、何かめんどくさい。根掘り葉掘り訊かれそうな雰囲気。仕方ない、居間に戻るか。

「やっぱり居間に行く」
何か言われる前に私はサツと身を翻して小走りに居間へと戻る。
はあ、追い掛けては来ないな。良かった。
さて、気は進まないけど部屋の中に入ろうかな。
ドアノブを掴んで薄くドアを開けてみる。

「結婚」

……え？

聞こえた声に体が強ばる。

結婚？ 何それ？

「いつにするの？」

「なるべく早くしたい」

「そうね。場所は？」

「カタヤ夫妻に相談しようと思う」

「ドレスはどうしようかしら」

「何を着ても可愛いよ」

………！

な………に？ もしかしてこれって結婚式の相談………？

へ………え、結婚するんだ。

そうだよね、二人共結婚してもおかしくない感じだもんね。

そうなんだ、じゃあダンはどこを出て行くの？ それとも………ま

さかこの屋敷に一緒に住むとか？

「あ………」

あれ？ 何でだろ。足に力が入らない。

へナへナになって床に座っちゃった。

声に気付いたダンと二ナが振り向く。

「サツキ！」

ダンがびつくりした顔で走って来る。

逃げたいのに足が動かない。

「サツキ、どうした？」

ダンは私を優しく抱き上げてソファアへと戻り、膝の上に乗せて髪や頬を撫でた。

なんで……こんなふうにするの？

「サツキ？ サツキ！」

あ、そうか。

そこで不意に私は気付いた。

私……ダンが好きなんだ。

なんで気付かなかったんだろ。

「う……」

途端に涙が溢れてくる。

「サツキ、どうした？ 気持ち悪いのか？」

おろおろとするダンに首を横に振る。

自分の気持ちに気付かないなんて、間抜けな私。

胸に顔を埋めると、ダンが私をギュツと抱き締めて背中を撫でた。

どうして彼女がいるのにこんな事するの？

酷いよ馬鹿、優しくしないでよ。勘違いしちゃうじゃない。

二ナともうすぐ結婚するんでしょ、それなのに、それなのに！

胸を叩くとダンが更に力を込めて抱きしめる。

……苦しいよ。絞め殺す気？ 馬鹿。

「サツキ」

気遣う声はまるで自分が愛されているみたいで……涙が止まら

ない。

もっと早く気付いていれば、ううん、どちらにしてもダンには二
ナが居て、私が割り込む隙なんて 割り込む？

「サツキ……」

……。

いや、でも、そんな。それは人として最低？

でもでも、誰かを好きになるって決して綺麗なことだけじゃないよ
ね。

……。

うん。そう。そうだよ。きっとそう！

だったら……。

私はダンの服を握りしめる。

……略奪ってありかな？

顔を上げると心配そうなダンの瞳。

私は少しだけ笑った。

朝っぱらから二ナが来ている。

まだ朝食が終わったばかりだと言つのに、来るのが早すぎるだろう。

だいたい呼んでもいないのに勝手に来るな。先程からサツキの機嫌が急下降しているではないか。

「それでダンがね……」

子供の頃の話を一々サツキに話すな、恥ずかしい。大事なのは現在であつて過去ではない。

この勢いでサツキの過去について二ナが質問するのではないかと俺はヒヤヒヤしていた。

サツキが犯罪集団の一員だった事は二ナにも両親にも話していない。

俺は今のサツキが好きなのだ。過去は関係ない。

だからこれからも話す気はないし、過去の事でサツキが傷付かないように守っていく。

うむ。愛する妻を守るのは夫の役目だ。

「サツキはダンの何処がいいの？」

……大きなお世話だ。

ちなみに俺はサツキのすべてが良いと思うが。

サツキも不愉快に思ったようで、ムツとした表情で立ち上がった。

「サツキ？」

すまなかつた、二ナには良く言って聞かせるから機嫌を直してくれ。

しかしそのままドアに向かおうとするサツキの手を俺は慌てて握った。

「何処へ行くのだ」

するとサツキは振り向いて睨み付け、軽く俺の脛を蹴る。

「サツキ？」

「トイレね！」

トイレ……？ ニナが来る前に行ったばかりではないか。

怒っているのだな？ トイレと言いつつ部屋に帰るのかもしれない。

よし、別室で話し合おう。そうすれば怒りもおさまるだろう。

俺は立ち上がり、サツキの後を付いていく。

「付いて来るしない！」

「サツキ……」

怒られてしまった。

そうか、少し一人にして気持ちが落ち着いた頃迎えに行った方が良いか。

そうだな、サツキだって一人になりたい事がある筈だ。

サツキは俺を睨み付けて部屋から出て行った。

「はあ……」

思わず溜息を吐いた俺をニナが笑う。

「トイレにまで付いて行くなんて！」

違うだろう、ニブい女だ。

「サツキは怒って出て行ったのだ」

「あら？ どうして？」

驚くニナに俺はしっかりと説教をした。

「駄目だろう、自分ばかり話すのはお前の悪い癖だ。特にサツキはトーラ語にまだ慣れていないので、お前の早口を聞くのは辛いのだぞ。しかも昔の話や答えにくい質問までして。少しはサツキの気持

ちを考える。そして俺達の時間を邪魔するな。帰れ」

「まあ！ こんなに饒舌なダンは初めてよ」

……俺の話聞いているのか？

打たれ強い二ナを帰すのは、ちょっとやさつとの言い方では無理か。

「サツキと出会ってから変わったわね。いい男になってきたじゃない」

なんだそれは。

まるで以前の俺が、どうしようもない男だったみたいに聞こえるではないか。

「良かったわね」

うむ。サツキと出会えたのは、そして結婚出来るのは本当に幸運だ。

「ところで結婚式は？」

式か……。まだまったく決めていないのだが。

「いつにするの？」

「なるべく早くしたい」

一応貴族であるので、数ヶ月から一年間の婚約期間を経て結婚となるのが慣わしだが、俺は早くサツキと結婚したいと思っている。

それはカタヤ夫妻も了承してむしろ喜んでくれていた。

「そうね。場所は？」

「カタヤ夫妻に相談しようと思う」

最近では神官を自宅に招き簡略化された式を執り行うのが主流で、それどころか式を行わない者も大勢いる。

しかし俺は神殿での式を希望している。

二人の新しい旅立ちはやはりしっかりとしたもの良いし、何より他国から来たサツキにトーラの古き良き伝統の結婚式を体験してもらいたいと思っているのだ。

「ドレスはどうするの？」

何故二ナがワクワクしている？ 余計な手出しはするなよ。

「何を着ても可愛いから問題ない」

「あら駄目よ！ 女にとっては一生に一度の」

「あ………」

不意に聞こえた声に驚き、俺と二ナはドアの方を見た。

……………！

サツキが虚ろな瞳で床に座り込んでいるではないか！

「サツキ！」

俺はサツキに駆け寄り肩に手を置いた。

「どうしたのだ、サツキ」

反応を返さないサツキを抱き上げソファーに戻る。

二ナも心配そうにサツキを見ていた。

「サツキ？」

サラサラとこぼれる髪を手で梳き頬を撫でると、サツキが俺を見上げる。

「サツキ！」

俺はその瞳に驚愕した。

潤んでいるではないか！

「う………」

ポロポロと大粒の涙を零し始めたサツキ。

「どうしたサツキ。気分が悪いのか？」

痛いのか？ 病気なのか？ 医者を呼ぶか、いや病院に連れて行くか。

しかしサツキは首を横に振る。

病気ではないのか？ では……。

サツキが俺の胸に縋り付く。

俺はサツキを軽く抱きしめると、出来るだけ優しく背中を撫でた。

何がこれ程までにサツキを苦しめているのだろうか。

「サツキが俺の胸を拳で叩く。抱く腕に少しだけ力を籠めた。」

「サツキ」
泣かないでくれ、愛しい人。

「サツキ……………」

サツキは俺に縋り付いて弱々しく泣き続ける。

二ナが静かに部屋を出て行った。

サツキ……………俺の可愛いサツキ……………。

涙が枯れ果て再び笑顔を見せてくれるまで、俺はサツキを抱きしめ続けた。

第18話ダン編

サツキが泣いた・・・！（後書き）

samon様が素敵なイラストを描いてくださいました！

サツキに触らせないぞというダン。17話のあのシーンでございませう。

隊長とニナも素晴らしい。

皆様是非見に行ってみてください。

(URL <http://www.usamimi.info/desertbug/index.html>
サイトトップからブログに入ると見れます。)

第19話サツキ編

私、負けない！

午後三時。

朝、仕事から帰ってきたダンはまだ部屋で寝ていた。

起こさないようにそっとドアを開け、ダンの部屋に入る。

ベッドの中を覗くと……うん。よく寝てる。

私はベッドに上がり、大胆にもダンの横に潜り込んでビツタリひつついた。

「おはよう、ダン」

囁くとダンが目を開ける。

「おはよう、サツキ」

ほっぺにチュツとするとダンが私の手の甲にキスをする。

……ここはダンも私の頬っぺたにキスすべきじゃないの？

うーん。まだまだなのかなあ。

ここ数日、私ってば相当頑張ってアピールしてるんだけどな。

着替えさせて顔を洗ってから居間へ。

テーブルの上に並べられているケーキと焼き菓子、事前にマチルダに頼んで用意してもらっておいたの。

私って気が利く女でしょ？ なぁんて言いたいのを我慢して、ソ

ファーにダンを座らせて私はその横に座る。

「はい、あーん」

フォークでケーキを掬ってダンの口へ。

「美味しい？」

「うむ」

ダンが頷く。

ちよつとちよつと！ ケーキより甘いこの状況をもつと喜びなさいよ！

仕方ないから更にサービス。

ダンの膝の上に座って、はい、あーん。

「美味しい？」

「うむ。美味しい」

うーん……。どうなの？ 分かりにくいなあ。

少しは気持ちが悪くはないの？

それとなく訊いてみようかなあ。

「ねえ、私の事どう思う？」

するとダンは私をじっと見て、それから答えた。

「サツキは可愛い」

「可愛い！？」

え！？ もしかして心揺れてる？

私はフォークとケーキをテーブルに放り投げてダンの胸に手を置いた。

「他は！？」

「……………」

ダンが首を傾げる。

「小さい」

小さい？ 何が？

ダンの視線がゆっくりと下がって胸で止まる。

え……。何？ それって胸の事？

悪かったわね！ ニナみたいな爆乳じゃなくて！

「大きい方がいいの！？」

ダンは眉を寄せて首を振った。

「いや、小さいのがいい」

ん？ あれ？ 胸は小さい方が好き？

……そうだよね！ ニナは爆乳過ぎて逆に引くよね。

これは有利かも。

二ナはたまにしか来ないし、これだけ甲斐甲斐しくしてやってるんだから、ついついクラツとくるよね。

押してみる価値あり!?

「ダン……」

ダンの首に腕を絡め、顔を近付ける。

「私、ダンが好き」

言っちゃったよ、私!

ドキドキしながら返事を待つと、ダンが目を細めて私の腰に手を回した。

「俺もサツキが好きだ」

……………!

「え……!?!? 本当に!?!」

「ああ、当然だ」

あ、あっさり略奪成功?

それはそれで問題あるような気もするけど。

「じゃあ二ナは?」

もう何とも思わない?

結婚もやめる?

しかしダンは首を傾げてとんでもない事を言った。

「二ナ? 二ナも好きだ」

……………。

何よそれ。私も二ナも好き? ふざけないでよ。

「この二股男!?!」

私はダンの頬を思い切りひっぱたいた。
バカバカバカバカバカ男！！ 両方好きって何！？
爆乳も貧乳も両方手に入れようって魂胆ね！
最低！ そんな男だとは思わなかった。
私はダンの膝から下りて居間を飛び出した。

「サツキ！ 待て！」

待つか、馬鹿！

自分の部屋に駆け込みベッドに潜る。

「サツキ！」

「知らない！ あっち行って！」

ダンの喚く声と歩き回る足音が聞こえたけど無視！

暫くそうしていると、ダンは静かに部屋から出て行った。

う…………。馬鹿。

涙が次々出て…………鼻水を枕で拭く。

最低だ。あんな男ほっとして別の相手探したほうがいいかも。

ダンよりいい男なんてきつとゴロゴロいるよ。

そうだよ、ダンにこだわる必要はないよ。

良く考えたらどこがいいの、あの男の！

…………でも、好き。なんでだろ？

あーあ、なんか眠くなってきたやつだ。

そのまま暫くウトウト…………として　ハッと気付く。

え？ ええ！？　うわ、暗い！　怖い！　まさか夜！？

嘘！　ほんのちょっとうたた寝してただけなのに。

私は慌ててサイドテーブルの上にあるランプに火をつけた。

あー怖かった。

私、暗いの駄目なんだよね。

だって……。

窓の外を見ると月。
向こうの世界より赤く見えるけど、同じように夜空に浮かんでい
る。

ああ……、あの日もこんな月夜だった。

私は人生最大の嫌な出来事を思い出した。

そう、あれはまだ小学生になってまもない頃、私は霊体験をした。
学校から帰ってテレビを観ていた私は、慣れない学校生活で疲れ
ていた所為か、そのままウトウトと眠ってしまった。

そしてふと目が覚めると暗く、その上誰もいない。

窓から月明かりだけが降注いでいた。

「お母さん、お母さん！」

大きな声で母親を呼んだけど返事がない。

おかしい。私一人……何故？

急に怖くなり、取り敢えず電気をつけるため立ち上がるうとした
瞬間！

ポウッ……。

と目の前にヒトダマが浮かんだのだ。

初めてのヒトダマ体験に恐怖で声も出ないし動けない私の前でヒ
トダマはユラユラ揺れて、そしてなんと髪の毛の長い女の形になった。
女は身体が透けていた。

つまり 幽霊。

そして女の幽霊はおもらし寸前の私の腕をギリツと掴み、遠くか
ら聞こえるような擦れた声でこう言った。

「見付けた。離れないで。その体……いいわ、メロメロだわ。一緒

に行きましょう」

強い力で引つ張られ、これまた突如現れた白い渦の中に引き摺りこまれそうになって、私はハッと気付いて暴れた。

今考えるとあの幽霊は私を黄泉の世界に連れて行こうとしてたんだらうな。

当時まだ幼い私はそこまでは分からなかったけど、とにかくヤバいという思いだけで必死に抵抗した。

「駄目よ。ほら、みんな待っているわ」

「メロメロだあ」

「ああ、メロメロだあ」

「この世界じゃない遠い世界へ行きましょう。その体……いいわ」

仲間の幽霊の音が部屋に響く中、何だか分かんないけどやたら体を褒められて引き摺られる。

「嫌あ！ やめてやめて！ 助けてー！ お母さん、お父さん！

嫌だ絶対いかない！！」

とにかくもう必死で両親に助けを求めて叫びまくっていると、幽霊が不意に手を離れた。

「困ったわ……。違うのよ、この世界は。あちらに行きましょう。

もう、どうしましょう、まだ小さいから……。仕方ない、また迎えに来るわ。その時は必ず連れて行く。覚えていて、私はあなたにメロメロだわ」

幽霊がフツと消えて突然目の前が明るくなった。

眩しくて瞬きを繰り返している私の後ろから聞こえた声。

「サツキ、起きてたの？」

振り向くと両親がいた。

「お父さん、お母さん！」

私は泣きながら両親にしがみついた。

両親の後から訊いたら、寝てる私を置いて買い物に行っていたらしい。酷いよね、もうちょっとで黄泉に連れてかれるところだったんだよ。

はぁ……。

私は深く溜息を吐く。

この話、両親も友達も誰も信じてくれないんだよ。

結局あの幽霊が私を迎えに来る事はなかったけど……まさか異世界までは追い掛けて来ないよね。

よく考えると霊体験といい異世界トリップといい、私って特異体質なのかな？

しかも幽霊をメロメロにするなんて、ある意味凄い。ダンもメロメロになってくれればいいのに……。

あ、何だかダンに会いたくなってきちゃった。どこにいるのかなあ。

ベッドから出てあくびをしながら広い部屋を歩き、ドア開けると……ダンが壁に凭れて座ってた。

「サツキ！」

ダン……、ドアの前にずっといたの？

あ、胸がキュンってなった。

……うん！ やっぱ好き。絶対絶対私だけのダンにする。

幽霊がメロメロになったんだから、生身の人間がメロメロにならない訳がないよね。

私、負けない！

立ち上がったダンの腰に、私はギュッと抱き付いた。

第19話ダン編

不安な心

午後三時。

朝、仕事から帰ってきた俺は、ベッドの中でサツキが起こしに来るのを待っていた。

カチャ……。

ドアが開く微かな音。
覗き込んでくる気配。

サツキはベッドに上がると大胆にも俺の横に潜り込んできた。

「おはようね、ダン」

囁きに目を開ける。

「おはよう、サツキ」

サツキが頬に口付けをしてきたので、俺もサツキの手の甲に口付ける。

サツキに手を引かれベッドから出て、着替えと洗顔をして居間へ。テーブルの上には既にケーキと焼き菓子が並んでいる。
促されてソファアに座るとサツキが隣に座った。

「はい、あーん」

口を開けるとサツキがケーキを食べさせてくれる。

「美味しいね」

「うむ」

頷くと、サツキがムツとした表情で俺の膝の上に乗った。

「あーん」

先日二ナが来た日に泣いてから、サツキの様子がおかしい。過剰とも思える甘え。それは可愛いので嬉しくもある、が……。

「美味しいね」

「うむ。美味い」

サツキの表情が曇る。

その後こうして不安そうに俺の顔を覗き込むのだ。

皆に相談したところ、心が不安定になるのは結婚前の女性にはよくあることで、結婚してしまえば元に戻るらしい。

「ねえ、わたくし、どんな事思う？」

どんな事？ サツキが何を思っているのか当てると言うのか。

しかしこれは下手をすればサツキの機嫌が悪くなる可能性がある。

ここは別の話題で誤魔化すか。

「サツキは可愛い」

サツキが目を見開く。

「可愛い!？」

何故そんなに驚くのか。

サツキはフォークとケーキの載った皿をテーブルに投げて俺の胸ぐらを掴んだ。

「他はあるね!？」

他？ そうだな、サツキといえば。

「小さい」

「小さい？」

うむ。俺はサツキを上から下まで見る。

小さく華奢で、この先ずっと俺が守っていく存在だ。

「大きい方がいいか!？」

ん？ おかしいな。サツキが険しい表情をしている。

「いや、小さい方がいい」

もう少し太った方が良いとは思うが。
するとサツキはパツと明るい表情になり、俺の首にしがみついてきた。

「ダン、わたーし、ダン好きね」

ああ、なんて可愛いのだ。

サツキの体を抱き締める。

「俺もサツキが好きだ」

「え！？ 本当か！？」

「ああ、当然だ」

好きだからこそ結婚するのだろう。

「それじゃあ二ナは？」

「二ナ？」

二ナが何故出てくる？

うーむ、まああれでも二ナは妹だからな。

「二ナも好きだ」

家族愛というやつだな。

サツキを愛する気持ちとは、まったく別のものだ。

「……………」

ん？ サツキが急に無表情になって震えだした。

「このフタマタオトコ！！」

ドガッ！ と良い音が響く。

頬を拳で殴られた。何故だ？

いや、それよりサツキが膝から飛び下りて走って行くので慌てて
追い掛ける。

「待ってくれサツキ！」

サツキは自室に入り、ベッドに潜る。

「サツキ！」

「知らんね！ あっち行く！」

「サツキ、どうしたんだ。怒っているのか？」

いくら訊いてもサツキはベッドから出てこないし返事もしない。仕方ない。落ち着くまで部屋の外で待っていていよう。

俺は静かにサツキの部屋から出る。すると、そこにマチルダが立っていた。

「サツキ様、随分不安定ですね」

騒ぎに気付き、様子を見に来たのか。

「ああ。少し一人にしておこうと思う」

マチルダは頷いて「それが良いと思います」と言った。

「旦那様と奥様がダン様にお話があるそうです」

カタヤ夫妻が？

マチルダの案内で、俺はカタヤ夫妻が待つ部屋へと行った。

「ダン、こちらへいらっしやい」

おば様に言われて俺はカタヤ夫妻の向かいに座る。

「サツキは最近随分不安定ね。でも許してあげてちょうだい。あの子は私達にとって大切な娘なの」

おばさまに謝られて、俺はとんでもないと首を横に振った。

カタヤ夫妻はそれきり黙る。

……もしかして話は終わったのか？

しかし暫くすると、おじ様が真剣な表情で口を開いた。

「ダン、サツキは神からの贈り物なんだ」

神……？

「サツキがこの屋敷に現れた時の事は聞いたか？」

それは以前サツキから聞いている。

両親と死別し窃盗団の仲間になり、密入国でトーラへ。

そして盗みに入ったが警備隊に見付かり、カタヤの屋敷に隠れた

ところを発見され逮捕。

その後優しいカタヤ夫妻に保護され、更に養女になったのだったな。

「はい。聞いています」

おじ様が頷く。そして遠い目をして語り始めた。

「もうずっと昔の事だ。私達夫婦には娘がいた」

娘……？『いた』と過去形なのはまさか……。

「まだ幼い娘を連れて、私達は城に遊びに行ったのだ。しかし、その途中事故に遭い……」

おば様が涙をハンカチで拭う。

「一緒にいた私達が無事だったのに、娘だけが犠牲になった」

事故で娘を失ったのか。

いくらトーラが医療大国といえど、死者を蘇らす事は出来ない。

おそらくは即　いや、そこには触れないでおこう。

「私達は後悔し、そして神を恨んだ。幼い娘の魂を、どうして連れて行ってしまったのかと」

辛かっただろう。

「いつか想い出にかわる日が来るのだろうか。そう思っていたが、歳をとるにつれ娘を恋しく思う気持ちは益々募る。そうして虚しい毎日を過ごしていたある日　、光と共にサツキが現れたのだ」

それ程までにサツキの存在を眩しく感じたのか。

「不思議な事に、普通なら怪しく感じる筈のその状況を、私達は穏やかに受け止めた。それどころかサツキを見た瞬間、亡くなった娘が帰って来た、神が私達に娘を返してくれたと思ったんだ」

亡くなった娘とサツキを重ね合わせたんだな。

「サツキは娘の　エメローダの生まれ変わりだと私達は信じている」

おば様が嗚咽する。

「エメローダ……！」

「ああ、エメローダ……」

そうか……。そうだったのか。

サツキもカタヤ夫妻も良い出逢いをした。

まさに神のお導きなのだろう。

それから暫くカタヤ夫妻は泣いていたが、やがて涙を拭くと微笑んだ。

「すまない、ダンにはこの事を知っておいてもらいたかったのだ」

「ごめんなさいね。さあ、今度は明るい話をしましょう」

おじ様はおば様に向かって頷き、視線を俺に移した。

「結婚式だが、陛下から王都の外れにある神殿の使用許可をいただいた」

「え!？」

俺は驚いた。

王都の外れにある神殿といえば、トーラ国最古の神殿である。

通常は王族以外の結婚式はしない筈なのだが。

俺の心の声が聞こえたのか、おじ様がニツと笑う。

「それでも陛下の従兄弟だからな。可愛い娘の結婚式、今まで使っていないかったコネと権力を最大限利用して盛大な結婚式にしよう」

そうか、おじ様と陛下は従兄弟だった。

大きく考えればサツキも王族と言えない事もない……か？

まあ少々無理があるが、そこには目を瞑ろう。

「そうよ、盛大にやりましょう。実はもうあなた達の衣装も注文してあるの」

「陛下も全面的に協力すると言ってくれている。日取りは今度の『創造記念日』でどうだろうか」

創造記念日か。

神がこの世界を創造したと伝えられている日だな。

うむ。サツキとの新しい門出に相応しい。

その日は祭りも執り行われるので賑やかな式になるな。

両親にも連絡して、今度こそ来てもらおう。

「それと、サツキには当日まで内緒にしてビックリさせましょう」
おば様がいたずらっぽく片目を瞑る。

成る程、それは良い考えだ。

驚き、そして喜ぶサツキの顔が目に見えかぶ。

ああ、何だかサツキに会いたくなってきた。

俺は立ち上がり、カタヤ夫妻に頭を下げる。

「サツキのところに行きます。式の事はおじ様とおば様にお任せしますので宜しくお願いします」

俺は早足で部屋を出てサツキの元へと向かった。

サツキの部屋のドアをそっと開け中を覗き、ベッドに近付く。

サツキは眠っていた。

目のまわりが少し赤くなっているのは泣いていたからか。

体を丸めて眠る姿はなんとも可愛い。

思わず手を伸ばしかけたが踏みとどまる。

無防備に眠る女性を触るなど非常識……だ。

うむ。非常識。廊下でサツキが起きるのを待とう。

それから廊下に立ってサツキが起きるのを待っていたが、なかなか目を覚まさない。

疲れて座り込んでしまっただけから起きない。

日が暮れ暗くなっても起きない。

もしかして、朝まで起きないのだろうか？

そう思った時、微かな物音が聞こえた。

起きたのか？

目の前でドアが開く。

「サツキ！」

サツキの瞳は不安げに揺れていた。

立ち上がると、サツキが俺の腰に抱き付く。

サツキ……。なんて愛しい。

創造記念日はもうすぐだ。不安なんて吹き飛ばすような素晴らしい式にしよう。

そして……。誰もが羨むような素敵な家庭を築こう！

俺はサツキをギュッと抱きしめた。

「おはようございます」

マチルダに揺り起こされて私は目を覚ました。
う？ げ、まだ暗い。

時計を見ると、まだ五時。

あれ？ 今日はダン、休暇じゃなかったっけ？
だったらなんでこんな早くに起こされるの？

「サツキ様、着替えてください」

もしかして休暇って勘違いだったかな？

ベッドから下りて、マチルダに手伝ってもらいながら着替えて顔も洗う。

さて、ダンを起こしに行こうかな。

廊下に出て……びっくり！

あれ！？ ダンがいる。

自力で起きてくるなんて珍しい。

ダンは私の手を握ると片膝を付いて甲に唇を押しあてる。
ん？ 今日はやけに長いなあ。

暫く待っていると、漸くダンはキスをやめて立ち上がり、そして一言。

「行こう」

え？ ああ、朝ごはんだね。

じゃあ食堂に……ってダン、行く方向が違うよ。

「ダン？ 何処行くの？」

繋いでいる手を引っ張ると、ダンが振り向く。

「いいところだ」

「いいところ？」

朝ごはんじゃないの？

何だかダンが嬉しそうな顔をしているように見えるけど気のせいかな。

ダンは私の手を引いてどんどん歩き、玄関まで行く。

あ、もしかして庭で朝ごはん食べるのかな？

ダンが玄関ドアを開けて……そこで私は固まった。

……いやいや、嘘。

ぬいぐるみ？ リアルなぬいぐるみだと誰か言っ

あ……動いた。

「ちよつとダン！」

「ん？」

ん？ じゃない！ やばいつて！

「あれ……！」

私は目の前にあるものを指差した。

「猫がどうした？」

え、猫？ いやいやいや、違うでしょ！

そりゃ猫科だけど、どう見たってこれは

「ホワイトタイガーじゃない！」

しかも大きい。たぶん普通のやつのは三倍は大きいよ。

そしてそのホワイトタイガーには鞍と手綱がセットされてるけどまさか……。

ダンに引っ張られて一歩踏み出す。

うわ！ やっぱリアルに乗るの？

無理！ せめて馬！ 馬はいないの？

まさか『トーラだけに虎』とかいうくだらないギャグなの？

「駄目だって！ 怖い！」

涙ながらに訴えると、ダンは私を抱き上げた。

「大丈夫」

「大丈夫じゃない！ ヒツ！」

ダンが私をホワイトタイガーに近付ける。

「怖くない」

う……、なんかゴロゴロ言つてめっちゃめっちゃれついてくる。

逆に怖いよ。擦り寄つてこないで。

ダンは私を鞍の上に乗せると、自らも乗る。

「行くう」

え？ だから何処に？

ホワイトタイガーが走りだす。

うわ！ 落ちる！

私は慌てて鞍にしがみ付く。ダンが後ろから腕を回し、そんな私を支えた。

うわー、私、虎に乗ってるよ。異世界で珍体験 ってよく考えたら異世界トリップ自体が珍体験だけど。

何てこと考えてたら、あ、門の外に出ちゃった。

そのままどんどん屋敷から離れるけど……いいのかな？

私、ダンの屋敷に飛んでった洗濯物取りに行った以外で、屋敷から出たことないんだよね。

だつてお父様とお母様が『外は危ないから駄目！』つて言うんだもん。

私つてば超箱入り娘なんだよ。

うーん、でもダンと一緒にだからいいかなあ。

せっかくだから初めての外を満喫するか。

今走っているのはたぶん住宅街じゃないかなあ。屋敷が立ち並んでるもんね。

屋敷の一軒一軒が大きいから、いわゆる高級住宅街だと思う。

キョロキョロしながら暫く走つてると、住宅街を抜けて大通りっ

ぼい場所に出た。

左右に建ってるのはお店だよねえ。看板掲げてるから。……読めないけど。

うーん、読みは苦手なんだよね。

難しいんだよ、トーラの文字は。線がぐちゃぐちゃって書かれてるだけって感じで。

絵本で勉強はしたんだけど、イマイチ覚えられなかったんだよね。お店は朝早いからだと思うけど、みんな閉まってる。

明るくはなってきたけど今まだ6時になってないよね……と空を見上げようとして気付いた。

あ！ ちょっと遠くに見えるあれはお城！？

絶対そうだよ。だって『いかにも』な感じだもん。有名テーマパークにあるのとそっくり。

「ダン、あれお城だよね」

振り向いて訊くと、ダンが頷く。

「あそこ行きたい」

「また今度」

……ダン、ケチだ。

まあ、庶民が気軽に行くような場所じゃないんだろうけど。

打ち拉がれながら大通りのど真ん中走って、お店エリアを抜ける。

その後もどんどん走って……、なんか周りに建物が少なくなってきたけど大丈夫かな？ このまま秘境に連れて行かれるとかないよね。

「サツキ」

「ん？」

「疲れたか？」

意外にもホワイトタイガーは乗り心地がいいから大丈夫だけど……

…。

「何処行くの？」

いい加減教えてよね。

「すぐそこだ。ああ、見えた」

ダンが前方を指差す。

私は示された方向を見た、けど。

ん……？ んん？ んん？ って何あれ？

うわ、ド派手な建物。

形は国会議事堂に似てるけど、上にパステルピンクのでっかいハートが載って、建物もパステルカラーでカラフルに塗りまわられてる。

どう考えてもおかしいよね、これ。センスゼロだよ。

そんな怪しい建物の門前でホワイトタイガーは止まる。

うわあ、近くで見ると益々おかしい。

ダンはホワイトタイガーから下りて、私も下ろす。

ダン、ここに用事があるのかなあ。

ダンは右手に私、左手にホワイトタイガーの手綱を握って門の中に入る。

すると建物のドアが開いて男の人と女の人が現れた。

う、その格好。私はどうリアクションすればいいの……？

二人共、建物と同じカラフルなドレス着てるんですけど。

特に男の人はそれでいいの？ それともそういう趣味？

「こちらでございませす」

男女に案内されて、ホワイトタイガーを外に置いて私達だけ中へ入る。

あー、中もド派手。

パステルカラーのペンキをぶちまけたみたいだよ。

うーん、ここは美術館とかかな？ 芸術が間違った方向に爆発してる感じ。

ボーっと見てると、女の人に声を掛けられた。

「サツキ様はこちらへ」

へ？ あれ？ 何で名前知ってるの？ ってそれより。

「ダン！」

「また後で」

「え……！？」

あ！ 男の人に案内されて行っちゃった。

何で私を置いて行くの？ もう！

仕方なく私も女の人の案内に従う。

天井が高いなあ。凄く広いし……とあちこち見ていたら、女の人
が立ち止まり、そこにあるドアを開けた。

広くてカラフルな部屋。

落ち着かないでしょ、これじゃ。

「どうぞ」

促されて部屋の中に入ると、女の方は更にその部屋の奥にある。

え……！？ うわ！

露天風呂だ！

岩風呂って言うのかな。

もしかして、ここは温泉施設？

女の方が私のドレスを脱がそうとする。

なんかよく分かんないけど、せっかくだから入るか。
裸になって湯に浸かると……うん、気持ちいい。

異世界にもあるんだね、温泉。

私、温泉好きなんだよね。貸し切りつてのがまたいいよ。

私の感覚で三十分程ゆっくり入る。

あー、ちよつとのぼせちゃったかな？ 上がる。

温泉から上がると、女の方が大きなバスタオルで私を包んで拭いてくれる。

そのまま部屋に戻ると……あれ？ ドレスがない。

戸惑っていると、女の方が何処からともなく別のドレスを持ってき

た。

「こちらにお着替えください」

ん？ これに？

緑と白のフリルたっぷりドレスだ。ヒラヒラで可愛い。

そして驚くことに丈が短い。

トーラには裾の長いドレスしかないと考えてたんだけど、違ったんだ。

膝上丈なんて少し振りだなあ。気を付けないとパンツが見えそう。

あ、靴はショートブーツだ。

女の人が急かすから取り敢えず着替える。

それからブレスレットとかチョーカーとか髪飾りとかやたら付けられて、化粧までされる。

「どうぞこちらに」

今度は何処に行くの？

女の人に案内されて部屋を出る。

ちよつと歩いて、また別のドアの前で女の方は止まった。

女の人がノックをすると、中から「どうぞ」と返事が聞こえる。

ドアが開けられ……私は驚愕し、目と口を大きく開けて息まで止めた。

トップスターだ……。日本の某歌劇団のトップスターだ……。

ダン、なんで背中に羽根背負ってるの？

銀色の衣装も『アルミホイルか！』ってツッコミたくなるくらい超光ってるよ。

いやもう、どうしちゃったんだろ。

動かない私の元にダンが来て、私の手を取り片膝を付いた。

「素敵だ、サツキ」

うわ。身動きするたびに羽根がバツサッってなる。

「はあ……、ありがとう。ダンは凄いな」

「ありがとう、サツキ」

手の甲にキスされる。

褒めたんじゃないんだけど……まあいつか。

ダンに手を引かれ、部屋の中央に置かれたテーブルと椅子の所に連れて行かれる。

椅子に座ると女の人が赤と黄色のまだら模様の木の実をテーブルの上に置いた。

え？ 何これ。

「サツキ」

ダンがその実を一粒摘んで私の口に運ぶ。

……食べれるの？ これ。

『毒です！』って強烈に主張してるように見えるんですけど。

口を開けるとダンは木の実を舌の上にのせた。

咀嚼……無味。

なんかがつかり。甘いとか酸っぱいとか苦いとかないの？

妙に汁気は多いから、風呂上がりの喉の渴きは癒されたけど。

そういえば朝ごはん、食べてなかったなあ。

ああ、思い出したらお腹空いてきた。うー、他にまともな食べ物はないのかなあ。

「サツキ」

ん？ 何？

ダンがじつと見てくる。

もしかして食べさせてもらいたいのかな？ 仕方ないなあ。

残ってる木の実を全部掌の上にのせて……。

「あーん」

一気にダンの口へ。

ちよつとだけ食べにくそうに口を動かしてダンが木の実を飲み込む。

それからダンは私の手を両手でギュッと握った。

痛い痛い、離して。

ついでにその服、目がチカチカして嫌。

「サツキ、これから大変だけど一緒に頑張ろう」

は？ 大変って何が？

ダンが私の手を握ったまま立ち上がる。

隅に控えていた男女が一礼をして歩きだし、ダンとダンに引つ張られた私がその後続いた。

部屋から出て長い廊下を歩いて、男女は大きな両開きのドアの前で止まる。

「サツキ、愛してる」

え？ あれ？

今なんか、『愛してる』って聞こえたような気が……？

男女が左右からドアを開いた。

朝四時。

嬉しくて早く目覚めてしまった……。

今日は待ちに待った結婚式当日。

俺は起き上がると着替えと洗顔を済ませた。

本当はサツキが起こしにきてくれるまで待ちたいが、今日ばかりはそんな我が儘を言ってられない。

準備を整えて時計を見る。

まだ時間が早いな。

心を落ち着かせる為に腕立て伏せをする。

一心不乱にやっていると、ノックの音がしてヤンが現れた。

「起きてください。サツキ様の準備がそろそろ整うみたいですよ
ってダン様、汗だくじゃないですか」

ヤンに言われて気が付く。

しまった。やりすぎたか。

慌ててヤンに手伝ってもらい、汗を拭いて着替える。

「気持ちわかりますが、落ち着いて」

苦笑まじりに言われる。恥ずかしい。

深呼吸をして胸の高鳴りを抑えてからサツキの部屋に行く。

ノックをしようとしたら、ちょうどサツキが出てきた。

ああ、今日はまた一段と可愛く見える。

片膝を付いて手の甲に口付ける。

もつすぐこの可愛いサツキが俺の妻になるのだ。

「行くっ」

サツキの手を引き玄関へ。

その途中でサツキが訊く。

「ダン？ 何処行くね」

サツキにはまだ結婚式のことを言っていない。
気付くまで黙ってしよう。きつと驚くだろうな。

「いいところだ」

「いいところ？」

首を傾げるサツキを連れて玄関まで行きドアを開ける。

そこには既に準備が完了したチャマが待っていた。

早速乗って神殿に向かおうと思ったのだが、サツキが何故か俺の
手をギュッと握り足を止める。

「ちよーつとダン！」

「ん？」

どうしたのかと顔を見ると、酷く強ばっていた。

「あれ……」

サツキがチャマを指差す。

「チャマがどうした？」

ブンブンと首を横に振りサツキが叫ぶ。

「『ホアイトタイガア』ね！」

ん？ 何と言った？ ホアイ……？

サツキを引き寄せようとしたら、脛を蹴られた。痛い。

「駄目ね！ 怖い！」

怖い……、ああそうか。俺は漸く気付いた。

サツキはチャマの実物を見るのは初めてなのだな。

サツキの部屋には『子チャマ物語』という生まれたばかりのチャ
マの姿を描いた絵本があったが、これは絵本と違い成獣であるし、
初めてなら少し怖いかもしれない。

実際にはチャマはとても大人しくて賢いトーラの『国獣』である
のだが。

しかもこのチャマは第三王子が貸してくださったもので、通常の

黄と黒の縞模様ではなく、白と黒の縞模様という珍しい色違いのチャマなのだ。

俺は暴れるサツキを抱き上げてチャマに近付ける。

「大丈夫だ」

「大丈夫違うね！ ギャアアー！」

チャマがサツキに擦り寄る。

うむ。さすがは王子のチャマだ。サツキの気持ちを和らげようとしているのだな。

「怖くない」

サツキの動きが止まった。分かってくれたようだ。

鞍の上にサツキを乗せて、俺もその後ろに乗った。

「行こう」

チャマをゆつくりと走らせる。

サツキがよろめいたので後ろから支えた。

住宅街を抜けて王都一の繁華街へ。

まだいつもと変わらぬ状態だが、もう少ししたら祭りの準備が始まるだろう。

今回は創造記念祭りと同時に俺達の結婚祝いもしてくれるそうだ。今日は世界中で祭りが執り行われるが、その中でもトーラの創造記念祭りは特に華やかだから、サツキも驚くだろう。

繁華街を抜けて神殿へ少し急ごうか……と手綱を握り直す。

その時、突然サツキが叫んだ。

「ダン！」

何かと思ったら、城を指差して振り向く。

「あれ！ 城ね」

ああ、城だが？

「あっち行くよねー！」

城に遊びに行くと思ったのか。

ハズレだ、サツキ。

「また今度な」

頬を膨らませてサツキが前を向く。

もしかして城に行った事がないのか？

では今度連れて行ってやるう。

そうだ、チャマの飼育小屋にまだ生まれたての子チャマがいたな。それから騎士の訓練を見学するのもよいか。

俺は煩わしいのが嫌いなので普段夜会には参加しないのだが、サツキと一緒に出席しても良いかもしれない。うむ。

それはまた落ち着いてから考えるとして、今は神殿へ行こう。

サツキもチャマに慣れてきたようなので少し速度を上げて走る。

まだ誰もいない道の真ん中をどんと走って行く、が、ふとサツキが無口になって俺の腕を強めに握っていることに気付いた。

そういえば一度も休憩をとってなかった。

俺にはたいしたことがない距離でも、華奢なサツキには辛かったかもしれない。

「サツキ」

サツキが振り向く。

「ん？」

「疲れたか？」

サツキは首を横に振り眉を寄せた。

「何処行くね」

ちょうどその時、前方に神殿が見えてきたので俺は指差してサツキに教える。

「もうすぐそこだ。ああ、見えてきた」

荘厳　と呼ぶに相応しい佇まい。

かつては神が降臨し、人々に知恵を授けたと言われる場所。

俺達はトーラ最古の神殿に辿り着いた。

神殿の門前でチャマを止めて降りる。

こうして見上げると、色とりどりに塗られ、建物上部にある神殿の象徴も素晴らしく芸術的だ。

サツキも驚いている。

俺はサツキの手を引き門の中に入った。
すると神殿のドアが開いて男女二人の神官が現れる。

「こちらでございます」

神官に案内されて、チャマを置いて建物の中に入った。

ここからは少しの間だけサツキと別々にならなくてはいけない。

俺は握っていたサツキの手を離す。

「ダン！」

サツキの声に後ろ髪引かれるが我慢だ。

「また後で」

「え……!?!?」

男性神官の後に付いて行く。

チラリと後ろを見ると、サツキも女性神官の案内に従って歩いて
いた。

「どうぞ」

通された広い部屋、そこで服を脱ぎ更にその奥へ。

地下から湧き出る聖なる湯で体を清める。

部屋に戻ると、カタヤ夫妻が用意してくれた結婚式の衣装を神官
が持って待っていた。

「なんと……豪華な」

俺はその衣装に驚いた。

銀糸で織られた最高級の布で作られた衣装。眩く輝いている。

おまけに背中の中羽根は、トーラでは珍しいコケコの羽根ではない
か。

これ程までに素晴らしい衣装を作ってくださいるとは、カタヤ夫妻
には感謝しなくてはならないな。

神官に手伝ってもらいながら衣装を着る。

うむ。ピッタリだ。

「どうぞ「こちらに」

次に案内された部屋で、椅子に座ってサツキを待つ。

早く来てくれサツキ。この姿を見せたい。

ところが、おかしい。いつまでたってもサツキが来ない。

どうしたのだ？ いやいや、女性は準備に手間取るものだ。

……それにしても遅い。

あまりに遅いので、神官が様子を見に行ってくれた。

「聖なる湯に浸かっておられるそうです」

……浸かる。

普通はサツと入ってすぐ出るもののだが、女性神官はサツキに教えなかったのか。

まあ……しつかり清めるというのも良いだろう。

それから三十分以上して、やっとノックの音が聞こえた。

神官が「どうぞ」と返事をする。

俺はサツキを迎える為に立ち上がり、そしてドアが開かれた。

……か、可愛らしい！

あまりの可愛らしさにクラクラする。

いや、勿論普段も可愛いが、それにしてもなんて衣装が似合っただ。

俺はヨロヨロとサツキの元に行き、手を取り片膝を付いた。

「素敵だ、サツキ」

「う……ん。ありがーとねー。ダン、凄いね」

俺を褒めてくれるのか？ なんて優しい。

「ありがとう、サツキ」

サツキの手の甲に口付ける。

俺は立ち上がり、先程まで座っていた椅子にサツキを座らせ、その隣に自分が座った。

女性神官が、テーブルの上に木の実を置く。

これは『愛の実』だ。

大昔、神々はこの世界を創り、そして次に一組の男女を創った。

その二人が愛に目覚めるきっかけとなった木の実だと言われている。

結婚式の前に、相手への愛の深さの分だけ食べさせる慣わしとなっている。

「サツキ」

まず一粒。

サツキの口にそっと入れる。

ゆっくりとサツキが食べる。

「サツキ」

『愛の分だけ食べさせてくれ』と言おうとしたら、サツキが残っている愛の実をすべて右手で掴んだ。

「あーん」

それを一気に俺の口へ。

サツキ、もしかして愛の実の慣わしを知っていたのか？

いや、知らなかったとしても、目の前の食べ物をすべて俺に与えようという優しさに感激だ。

量が多くて少々食べにくいけど、この実の多さが俺への愛の深さなのだろう。

ああ、愛しいサツキ。

俺はサツキの手を握る。

「サツキ、この先困難もあるだろうけど、ずっと一緒に頑張っていこう」

二人なら、たとえ行く末に壁が立ちただかろうとも愛の力で破壊

していける。

想いを伝えて立ち上がり、サツキを連れて神官に導かれ歩きだす。俺達は長い廊下を進み、両開きの大きなドアの前で止まった。深呼吸をして少しだけ握る手に力を込める。

「サツキ、愛している」

さあ、行こう！

ドアがゆっくりと開いた。

第21話サツキ編

トーラコスプレ祭り

「うおおーっ！！」

ええ……！？ な、何？

ドアが開いた途端、私達は奇声をあげる奇妙な格好した人達に囲まれた。

やたら長い裾のドレスを着た女、天井に届く程高い帽子をかぶった男、蝶の羽根みたいな背負ってる人も、奇抜な化粧をしてる人もいる。

あ、お父様とお母様だ。

お父様はピンクの服と七分丈のズボンと羽根付き帽子っていうピーターパンもどきな格好して、お母様はヒラヒラのドレスを着て、長い髪の毛を上立たせてそこに花をたくさん挿している。マチルダとヤンもいる。真っ赤なローブの派手な魔法使い風。で、その隣にいるのは二ナだ……けどそれって蔦だよね。

蔦を体にグルグル体に巻き付けている。所々肌が見えていやらしい！！

さらにその後ろに、上司が金ぴかの腹部が露出した鎧を着て立っている。

お腹見えてて鎧の意味あるの？ 私が敵なら確実に腹部を狙うよ。上司の横にいる男も凄い。ダンに負けず劣らずマッチョな大男なんだけど、毛皮をまとして棍棒を持って、まるつきり原始人な格好してる。

でも長い金髪と髭、顔も彫りが深くてかっこいい。耳飾りとかネックレスみたいなのもしててちょっとお洒落だな。

うん、『オシャレ原始人』だ。

何て思ってたなら、オシャレ原始人が私に向かってウインクする。

え……、何この男。ちょっとチャライ感じだなあ。

うーん、それにしても……これって仮装大会なのかな？

ダンが私の手を引いて一歩踏み出す。すると人々が急に静かになつて、サツと左右に分かれた。

ん？ 少し先に杖を持ったおじいさんがいる。

ハートが描かれたラブリーな服を着て、頭に冠かぶつて……いや、それよりその後ろの台座の上……。

髪が長くて緑と白のフリフリの服を着た金髪萌え萌え美少女が、右の掌を天に向けたポーズをバツチリ決めてる等身大らしきフィギュアがある。

……あれって今の私と一緒に格好だ。

それに何だかあの萌えキャラ見たことあるような……うーん、何処でだろ……うーん……あ！ そうか、絵本に描かれてたんだぶん。

よく見ると、この部屋の中には他にもフィギュアが並んでるじゃない！

あ、あそこにダンと同じ格好の青年のフィギュアもある！ お父様やお母様と一緒に格好のフィギュアも。

てことはこれ……もしかして……。

コスプレパーティー！？

うわ、こういうのって異世界共通なんだ。

日本の友達にもいたんだよ、コスプレにハマってる子が。

絵本か小説か漫画かなんか、そんなようなもののキャラクターになりきったコスプレイヤーの集まりなんだね、これ。

「ダン！」

えーと、『コスプレ』ってトーラ語で何て言うんだろ？ えーと、

えーと……。

悩む私の頬をダンが撫でる。

「幸せだろっ」

え？ 幸せ？ この格好するのが幸せってこと？

やっぱコスプレイヤーか。

うーん、ダンにこんな趣味があるとは、人は見かけによらないんだね。びっくり。

ダンに手を引かれておじいさんの前まで行く。このおじいさん、たぶんコスプレ協会の会長さんだ。

おじいさんは大きく息を吸い、満面の笑みで突如歌い始めた。

あなたは〜一生これを愛しますか〜？

心の支えにして〜生きて行きますか〜？

命が〜燃える程〜楽しみますか〜？

うわ。おじいさん、踊りながらもの凄く気持ちよさそうに歌ってる。ミュージカルっぽいなあ。

『これを愛しますか』ってコスプレを愛するか訊いてるのかな？ 変な歌詞……って、う、周りの人達も歌いだした。

さあ〜！ その愛を教えて〜！

……げ。みんな踊ってる。

回ってるよ。クルクルクルクル回ってるよ。むしろ回ってない私達の方がおかしいみたいじゃない。

これはキツイ。ヤバイ集団のヤバイ儀式だ。

出来れば関わり合いになりたくない。って言うか、もう帰りたい。

「はい！ 一生愛します」

あ、ダンが元気よく返事しちゃった。

その上ダンは、啞然としている私に小声で命令する。

「サツキ、誓え」

ええ！？ いや、私別にコスプレにそんな思い入れはないんだけど。

それにこんな怪しい集団の仲間入りはちょっと……。

「サツキ」

うーん……、でも好きな人の趣味は理解してあげたいし、お父様とお母様も人一倍踊ってるし……、一応返事しておくかあ。

「はい」

「わー！！」

周りの人達が歓声を上げる。そして。

え！？ な、何！？

一斉に何かを投げつけてきた。

痛い痛い！ なにこれ！

「サツキ！」

ダンが私を抱き上げて走る。

祝福を　！

あれ？　今何か頭の中で響いた気がするけどなんだろう……ってそんなこと悠長に考えてる場合じゃない！

建物の外へ出て、そこで待ってたホワイトタイガーに乗る。

走りだすホワイトタイガー！

うわ！　早い！

必死でダンにしがみつく。

もう！　いったい何なの！？　訳が分からない！

鬼は外的なやつ！？　コスプレパーティーに節分要素混ぜてみましたみたいな！？

少し走ると、ダンはスピードを落として私の背中を撫でた。

「サツキ、大丈夫か？」

優しい瞳が私を覗き込む。

「う、うん。でもこれ」

何なのと訊こうとした時、また体に何か当たる。

「痛い！」

何！？ 手元に転がった物を拾う。

これ……、花の種かな？

いったい何処からだろう、と顔を上げた私は驚愕した。

オシヤレ原始人が巨大なウサギに乗って笑ってる……。

え、これは幻？ ウサギ、このホワイトタイガーより大きいんですけど……。

それによく見ると、このオシヤレ原始人誰かに似ている気がする。

誰だっけ？

「きゃあ！」

ダンが私を抱きしめてスピードを上げる。

謎のオシヤレ原始人を引き離し、どんどん走っていくと……ん？

あれ？ なんか賑やかな音楽が聞こえ始めた。

今度は何だろう？

スピードが落ちたのでダンの腕の中から顔を出す。

あ、大通りだ。だけど、様子が全然違う。

嘘……、コスプレイヤーがいっぱい。赤ん坊から老人まで、みんな

コスプレしてる……。

建物も旗や花で派手に飾り付けられ、屋台みたいなのが並んでる。

あ、楽器を演奏してる人達がいる。さっきから聞こえている音楽

は、この人達が演奏してたんだ。

少し前に通った時は無人だったのに、この変わりようは凄い。

ダンが私を抱えてホワイトタイガーから下りる。

人々がわっと寄ってきて、ダンと驚く私の手を引いて輪になる。

そして……。

マイムマイム!?

メロディはちょっと違うけど、マイムマイムだよ、これ!

うわ、小学生の頃運動会でやって以来だよ。

みんな超楽しそうに踊ってるよ。

何故マイムマイム? そして何故みんなコスプレ?

やらされてる感はない。みんな心から楽しんでるよ。

あちこちから聞こえる『おめでとう』の声もいつたい……。

うーんうーん。……あ!

分かった! コスプレパーティーじゃなくて、コスプレ祭りだったんだ。

国を挙げてのコスプレ祭り。トーラはこの世界のコスプレ発祥国……かも。

うん。きつとそうだよ。そういうことにしておこう。深く考える
と頭がおかしくなりそうだから。

今日はコスプレ祭りの日!

日頃の悩みやストレスを発散させる為にみんなコスプレして踊ってるんだよ。

いつの間にかお父様やお母様、オシャレ原始人達も加わり、クタクタになるまでマイムマイムは続く。

そして散々踊った後は、飲めや歌えやの大宴会。朝から変な木の
実しか食べてなかったから、これは嬉しい。

みんな「沢山食べる」と言っつて私の前に次々料理を置く。

小さな女の子達は何故か私やダンにベタベタ触り、そんな女の子
達にダンは背中の中を羽根をむしり取って渡したり、私が身に付けてい
るブレスレットや髪飾りをあげたりした。

貰った女の子達は大喜びでクルクル回る。ブレスレットとかは貰ったら嬉しいだろうけど、羽根なんか貰ってどうするんだろ。

そんな感じで夜になるまで大騒ぎして、祭りはお開きになった。拍手と城から聞こえる鐘の音が……あれ？

私は城を見上げて首を傾げた。

城の形が変わってる？

大きくなったというか増えたというかガツシリなっただというか、そもそもこんなに近かったっけ？

変形して移動した？ …… ってそんな訳ないか。

鐘の音が鳴り響く中、私とダンはホワイトタイガーに乗って屋敷に向かう。

はぁ……、疲れた。

やっぱりトーラは異世界なんだなあ。色々変な体験した気がする。帰ったらすぐ寝よ。

私はあくびをしてダンに凭れた。

ドアが開かれた途端、ワツと上がった歓声。

素敵な衣装に身を包んだ親族や友人知人が祝いの言葉を一斉に贈ってくる。

王子殿下も来てくださったようだ。顔面いっぱい施された化粧が美しい。

マチルダとヤンに二ナ夫婦、カタヤ夫妻、隊長とその隣には両親の姿もある。

よかった、さすがに両親も式には来てくれたのだな。

父さんが俺に向かって片目を瞑る。

頑張れと言っているのだな。うむ。了解だ。

サツキの手を引き一歩踏み出すと、人々がサツと左右に分かれて祭壇へと続く道が現れた。

その先で待っているのは大神官。

そして大神官の後ろにある台座の上には、女神『メイイ』の像だ。癒し手と呼ばれる右手はどんな病も怪我也治す力があると言われている、医療大国であるトーラでは一番愛されている神だ。

周りには、メイイと共に我々が生きるこの『新世界』を創造した神々の像がある。

さすが最古の神殿、実に精巧な像だ。

像はたくさんあり、俺には名の分からぬ神もたくさんいる。昔サツキが教えてくれた『ゲイニン』という神の像もきつとあるのだらう。

トーラでは創造記念日には神々の姿を真似る風習があるので、サツキにはメイイの衣装、俺にはメイイと恋仲だと噂されるエイプの衣装をカタヤ夫妻は用意してくれた。何から何までありがたい。

さあ、大神官の元へ。

ところが、歩きだそうとしたらサツキが俺を呼び止めた。

「ダン……!!」

見上げてくるサツキの瞳がキラキラと輝く。
そうか、気付いたのだな。

これが俺達の結婚式だと。
サツキの頬を愛しい気持ちを含めて撫でる。

「幸せになろう」

はにかみ俯くサツキを連れて大神官の前へ。

大神官はすべてを包み込むような笑顔で、誓いの歌を歌い始めた。

あなたは一生この者を愛しますか？

やがて命が燃え尽きるその日まで、支えあいながら心楽しく生きて行けますか？

式に来てくれた人々も歌い、祝福の踊りを始める。

さあ！ その愛を示せ！

俺は大きな声で誓った。

「はい、一生愛します」

次はサツキが誓う番だ。

しかし、サツキは黙ったまま周りをキョロキョロと見ている。
どうしたというのだ？ まさか結婚が嫌になったとでも……。

そこで俺はハッと気付いた。

トーラ人でないサツキは結婚式のしきたりを知らないのだ。

これは迂闊だった。

俺は小声でサツキに教えた。

「サツキ、誓いを」

サツキが俺を見上げて首を傾げる。通じてないのか？

「サツキ」

もう一度言おうとした時、サツキが大神官に向かって力強く誓いを述べた。

「はい！」

この瞬間、俺とサツキは夫婦となった。

ああ！ 愛しい妻よ！

周りの人々が歓声を上げる。

そして　そうだ、のんびり感動してはいけない。

「サツキ！」

俺はサツキを抱き上げて走りだす。

皆は逃げる俺達に向かい花の種を投げ付けた。

あらゆる困難を二人は乗り越え進み、通り過ぎた後にはやがて花が咲き実がなる。

夫婦となった者達への祝福と教訓が籠められた儀式だ。

神殿から出て、待っていたチャマに乗る。

走りだすチャマ。

少し走って誰も追いついて来ないことを確認し、俺は速度を落とした。

「サツキ、大丈夫か？」

驚いているサツキの背中を撫でる。

「う、うん。これでも」

サツキが何か言い掛けた時、体にまたもや種が当たる感触。

まさかまだ誰か追いついて来ているのかと顔を上げると　父さん……。

ウー国の国獣であるラビに乗った父さんは、満面の笑みで俺達に種を投げ付ける。

少々はしゃぎ過ぎで恥ずかしい。

俺は速度を上げた。

「ぎゃあー!!」

悲鳴を上げるサツキをしっかりと抱きしめる。

父さんを引き離してどんどん走り繁華街に近付くと、ああ、始まっているな、賑やかな音楽が聞こえ始めた。

速度を落として止まり、チャマから下りる。

通りにいた人々が俺達をワツと取り囲み手を引く。そして……。

新世界の誕生日と俺達の結婚を祝う踊りが始まる。

あちこちから聞こえる「おめでとう」の声。

こんなに沢山の人に祝ってもらって、俺達はなんて幸せ者なのだ。

見てくれ！　こんなに可愛いサツキが俺の妻だ。

感動と誇らしい気持ちで胸がいっぱいになる。

神殿にいた人々もやって来て、皆で踊る。

そして踊りの後は大宴会だ。

華奢なサツキを心配した人々が、料理を次々運んでくる。

若い女の子達は幸運を分けてもらおうと、俺やサツキを触る。

俺が羽根やサツキの身に着けている装飾品をあげると、大喜びで

感謝の踊りを踊った。

トーラでは、式を終えた夫婦が身に着けている物を貰うと、幸せな結婚が出来ると言い伝えられている。

特にコケコの羽根は珍しいので皆嬉しそうだ。

そうして夜になるまで大騒ぎして、祭りはお開きとなった。

城が鐘を鳴らしながら殿下を迎えに来る。

殿下は俺の耳元で「頑張れよ」と囁き城に帰った。……うむ。

さて、俺達も帰るか。

チャマに乗り、屋敷に向かう。

すぐに甘えて凭れてくるサツキ。

なんて可愛い……！

この華奢で可愛いサツキを俺は一生愛し、守っていく。
サツキを後ろから抱きしめ、俺は喜びを噛みしめた。

ホワイタイガーが止まり、私はハッと目を覚ます。

あ、屋敷に着いたんだ。

ハードな祭りに疲れはて、ウトウトしていたみたい。

あれだけ怖かったホワイタイガーにすっかり慣れた私、凄い！
ダンが私を抱きあげて下ろす。

しまった、ヨダレが……。

ハンカチがないので袖口で拭きながら、ダンと手を繋いで屋敷の中に入った。

あー、早くお風呂に入って寝よ……って思っていたら、いつものメイド服を着たマチルダが現れて「こちらです」と私達を案内する。え？ もう深夜なんですけど。これ以上遊ぶ体力ないんですけど。

「もう眠い」

私と言うと、ダンが抱っこしてくれた。

いや、そうじゃなくて……まあいいや。

マチルダに付いて行くと、あ、居間だ。お茶にしようってことかな？

うーん、お腹いっぱいなんだけど。

マチルダが居間のドアを開ける。

……ん？ んん？

あ！ オシャレ原始人！

派手な服装で、ネックレスとか指輪とかブレスレットにピアスマで満載でチャラ男丸出しオシャレ原始人がソファアに座ってる。

なんでうちに居るの？

それにお父様とお母様、二ナとえーと名前忘れたけど二ナの下僕と……誰？ あの女性。

髪の色がダンと同じ赤　　だけど顔が……そう、二ナだ。二ナそっくり！

なんで？ もしかして二人は姉妹とか？

混乱する私にオシャレ原始人が立ち上がって近付き、ダンごとガバツと抱きしめる。

うわ！ マツチヨに挟まれた！

苦しい、てゆうか暑苦しい！

「やめ……」

「サツキに触るな！」

ダンの怒声が聞こえたと思ったら、急に息が楽になる。

あー苦しかった……って……オシャレ原始人が床に転がってるじゃない。

ふと見ると、ダンが拳を握っていた。

……殴った？ 絶対殴ったよね。

嘘、穏やかなダンが人を殴るなんて……。
オシャレ原始人は頬を擦りながら、不敵な笑みを浮かべて立ち上がった。

「強くなったな、ダン」

知り合い……？

長い髪を掻き上げながらオシャレ原始人が再び近付いて来てダンの肩に手を乗せる。

あれ？ あれれ？

私は首を傾げた。

並んだダンとオシャレ原始人……よく見ると、似てる？

え？ なんて……。

その時、ダンが衝撃的な一言を放った。

「サツキ、俺の父さんだ」

……父さん？

父さんってつまり……父親！？

「ええ！？」

うわ！ そうなの？

うわうわうわ！ びっくり。

ダン置いてジャングルに旅立った馬鹿……じゃなくてワイルド

親父！？

見た目は都会にいるような感じなのに。

そしてお父さん……若い！

ちよっと歳の離れた兄弟で通るよ。

ダンは更に、二ナに似てる女性を手で示して言う。

「母さんだ」

……え？ 母さん？

女性は優しい笑顔で優雅なおじぎをする。

ええと……。二ナそっくり女性が母さん？

じゃあ二ナは……何？

ダンはマザコンで母親に似た二ナを恋人に選んだとか？

でも他人にしては似すぎているような……。

あー！ 考えても分かんない！ 直接訊く！

「ダン！ ダンのお母様と二ナが似てる。どうして？」

するとダンではなく、二ナが笑いながら答えた。

「それは親と子供だから……でもそうね、ちよっといっぱい似てるわね」

親と子供……親と子供……親子！？

ダンの顔を両手で挟んで瞳を覗き込む。

じゃあ、二ナは……。

「何！？」

「何……？」

ダンが眉を寄せて首を傾げた。
つまりこれは、えーと。

私はダンのお父さんを指差す。

「お父様」

次にお母さんを指差した。

「お母様」

最後に二ナを指差して訊く。

「二ナ、って家族！？」

ダンが驚いたように目を見開いて、それから私をギュッと抱きしめた。

「ああ、そうだ家族だ」

うわあああ！ わ、私ってばとんでもない勘違いしてた？

二ナがダンの……あれ？ 姉と妹どっち？

まあどっちでもいいや。

とにかく家族だったなんて！

ん？ だったら何で二ナは私を『泥棒猫』って言ったんだろう？

うーん……あ、ブラコンか。

二ナはブラコンなんだ。

でもそれはそれで、これから私がダンにアタックするにあたり、
面倒くさいことになりそうだなあ。

って思ってたなら、二ナがお腹を擦りながら爆弾発言をした。

「もう一人いるの、ここに」

え？ ここにっでもしかして……。

下僕が赤い顔をして二ナの肩を抱く。

一瞬の間の後、ワッと歓声が上がった。

「おめでとう、二ナ！」

「おめでとう！」

ええ？ やっぱ赤ちゃん！？

下僕が二ナに手を出したのかあ。そりゃ目の前であんな際どい格好されたら、ついついケモノになっちゃうよね。

そうか！ 以前ダンと二ナが話してた『結婚』って、下僕との結婚を相談してたんだ。

妊娠したけど結婚はどうしようと悩む二ナに、ダンが早くした方がいいとアドバイスしてたんだね！

私ったらまたもや早とちりの勘違いしちゃってた。

しかも、赤ちゃんが生まれるなら二ナはもうダンに構っている暇なんてない。

うわ、やったあ！ グツジョブ下僕！

私はダンの腕から下りて、下僕に駆け寄り手を握った。

「おめでとう！」

「サツキ！」

え？ ぐえ！

またダンに乱暴に抱っこされる。

もう！ 何よ！

ドツと笑いが起こり、お父様がパンパンと手を叩きながら言った。

「さあ！ 乾杯しよう！」

……はい？ さっきまで散々飲み食いしたのにまだ飲むの？

結局それから二時間程お酒を飲んで、やっと本当にお開きになる。みんな……特にダンとダンのお父さんは信じられない量の酒瓶を空にしたけど大丈夫かなあ。

「ダン、大丈夫？」

吐いたりしないでね。

ダンは頷いて私の頬をグリグリ撫でる。
痛い痛い。これは見た目普通だけど相当酔ってるな。

「大丈夫！ ほら行けダン！ 頑張れ！」

ダンのお父さんがダンの背中をバシバシ叩いて豪快に笑う。

うーんお父さんも相当酔ってるな。

お父様とお母様が私をギュツと抱きしめて頬にお休みなさいのキスをした。

あれ？ なんか二人の目が潤んでいるような……気のせいかな？
お父様お母様と、今日はうちにお泊まりするらしいダンの家族と別れて私とダンも部屋に戻る。

けどその途中、付いてきていたマチルダが、何故か私だけを引っ張った。

「サツキ様はこちらへ」

「え？ でもダンを……」

部屋に連れて行かないと と言おうとしたら、ダンが片膝付いて私の手の甲にキスをする。

「また後で」

後で？ 『また明日』って言いたかったのかな？

やっぱり酔ってるよ。

ダンは立ち上がり歩いていく。

ちよつと心配だけど、ダンとそこで別れて私はマチルダに付いて行った。

「何処行くの？」

マチルダが微笑み、目の前のドアを指差す。

「ここですよ」

ん？ あれ？ すぐ近くじゃない。

「開けてください」

私が？ 何でだろ。ドッキリでも仕掛けてあるとか？

ゆっくりノブを回してそっとドアを開け、中を覗き込む。

「え！？」

……お姫様の部屋だ。

いやもうびっくり。

いつぞやパンフレットで見た天蓋付きお姫様ベッドが部屋の中央に置かれていて、カーテンも家具も乙女感満載。

ビラビラのヒラヒラって感じ。

「ここが今日からサツキ様のお部屋です。さあ、お風呂へどうぞ促されてお風呂へ。」

わ！ お風呂も乙女。

お母様ったら、内緒で乙女部屋を用意してくれてたんだね。

でも何でこのタイミングでバラすんだろ？

うーん……まあいつか。それよりお風呂入って寝よ！

私はサツと入浴して、それからマチルダが用意してくれたネグリジェを着てベッドに入る。

「お休みなさいませ。良い夜を」

マチルダが部屋から出て行く。

ふぁー。眠い。

大あくびして私は目を閉じる。

今日は凄い一日だったなあ。

疲れたけどダンがフリーだって分かったのは収穫だった。

うん、明日からもっと積極的に迫っていこう。

そうだ、もうまどろっこしいことはやめた！

思い切って……で、「責任取って」って泣けば、真面目なダンナから逃げられないよね。

よし！ 頑張るぞ！ 善は急げ、明日夜決行だ！

ドンドン！

ん？ ノックの音？

マチルダかなあ。何か忘れ物でもした？

「はい」

ベッドの中から返事をする。

ドアが勢いよく開いた。

屋敷に帰ってきた。

サツキを抱いてチャマから下りる。

さあ中へ……と思いつながらふとサツキを見ると、俯いて袖口でそっと涙を拭っていた。

サツキ……！ 俺の胸の中で喜びの涙を流していたのか。
可愛いサツキ。

俺はサツキの手を握り、屋敷の中へと入った。
すぐに現れたマチルダが、カタヤ夫妻と両親が待っている居間へと俺達を案内する。

順序が逆ではあるが、これから両親を正式に紹介するのだ。

しかしその途中、サツキが俺の手を引っ張り、上目遣いをして甘えた声で言う。

「もう……寝るね？」

う……。それは反則だサツキ。

動揺を隠すように、大胆な妻を抱き上げる。

そのまま居間まで行き、マチルダが開けたドアから部屋の中へと入った。

ソファーに座っていたカタヤ夫妻と両親、二ナ夫婦が一斉にこちらを見る。

父さんが立ち上がり、俺達の傍に来た。

我が父ながら……、相変わらず無駄に派手だ。

田舎に行ってもまったく変わらないな　と呆れていたら、父さんが突然サツキに抱きついた。

「サツキに触るな！」

この節操なしが！

俺は渾身の力で父さんを殴り飛ばす。

まったく、油断も隙もない。俺の愛する妻に指一本触れるな。

恥ずかしいから知らぬ振りをしていたが、実は知っているんだぞ。

田舎暮らしに憧れて 何て言いながら、本当は若い女にすぐ手を出す父さんに母さんがぶちギレて、ろくに人のいない辺鄙な田舎に強制連行したことを。

まさかそのまま本格的に住み着くとは思わなかったが、今母さんの選択が正しかったと分かった。

騎士としての父さんを俺は尊敬しているが、一人の男としては最低だ。

母さんもニコニコ笑ってはいるが、心の中は煮えくりかえっているに違いない。後で半殺しにされるがいい。

「ダン、強くなったな」

父さんが殴られた頬を押さえながら立ち上がり、俺の肩に手を置く。

にやけ顔が頭にくるが、こんな男でも父親には違いないのでサツキに紹介する。

「サツキ、俺の父さんだ」

サツキは大きく目を見開いて驚いた。

「ええ！？」

まあ父さんはこんなに派手で胡散臭いから、当然の反応だな。

続いて母さんを紹介する。

「母さんだ」

母さんが立ち上がって優雅に頭を下げた。

うむ。さすが母さん。安心して紹介出来る。

二ナはもう知っているから紹介する必要はないな。
ではソファーに座るかと足を踏み出そうとしたら、サツキが母さんを指差した。

ん？ 何だ？

「ダン！ ダンのおかさま二ナ似てるね！ 何でか？」

何故ってそれは……。

「そりゃ親子だから……。でも少し似すぎかしら？」

……二ナ、サツキは俺に訊いているのだ、勝手に答えるな。

さて、ソファーに 痛い。

……サツキ、何故ビンタする。

父さんに触られたことを怒っているのか？

「何ね！」

「何……？」

ん？ どういう意味だ？

サツキは父さんを指差した。

「おとさま」

続けて母さんを指差す。

「おかさま」

最後に二ナを指差し言った。

「二ナ、家族ね！」

家族……、そうか！

俺はサツキを抱きしめる。

「ああそうだ、家族だ」

本当の両親と死別して犯罪に手を染めていたサツキを暗い世界から救ってくれたカタヤ夫妻 暖かい『家族』。

サツキにとってかけがえのない家族という存在に、俺は勿論、俺の両親や二ナ夫婦も加わったと言いたいのだな。優しいサツキ。そうだ、みんなサツキの家族だ。華奢なサツキの背中を撫でる。その時、二ナが驚きの発言をした。

「もう一人いるわよ、ここに」

お腹を愛しげに擦る二ナ。まさか。リックが赤い顔をして二ナの肩を抱く。一瞬の間、ワツと歓声が上がった。

「おめでとう、二ナ！」

「おめでとう」

両親もカタヤ夫妻も笑顔で祝福の言葉を贈る。そうか……、二ナもとうとう母親になるのか。そして俺達ももうすぐ……。

サツキに視線を移すと、キラキラと輝く瞳で二ナの腹を見つめていた。

俺の腕から飛び下りて、二ナに駆け寄　ん？

「おめでーとねー！」

「サツキ！」

待て！ 祝福の言葉を贈るのはいい。だが何故リックの手を握る！俺は慌ててサツキを抱き上げた。ドツと笑いが起こる。何故だ？

「さあ！ 乾杯しよう」

おじ様が手を叩きながら大きな声で言う。

う、うむ。そうだな。

気を取り直して俺はソファーに座り、横にサツキを座らせた。マチルダが俺の前にグラスを置き、父さんがそのグラスに酒を並々と注ぐ。

サツキにはやめた方がよいかと思ったが、おば様が『一杯だけ』とサツキのグラスに酒を注ぐ。

それから二時間程飲み、「そろそろ……」と気を利かせた母さんが言っ、て、お開きとなった。

うむ。では……部屋に行こうか。

サツキは酔いが回ったのか、少しだけ赤い顔をして俺を見上げ呟く。

「大丈夫ね……ダン」

どうした？ 不安になったのか？

サツキを安心させる為、頬を撫でてやる。

「大丈夫だ！ さあ行けダン！ 頑張れ！」

父さんが俺の背中をバシバシ叩いて笑う。

サツキに配慮が足りない父さんは母さんに殴られ強制連行された。カタヤ夫妻が優しくサツキを抱きしめ、俺達は皆と別れて部屋へと向かう。

途中、サツキは俺達の新しい部屋へ、俺は以前の自室へと行こうとしたら、少しでも俺と離れるのが嫌だとサツキがぐずった。

可愛いサツキ。手の甲に口付け、「また後で」と説得をして別れる。

部屋に入り湯浴みと着替えを済ませると、すぐにマチルダが「サツキ様の準備が整いました」と知らせに来てくれたので、俺は急いでサツキの元へと向かった。

トントン。

ノックをすると、サツキが可愛い声で返事をする。
深呼吸をして、俺はドアノブを握った。

暖かい日差しが降り注ぐ庭で、私とダンはお茶を飲む。

大きな口を開けてケーキを頬張るダン。

幸せそうな顔しちゃって！

私は頬杖を付いてそんなダンをじっと見つめる。

一見、人畜無害なこの男。

だけど数日前、私はダンの真の姿を知った。

コスプレ祭りがあったあの日、眠りにつく寸前に聞こえたノック。

勢いよく開いたドアから入ってきたダンは、こっぴど叫んだ。

『愛している、サツキ！』

驚く私の元に駆け寄ったダンは突如　ケダモノに豹変した。

まさかダンがあんなことするなんて……異世界トリップ以上の衝撃だったよ。

祭りでテンション上がった上に飲み過ぎて、酔った勢いで……って本当に馬鹿なんだから。

ダメージくらった私は翌日寝込んで、ダンはカタヤの両親とダンの両親、ついでにニナやマチルダ、ヤンにまでこっぴどく怒られた。でもベッド脇で『愛してる』って言われ続けたら、もう何だか許してあげようかなって。惚れた弱みかな？

実はダンも前から私のこと好きだったんだって。

それならそうと強引にじゃなくて、ちゃんと告白してから色々すればいいのに　馬鹿。物事には順序つてのがあるんだよ。

もう本当に、私が付いてないと駄目なんだから。

「ダン」

私はフォークでケーキを掬ってダンの口に持っていく。

「あーん」

ダンが口を開けてパクツと食べる。

まあ、思いがけない出来事で親公認の恋人同士になれたことだし

……近い将来プロポーズされて『奥様』なんて呼ばれちゃうかも。

うん、ダンとだったら結婚しても上手くいくと思う。

突然異世界にトリップして、それでもこんなお金持ちに拾われて、ちよつと困ったところもあるけど素敵な彼氏が出来て、私って本当に運がいい。

日本の両親が言ってた『自分なりの新しい世界』って、もしかしたらここのことかも……なんてね！

私はダンを見上げて訊く。

「ねえ、私のこと……好き？」

するとダンは、私の手をギュツと握って答えた。

「当然だ。サツキ、好きだ、愛してる」

唇が近付いてきて、私はそれを受け入れる。

チュツ！

ああ！ し・あ・わ・せ！

暖かい日差しが降り注ぐ庭で、俺とサツキはお茶の時間を楽しむ。俺がケーキを食べる姿を、サツキは微笑みながら見ていた。

ああ、なんて可愛い。

一見、華奢でか弱いサツキ。だが数日前、俺はサツキの真の姿を知った。

結婚式があつたあの日の夜、部屋のドアを開いた俺は、まずサツキへの愛を叫んだ。

『愛している、サツキ!』

サツキの元に駆け寄った俺は、抱きしめそして……。しかしその時、サツキが目を見開いて叫んだ。

『まさーか! トンデヒニールナツノムシ!?!』

そして突如 いや、これ以上は俺の口からはとても言えない。

とにかく驚愕しながらも期待に応えようと奮闘した結果、翌日サツキは起きられなくなり、俺は皆から怒られた。

ただ、父さんだけは腹を抱えて爆笑していたが……。

「ダン」

サツキがフォークでケーキを掬って、俺の口元に持ってくる。

「あーん」

大きく口を開けて、ケーキを食べる。

きつと……近い将来には、この広い庭を子供達が駆け回っているだろう。楽しみだ。

こんなに可愛くて優しく、時に積極的なサツキと結婚出来て、俺は本当に運がいい。

隊長も騎士仲間達も、殿下や陛下も『ダン』は結婚してとてもいい感じになった』と言う。

周囲から話し掛けられることが多くなり、そして驚く程仕事が順調になった。

以前隊長から皆と仲良くしろと注意された意味を、俺はやっと理解した。

すべては目の前にいる、愛する妻のおかげだ。

サツキと出会って恋をして、そして結婚して……とても不思議な感覚なのだが、目の前がパツと開けて新しい世界に辿り着いた気がする。

「ねえ、わたーしことね……好き？」

「サツキが俺を見上げて訊く。

俺はサツキの手を優しく握り答えた。

「勿論だ。サツキ、好きだよ愛している」

チェルルの実のような赤く可愛い唇をサツキが突き出し、俺は顔を近付ける。

チュッ！

ああ！ 幸せだ！

マチルダとヤンの内緒話

「愛している！ サツキ！」

ダン様の大きな声が室内から聞こえ、私はそつとお二人の愛の部屋から離れた。

皆様もうお部屋に入られたようですし、私も今日はもう休むことにいたしましょう。

自室までの長い道のりを歩きながら今日の結婚式の様子を思い出し、思わず笑顔になる。

今まで参加した結婚式の中でも一番素晴らしい結婚式でした。

王族並みの豪華な内容で、サツキ様も驚かれました。

「……………ああ」

フウつと息を吐き、私はサツキ様が突如現れた時のことを思い出す。

たった数ヶ月前のことなのに、ひどく懐かしく感じるのは何故でしょう？

そう、あの日は雲一つ無い青空で、旦那様と奥様は庭でお茶を飲んでおられました。

「旦那様、お茶のおかわりは……………」

「いや、いらない」

「奥様……………」

「もういいわ」

「……………」

あの頃のお二人は今と同じで優しくはあったのですが、とても暗くて沈んだ表情をされていました。

原因は 『エメローダ』様。

お二人の最愛の娘。幼くして儂く散った命……………。

私はエメローダ様のことを直接は知りません。ただ以前この屋敷で働いていた使用人に、お二人がエメローダ様をととても可愛がっていたと聞いたことがあります。

歳をとるにつれ募る深い後悔と寂しさで、お二人の心はいっぱいになってしまっているようでした。

「もう中に入ろうか」

旦那様がテーブルに手を付いて立ちあがろうとし、奥様もカップを置く。

私は空のカップを回収しトレイに載せようとしたその時。

溢れる、光……………。

一瞬の出来事でした。そして眩しさに瞑ってしまった目を開けると、そこには黒い髪と瞳の華奢な少女が立っていました。

いったいこれは何なのか。この少女は誰なのか。

少女はまるで女神メイイのように丈の短い変わったドレスを着て、手には黒い鞆と白い袋のようなものを持っています。

呆然とする私の耳に飛び込んできたのは旦那様の声。

「エメローダ……………」

え？ エメローダ様？ この少女が？

しかしエメローダ様は亡くなられた筈。

戸惑う私を余所に、旦那様はフラフラと少女に近付きそして抱きしめる。

そして奥様も同様に少女を『エメローダ』と呼んで抱きしめた。

本当にエメローダ様なのか、神の奇跡でも起こったのか。

少女はそんな二人を交互に見て、口を開く。

「xxxxx」

何……？ 私だけでなく旦那様と奥様も驚いて少女を見ました。

聞いたことの無い言語。他国語　いえ、それならば博識な旦那様がこれほど驚かれるわけがない。

「xxxxx」

少女は眉を寄せてもう一度同じ言葉を言い、それからハツとした表情で自分の胸を掌で叩いた。

「xxxx、xxxx……サ・x・キ、サ・ツ・x、サ・ツ・キ、サツキ！」

サツキ……？ 何のことなのでしょう。

少女は『サツキ、サツキ』と繰り返し、旦那様と奥様を指差しました。

「xxxxx」

旦那様と奥様が顔を見合わせる。

少女は何かを訴えているようです。

「×××！」

戸惑う旦那様と奥様。

次第に少女の顔が歪み始め……。

「うわあああーん！ ×××！ うえあああーん！」

少女は大粒の涙をポロポロと零して泣き叫び始めました。

旦那様も奥様もこれには大慌てになり、少女を一生懸命宥めながら屋敷の中へと連れて行きました。

そして二週間後。

「わたし、サツキ。これ、おとさま、おかさま、好き」

「まあ！ サツキ、ありがとう」

「お父様もサツキが好きだぞ」

旦那様と奥様がサツキ様を抱きしめます。

旦那様が必死で意思の疎通をはかった結果、『サツキ』というのは少女の名前であること、『二ホン』という場所から来たことが判明いたしました。

また、旦那様はサツキ様の現れた状況から判断して即座に養女にする手続きをとられ、このことを他に公言しないようにと私に注意されました。

そう、あの溢れる光。

最初私たちは、てっきりサツキ様自身に特別な『力』があるのだろつと考えたのですが、どうやらそうではないようなのです。では、何なのか。

本来ならこんな怪しいととれる存在は、国王陛下に引き渡すべきなのかもしれませんが、旦那様も奥様も『名も姿も違うが、この少女はエメローダに違いない。神が私達に娘を返してください』との

だ』とおっしやりそうはしませんでした。

神が……、もし本当にそうでこのことを世間が知ったら、大騒ぎになってしまいかもしれません。

旦那様がサツキ様を養女にしたのは、サツキ様を『カタヤ』の名で守る為なのでしょう。

「マチ、好き」

「ありがとうございます」

サツキ様はたった二週間の間に片言で会話できるほどトーラ語を覚ええました。

私の『マチルダ』という名は上手く発音できないようで、『マチ』と呼んでくださいます。

サツキ様が何者であるかは分かりませんが、こうしてニコニコ笑う姿は可愛らしく、とても危険な存在には見えません。

それどころか守ってあげたいと思わせる何かがサツキ様にはあります。

そしてそれは。

「サツキ様！」

ノックも無しにドアを開けた夫、ヤリルツジランザイジを睨む。

「ほら、ケーキですよ」

ヤリルツジランザイジはそんな私を見ることなくサツキ様の前にケーキを置いた。

私達の間には留学中の男の子が一人いるのですが、ヤリルツジランザイジはサツキ様をすっかり気に入って最近『やっぱり女の子もほしい』と戯言まで言います。

「ありがーどね、ヤ、ヤ、ヤ……」

「ヤリルツジランザイジ」

「ヤ、ヤ、ヤデイ、ヤリユ、ヤ……」

まあ、言えなくて当然でしょう。私でさえ言いにくいのですから。

肩を落とす夫の背中を叩き、何か愛称のようなものが必要かもしれないと考えた時、私は思い出しました。

そういえば以前隣に住んでいた節操なしのロクデナシ男も、名前が言いにくいと勝手に夫を『ヤン』と呼んでいた。『息子がダンだからお前はヤンが覚えやすくて良い』とかなんとか言って。

確かに『ヤン』なら呼びやすいでしょうが……。

「ヤン……」

思わず口になると、視線が集まりました。

「あら、それは……なんだか懐かしいわね」

奥様が遠い目で言います。

あの節操なしとの激闘の日々を思い出されたのでしょうか。

「ふむ、ヤンならサツキも呼びやすいか」

「ええ!？」

嫌そうな顔をする夫を指差し旦那様が言いました。

「ヤン?」

サツキ様が首を傾げます。

「ヤン」

「ヤン」

「ヤン」

私たちが言うと、サツキ様が大きく頷いて夫を指差しました。

「ヤン!」

ああ、懐かしい。

サツキ様が現れてから旦那様も奥様もとても明るくなりました。

特別な『力』はありませんが、サツキ様には周りを明るくする『特別な力』があります。

自室に着いた私がドアを開けると、夫が椅子に座ってボーっとしていました。

「ヤン」

夫は渋々ながら『ヤン』というあだ名を受け入れ、私もいつの間にか夫をヤンと呼ぶのが普通になってしまいました。

「マチルダ……」

ヤンが溜息を吐く。

「手塩にかけて育てた大事な娘を取られた気分だ」

「馬鹿ね」

項垂れるヤンを後ろから抱きしめる。

「やっぱりあの日追い返しておけばよかった」

私は思わず噴出しました。

『あの日』というのはダン様がサツキ様目当てにこの屋敷を訪れた日のことです。

大切に大切に守っていたつもりでしたのに、いつの間にかサツキ様とダン様は出会い、恋をしていたのです。

そう、あの日。

屋敷の前をウロウロと歩く大きな体。

「……あれ、隣の息子だろう？ なにやってるんだ？」

「さあ？ この屋敷に用でもあるのかしら？」

久し振りに見た隣の屋敷の息子 いえ、もう当主でした。

ワーガル家の当主ダン様。

節操なしの息子とは思えぬ真面目さで、更に剣の腕も一流の騎士で伯爵様。

体格も立派で、これでもう少し表情豊かならさぞモテたでしょう。そのダン様が落ち着きの無いチャマのように屋敷の前を歩き回っている。

「ちよつと訊いてくるわ」

私は外に行き、ダン様に声をかけた。

「まあ、ワーガル様、お久し振りです。どうされたのですか？ 先程から何度も通り過ぎているようですが」

するとダン様は大きな図体に似合わぬ小さな声で、視線を逸らして言いました。

「いや、その、ちよつと会いたいのだが」

「旦那様にですか？」

「いや……、サツキに……」

え！？ サツキ様！？

私は心底驚き、そしてピンとききました。

ダン様はおそらくサツキ様の姿を見かけ、一目惚れしたのだと。

「え……！ あ、まあ、まあまあ、そうでございますか。どうぞこちらへ」

ダン様を客間に案内して私はサツキ様を呼びに行く。その途中、ヤンが私の袖を引つ張った。

「何だつて？」

「サツキ様に一目惚れして会いに来たようよ」

「は！？」

さあ急いでサツキ様を……と思つたら、またヤンが袖を引く。

「追い返そう！」

「あら、でも会わせるくらいいいじゃない。かなりの覚悟で来たみたいだし」

「『覚悟』つて何だ！？」

私はヤンを振り切りサツキ様の元へと行つた。

「サツキ様、ワーガル様がおみえになつています」

サツキ様が首を傾げる。

「まあ、ダンが？ サツキに？」

「いつ知り合っただい？」

旦那様と奥様が驚いてサツキ様を見た。

「前、ちよつと会う」

サツキ様はそれだけ言うと、急いで客間に向かう。

あら？ ダン様の一目惚れだと思っていたのですが、これはどうも違うみたいです。

既に二人は出会っている。ではもしかして……。

その予感はずぐに当たっていたと分かりました。

なんと、サツキ様とダン様が抱き合っているところを目撃してしまったのです！

あのダン様が頬を赤く染め、サツキ様はそんなダン様の胸に顔をうずめて甘えていました。

ああ、恋は唐突に。きつとお互い一目惚れし、密かに会っていたのでしょうか。

私は旦那様と奥様にこのことを報告しました。

お二人ともすぐく驚かれ、奥様はダン様ならと理解を示し、旦那様は信じられないと叫ばれ、ついでに話を聞いていたヤンも信じたくないと言いました。

しかしその後、サツキ様がダン様の為にお料理をしたり、減量したり、ケーキを分け合ったりしているのを見て、二人が相思相愛なのは真実であると旦那様もヤンも気づきました。

あ、そうです。ちよつぱり肥えたのを気にしていたサツキ様のドレスは、こつそり一回り大きな同じドレスに買い換えておきました。まあそれはともかく、お二人の愛の深さを私達が知ったのは……、まあ、その、あれです。若さゆえの愛の暴走とでも言いましょうか。ソファで抱き合うお二人を目撃してしまった旦那様は、衝撃のあまりものすごい速さで逃走されてしまいました……。

まさかの既成事実が発覚し、お二人の結婚を認めざるを得ないと涙を流す旦那様。

そんな旦那様にサツキ様は屋敷の改築と同居を提案し、渋る旦那様を説得されました。本当に優しい方です。

その後、お二人は泣いたり笑ったりしながら着実に愛を深め、今日の日を結婚式を無事迎えることができました。

「サツキ様が幸せそうならいいでしょ？」

「……そうだな」

一つ後悔といえば『ヤン』と『ダン』でしょうか？

似たような名が一つ屋根の下にいるのは少しだけ紛らわしいです。

「さあ、私達も寝ましょう」

私はヤンの背中を叩く。しかしヤンは動かない。

どうしたのかと首を傾げる私にヤンは驚くべきことを言いました。

「ずっと黙っていたが……、俺、本当はサツキ様が何者であるか知っているんだ」

「えー!？」

どういうことでしょうか？

私はヤンに訊きました。

「本当に？ どうやって知ったの？」

「……旦那様と奥様、ダン様にも内緒だぞ」

ヤンはゆっくり語りだす。

「昔、近所に住んでいた神官様から聞いたんだ。人間に恋した妖精の話」

「妖精？」

「昔、人間に恋した妖精が、その美しい羽と『力』を引き換えにして神に人間の姿にしてもらい、その人間と結婚した」

は？

「……………それ、ただの物語じゃないの？」

ヤンが首を横に振った。

「『まばゆい光と共に現れた少女、その姿は華奢でこの世のものとは思えぬほど愛らしい。神から貰いしドレスを着て妖精世界の言葉を話す』人間になった妖精が現れた時、居合わせた者が残した記述らしい。状況がピッタリだろう？」

「それは……………」

サツキ様に『力』は無い。そしてあの光……………。

「旦那様達はサツキ様をエメローダ様だと思っている。だから絶対内緒にしろ」

「……………」

妖精、サツキ様が……………。

「俺達だけの秘密だ」

「……………」

私はヤンを見つめながら頷きました。

「まあ、何者でも俺達のサツキ様であることにはかわりない」

「……………そうね」

「……………寝ようか」

私達はのろのろと着替え、ベッドに入り目を瞑る。

妖精……………、かなりの衝撃です。でも、いえ。

私は首を振る。大切なのはそこでは無い筈。

サツキ様が何者でも、毎日笑っていられるように……………。

フツと気持ち軽くなる。

「ヤン」

「ん？」

「明日も美味しい料理を作ってね」

ヤンが目を開け私を見つめる。

「……了解！」

いたずらっぽく笑うヤン。

私達はクスクスと笑いあい、眠った。

マチルダとヤンの内緒話（後書き）

「ダン」と「ヤン」の名前が似ている＝うっかりミス

メイイと気の合う仲間達の新しい世界 前編

うーん、暇だなあ。

地面にごろごろ寝転びながら、下界を見下ろす。

気の合う仲間とこの世界を創造してからどれだけの年月が経ったっけ？

何百年？ 何千年？ ……しまった、数えてない。

まあ、長い年月が経ってるのは間違いないよね。

うーん、暇。

創造したばかりの頃は充実した毎日だったのにな。

そう、まだ神様見習いをしていた私達に、主神はおっしゃった。

「もう、好きにすれば良い……」

いつも怒鳴ってばかりの主神が遠い目をして呟くように。

「我の世界からできるだけ遠いところに新しい世界でも創って好きに遊べ。ただし、『人』を創るのはやめなさい。それと、他の世界の神々に迷惑をかけないように。分かったな、特にメイイ」

……何故私だけ名指し？ おかしいなあ。何か誤解でもされてる？

でも本来ならあと数万年は見習いやってなきゃいけないから、私達は大喜びで主神の気が変わらぬうちにと遠くへ旅立った。

そしてたどり着いた場所で世界の元となる種を蒔き、育った世界に名を付ける。が、そこでいきなり大問題が。

新しい世界の名をどうするかで揉める。

いくら話し合っても決まらず、結局最後はみんな疲れて『もうそのまんま新世界にしちやおうか……』ってぐだぐだ状態で決定した。

その後、世界の基本方針を決めるのは意外と早かった。

豊かで楽しい世界。でもちよっぴり危険なテイストもあり。

中心付近は遊び場として共用。他世界からこっそり拝借したものは遊び場のみを設置可能。

祝福や知恵は与えずさない。

向上心の高い強者の為にチャレンジ企画（賞品あり）を用意。

などなど。

それから陣地 それぞれの管理エリアを決める為に『陣地争奪戦 無制限一本勝負』を行い、勝った神から順に好きなだけの陣地を獲得した。

ちなみに私は三位。『癒し』の力はあるけど、一撃で気絶させられたら勝ち目無いよね、くやしけど。

陣地も決まり、あらゆる生命も誕生させ、時々気に入った『人』に祝福を与えたり知恵を与えたりして、長い年月が過ぎた。

人類はそこそこ進化。全体的にいい感じ。

だけど残念なことに最近あまり神の力に頼る者が少なくなってきた。尊敬されなくなってきたというか……。それも時代の流れだから仕方ないのかな。

もう一つ残念なのは、せっかく作ったチャレンジ企画に最近挑戦する『人』がいないんだよね。

ちよつと難度が高かったかな？ 色々と尾ひれも付いて、最早伝説として語られるのみになってるよ。

昔はもうちよつと骨のある者がいたのにな。あーあ。

暇だなあ……。

何か面白いこと ん？

あ、事故だ。『チャマ車』同士の正面衝突。乗客は無傷みたい。

良かったね。

さて、別の場所でも見てみようか　ん？　んん？　あれ？
私は天界から身を乗り出し下界をよく見る。

馬車の中にいる女の子、魂が抜けている。

あらら、たまにあるんだよね、『器』が大丈夫なのに魂が離脱すること。

大抵は自力で器　体に戻るんだけど、ごく稀に彷徨い始めるドジな魂もいる。

そしてこの魂は……ドジっ子ちゃんだ。

「エメローダ！」

「エメローダ！！」

両親らしき者達が叫んでいる。

早く戻してあげないと、魂の抜けた肉体は長く持たない。

あらゆる生命は『魂』と『器』できていて、そのどちらかが欠けてもいけない。魂さえ残っていれば転生はできるけど、それはもう別人になってしまうし、転生までは長期間天界での待機が必要となる。

とか言ってる間に、あ、あの子どもっか行っちゃう。駄目だったら生身の人間に姿が見えないようにして、できるだけ力も抑えて私は下界に降りる。

そして魂に声をかけた。

「こら！　えーと、エメローダ？　体に戻りなさい」

魂は振り向いた。長い金髪に大きな青い瞳、フリフリのドレスという姿は肉体を無意識に模しているのだろう。

「さあ、送ってあげるから帰るわよ」

手を差し伸べた私に魂は可愛く微笑み 逃走。

……………。え？ 何故？

「待ちなさい！」

魂が振り向く。

「やー！ あっかんべー！」

……………。

あの子、まだ子供みたいだし、事の重大さに気づいてないんだ。しかも相当悪がき。

もう、仕方ないなあ。強引に捕獲するか。

左手に力を弱く込めて魂を傷つけないようにそつと。

「メイイ！ こんなところで何やってんだ？」

肩をポンと叩かれ、私は飛び上がった。

「ウヒャア！」

予定外の力が左手から発射される。

「あ……………」

少女の魂は 消えた。

いない、いない、どこにもいない！

この世界は捜した。周辺の世界も捜した。消滅はしていない筈。おそらくどこかの世界まで吹き飛ばされたんだと思うけど……………何で見つからないの？

異世界間の魂の移動は、予想外の影響をその世界に与える可能性があるから原則禁止なのに。

「もっと遠い世界まで捜しに行つて！」

私はエイプに命令する。エイプが端整な顔を顰めた。文句あるの？ そう、この男があの時私を驚かさなければ、こんなことにはなつていなかったのに！

エイプと一緒に新世界を創つた仲間で陣地もお隣。昔は一緒に下界に降りたりしていたから、人には恋人同士と噂されていたりする。実際は恋人ではないけど、確かに仲はいいかな？

時々私の元に遊びに来るんだけど、あの時はタイミングが悪すぎた。

「分かつたよ」

エイプが翼をバサバサいわせながら去っていく。私ももう一度探しに行こうとしたら、不意に現れた大きな体の髭もじゃ男、酒の神『シユラーン』が千鳥足でやってきて私に訊いた。

「おいメイイ！ 魂は見つかったか？」

「うるさい！」

酒臭い。顔を近づけないでよ。

「俺は『年内に見つかる』に陣地の半分賭けてるんだ。頼むぞ」

「……………」

私がこれだけ苦労しているのに、それを賭けの対象にするなんてく…………！ 覚えていなさい！

私はシユラーンを無視して魂を探しに出掛けた。

そして月日は流れ。

「メイイ、見つかった」

エイプの言葉に私は驚いた。まさか消滅してしまったのかと焦っていた矢先の出来事だった。

ちなみにシユラーンは陣地の半分以上を失っていた。

「え！？ どこで！？」

エイプの服を掴み、私は訊く。

「あゝ……。俺達の故郷の世界」

「……え？」

故郷？ それは……。あそこですか？ 何故よりによって？

主神の怒鳴り声を思い出し、私はぞっとした。

「ほら、あれだろ？」

「ホントだ。でも……。転生してるね」

「転生しているな」

「……」

「……」

絶句。転生 とは本当は少し違う。

うーん、言うなれば『融合』、というか……。

「取り込んだのか？」

それは……。言わないでほしかったな。

おそらく、何らかの事情でほぼ消滅していた魂と一つになり転生した。

一見この世界の魂みたいにかモフラージュしているけど、よく見ると新世界の魂が主だと分かる。魂には創った神の癖みたいなものが出るからね。

「と、とにかく、このことに主神はまだ気づいていないみたいだし、あの子連れてとっとと帰りましょう」

ほんの少し別の魂が混ざっていても、この子は新世界に連れ戻した方がたぶん良い。

私はできるだけ力を抑えて黒髪の少女の前に降り立った。

「見付けた　　っていきなり逃げるな離れるな。エメローダ、いえ、もうエメローダでは無いのね。まあいいわ、とにかく一緒に来なさい。その体……は、いいわ、もう『器』ごとで。エメローダ、一緒に行きましょう」

元々のエメローダの肉体はもう無いし、器ごと持って帰っちゃいましょう。

腕を引っ張る。しかし、エメローダはギャーギャー叫んで大暴れした。

そっか、転生時にエメローダの記憶を無くしたのね。嫌って言うわね。もしかたがないでしょ？　誰が幽霊よ！

「駄目よ。ほら、みんな待っているわ」

泣き落としてもしてみようかと、元両親の声を聞かせてみる。

「エメローダ」

「ああ、エメローダ」

「あなたの世界はこの世界じゃなくて、ここから遠くにある世界なのよ。今なら特別にその器　　体ごと元両親のところへ帰してあげるから行きましょう」

早く行くわよ！

「嫌あ！　やめてやめて！　助けてー！　お母さん、お父さん！　嫌だ！　絶対いかないー！！」

もう！　仕方ない。力づくで　　。

「おい、見つかった」

「は！？　何！？」

「主神がこっちに来る」

「……何ですって!？」

「やばい 怒られる！」

私はエメローダから手を離れた。

「困ったわ……。どうしましょう」

「とりあえずその子を置いて逃げる」

「そうね」

今はそれしかなさそうだ。

私はエメローダに言った。

「いい? この世界はあなたの世界と違うのよ。あなたはあっちの世界に戻らなくてはならないの」

エメローダはギャーギャー叫ぶ。全然聞いてない……。

「もう、どうしましょう」

「まだ小さいから理解できないんだろ?」

「そうか、はあ。」

「……仕方ない。また迎えに来るわ。その時は必ず連れて行く。覚えていて、いつかまた、私はあなたを エメローダを迎えに来るから」

それだけ伝えたら、全力逃走!

暫く必死に走って うまく撒いた?

はあ、危機一髪。良かった良かった。

「こらメイイ！」

「ひゃあ！」

嘘! 飛び上がった後ろを振り向くと、う、主神の姿。懐かしき怒り顔。あの子のことバレちゃったかな?

ビクビクする私に、主神は掌を見せた。何?

「盗ったものを返しなさい」

「盗ったもの……?」

「この世界から何か持って行って遊ぶつもりなのだろう?」

「……………」
あ、誤解してる。そりゃまあ、昔はとて言えないような色々なことをやってたし、そう思われても仕方ないかな？

「メイイ」

「何も持っていないよ」

「うそは重罪だぞ」

主神、疑い深い。そんなに睨まれても…………。

そこでエイプが私と主神の間に割って入った。

「主神、実はメイイは主神に会いに来たのですよ」

え。何それ。

「長い間離れていたら主神の怒鳴り声が恋しくなっちゃって、なあ？」
エイプが振り向いて片目を瞑る。うーん。そういうことにしておくか。

「主神、会いたかったです」

「では何故逃げた？」

「昔の再現です」

「……………」

「会いたかった！」

ギョツと抱きつき主神の胸に頬ずりする。

どうかなあ、誤魔化せた？

フウ…………と主神が溜息を吐いて私の頭を撫でた。よし、やった！

「まったくお前は仕方のない子だ。元気にやっていたか？」

「はい。主神は痩せましたね」

忙しいのかな？

「他の世界の迷惑になるようなことはしてないか？」

「はい！」

「まさかと思うが…………『人』は創っていないだろうな？」

「…………はい？」

主神が私の目を覗き込む。

あれ？ そういえば『人』って創っちゃいけないんだっけ？

なんかそんなことを言われていたような気もする。

「そうだな、いずれお前達が神として成長したと我が認めた暁には、人を創ることも許可してやろう」

.....。

「はい！ 嬉しいです！」

し、知らない。

私は主神に満面の笑みを見せた。

メイイと気の合う仲間達の新しい世界 後編

「おい！ 魂を連れ戻しに行かないのか？」

「うるさいシュラーン」

「俺は『主神に見つからずに魂を連れ戻せる』に陣地半分賭けているんだぞ」

それは大博打だね。懲りない男。

実は何度か行ったんだけど、エメローダの元へ着く前に主神に見つかっちゃって目的を達成できていない。

やばいなあ。何かあってからじゃ遅いし、怒られるのを覚悟で主神にすべてを告白したほうがいいかな。でもそれで主神が怒りのあまり新世界ごと消滅させたら……そんなの嫌よ！

「なあ、メイイ」

ん？ 何？

シュラーンが大きな手で私の頭を撫で回す。

「自分だけでやろうとせずに、みんなの力を借りればいいだろ？」

「え……？」

「例えば俺が美味しい酒で主神を酔わすとか、な」

え、協力してくれるの？

「じゃあ私がお酌しようかな？」

「食べ物なら俺にまかせろ」

「適当に理由を付けてパーティーするか」

「飾りつけなら私達がやるよ」

「じゃあ俺は魂を連れ戻すのを手伝うか」

不意に後ろから聞こえた声に振り向く。みんな、いつの間に来ていたの？

美の神に料理の神、水の神、花の神に剣神その他大勢。

「あ、ありがとう」

みんな！ めんどくさいことが大嫌いなのに、手伝ってくれるなんて嬉しいよ。

私は元気よく拳を振り上げる。

「うん！ じゃあ早速作戦を考えよう！」

「おおー！」

「魂を連れ戻すぞ！」

「おおー！」

「今こそ私達の力が試される時だ！」

「おおー！」

「我らが一致団結すれば不可能は え！？」

ゾクツと悪寒がした。みんなもざわつく。

近付く大きな力……は、えくと。

「おい、メイイ……」

シュラーンの口元がひきつる。

「ハハハ。 逃げる！」

絶対ヤバイ！

「『逃げる』ってどこにだよ！」

「遠くに！」

みんなが叫びながら一斉に走る。

「遊び場の玩具を隠せ！」

「それよりもつとやばいものが！」

「どこに隠せって言うんだよ！ 世界ごと消滅させるって言うのか
！？」

もう無理。絶対隠せない。

うう。主神がこの状況見たらどうなっっちゃうんだろ？

「メイイ」

「うぎゃあ！」

もう見つかった！

目の前に主神がパツと現れる。みんなその場で固まった。

しかも主神が腕に抱えているのは エメローダ！？

主神は腕の中で気を失ったようにぐったりしている少女を私に見せた。うん。成長はしているけど、間違いなくエメローダだ。

以前は別の魂が混ざっていたが、何故か今はエメローダだけの魂に戻っている。

「これは何だ？」

私は視線を逸らす。

「え〜と、主神の世界の少女です」

「ほお？」

「ごめんなさい」

速攻で謝る。だってもう全部知ってるみたいだし、何よりめちゃくちや怒ってるんだもの。

「いろいろと楽しいことをやっているみたいだな」

「いやあ、それほどでも……」

溜息を吐いて、主神はエメローダを私に差し出す。

「え……？」

「本来はもつと早くに亡くなる予定の少女が生きること、周りの者達の運命が少し狂ってしまった。これ以上は我の世界に置いておけない」

「……………」

もしかして、とつくにエメローダのこと知っていた？

私はエメローダを受け取りながら主神をじつと見つめる。

「以前混ざっていた魂は？」

「消滅した。しかし本来より長く維持できたので魂も喜んでいた」

それはエメローダが魂の消滅を食い止めていた、とか？ まさか。

主神が周りで固まる仲間を見回す。

「ところどころ遊びすぎの部分もあるが……まあそれなりにやっているようだな」

そして私の目を見つめた。

「創った命には責任を持ちなさい。特にメイイ」
う。何故私だけ名指し？

「お前に似てお転婆な魂だ。これからはしっかり見守ってやるように」

フツ……と主神が消える。帰った、の？

「……………」

私は腕の中の少女を見た。お転婆な魂……ね。

「それにしても……………」

ろくに怒らず、お咎めもなくなんて。

「主神、もしかしてモウロク……………うひゃあ！」
振ってきた雷を避ける。

前言撤回。まだまだ元気。

なんかよく分からないけど許されたみたい。

私は大きく息を吐いてその場にへたり込んだ。

「ほら、行きなさい」

仲間達が見守る中、エメローダを両親の元にそつと送る。

たとえ姿は変わっても、あなたの両親は気づいてくれる……………たぶん。

光が溢れ、少女は目を覚ます。

あ、いきなり言葉の壁にぶつかった。

そうかしまった、トーラ語は話せないんだ。

うーん、でも……頑張りなさい。障害を乗り越えてこそ得られるものもあるから。ちゃんと見ててあげる。

その日から私はエメローダ改めサツキを毎日見守った。

「それは見守っているんじゃないかって、『覗き』と言っただぞ、メイ」

うるさいエイプ。今ちよっといいところなの。

あ！ 隣の男が急接近。

「あの男と半年以内に結婚に陣地全部」

自棄になった？ シュライン。

陣地が無くなっても知らないよ。

「ねえメイイ、あの子はもう少し『美』に興味を持ったほうが良いのではないかしら？」

「相手の男に朗らかさが足りないわ」

「いや、男はあれで良い」

「サツキは鈍感ね、ちよつと注意してこようかしら？」

「あのままが良いのではないか？」

「あ、あ、あ、サツキが意識し始めた」

「げ。結婚が決まった」

「よし！ やったぞ！」

「男は紳士的すぎる。もっとケダモノになれ。それが男つてものだ」
「あらあら本当。サツキのほうが積極的ね」

あれ？ いつの間にかみんなあの子に夢中になってる。まあ確かに面白いけど、陣地ほったらかしで大丈夫？

何か惹かれるものがあるのかな、あの子には。

こうして私達が見守る中、サツキは少々勘違いしたままみただけど驚くべき早さで結婚の日を迎えた。

「いや、良かった良かった」

そうだね、シユライン。失った陣地が戻ってきて良かったね。

トーラ最古の神殿にこっそり降り立った私達。その前で若い二人が愛を誓う。

沸きあがる歓声。愛し合う二人が走る。

あ、そうだそうだ。結婚のお祝いに祝福でも授けようかな。

私はサツキの魂に直接語りかける。

「サツキ、私は女神メイイです。あなたに祝福を授けましょう」

サツキが驚いた表情で一瞬振り向き　また前を向いて去っていき。

え？ 何故？

「サツキ、祝福を！ サツキ！」

……行っちゃった。嘘みたい。普通、神の声を無視する？

神々を笑い転げさせるなんて、あなたくらいよ。

はあ、もういいわ。サツキに祝福を授けるのはやめた。その代わりに。

「愛に祝福を！ お転婆な魂と共に歩む力を授けましょう」

あんな子また何をやらかすか分からないしね。夫になる者に、サツキを守り繋ぎとめる為の力を授けておきましょう。

「お？　じゃあ特別に俺も、祝福を！」

「じゃあ私達からも。愛に祝福を！」

「愛する気持ちを力にして剣を持って。祝福を！」

「も一つおまけに祝福を！」

……え？　あらら、祝福与えすぎ。でもまあ、たまにはいいかな？

チャマに乗って去っていく二人を見送る。うーんなんだか娘を嫁にやる気分かな？

「さて、帰ろうか」

私は振り向いてみんなに笑う。

頑張りなさい、愛し子よ。

きっと楽しい未来があなた達を待っているから

。

続・サツキとダンの新しい世界 ダン編 序（前書き）

続編には流血描写があります。
苦手な方はご注意ください。

続・サツキとダンの新しい世界 ダン編 序

容赦なく照りつける太陽。

草一本生えぬひび割れた地面に膝を付き、俺は肩で息をする。

すべてを拒否する不毛の大地。

吹き出す汗は一瞬で蒸発し、渴いた舌が痙攣する。

しかしいくら求めようと、水も食料ももう無い。

頭上では怪鳥ネルビンの群れが大きな翼を広げ、俺を狙って旋回を始める。

愛する妻の笑顔を思い出し、折れそうな心を叱咤する。

倒れるわけにはいかない。

俺は力を振り絞って立ち上がり、身の丈程もある大剣の柄を両手で握りしめる。

一羽のネルビンが急降下し、それを合図にすべてのネルビンが俺に向って来た。

その鋭い嘴は、俺の体を突き刺し生きたまま食らおうというのか。

だが俺は……負けない。

必ず、必ず生きて妻の元に帰る。

体を低くし、身構える。

来い。餌になるのはお前達だ。

その肉を食らい血を啜り、俺は生き抜く。

愛する妻、サツキよ。俺に力を！

近づくネルビンを見上げ、俺は口角を上げる。

巻き上がる砂塵、降り注ぐ血の雨と断末魔。

愛より生まれし黄金の焰よ、
剣に宿りて邪を切り刻め。

続・サツキとダンの新しい世界 サツキ編 序

心の中、落とされた闇。

何故？ どうして？ 私を裏切るといふの？

答える存在はいない。

あなたが私の前から姿を消してどれだけ経った？

一人寂しく起きる朝、夢の中さえ会えはしない。

信じている、必ず私の元へと戻ると。でも。

ふと見ると、目の前ある『箱』。

無意識に伸びようとすると手を慌てて引っ込める。

駄目。あれに手を出しては。

決して開けてはいけない箱。もし開ければ……私達はどうなるの？

信じている、必ず私の元へと戻ると。でも。

悪魔が私に囁きかける。開けてしまえ、壊してしまえ、と。

箱に向かって伸びる手。

信じている、でも本当にダンが。

戻ってきて、抱きしめてキスをして、じゃないと私……！

震える指先。冷たい感触。

溢れる黄金の光。

禁断の箱の蓋が開いた。

汚れた手。私に向かって降り注ぐのは涙？ それとも赤い雨？

お願いダン、早く戻ってきて私を 止めて。

続・サツキとタンの新しい世界 サツキ編 序(後書き)

「恋愛＋中途半端ファンタジー」の続編始まりです。

結婚して早くも三ヶ月目に入った。

サツキは変わることなく可愛く面倒見が良く素敵な女性で、こんな素晴らしいサツキと結婚できて俺は本当に幸せ者だ。だが……。

フウっと大きな溜息を吐く。

現在、俺は難しい問題に直面している。

サツキは知らないようだが、トーラでは結婚して三ヶ月目を迎える朝に、愛する妻に贈り物をする慣わしがある。その贈り物を何にするか俺は悩んでいるのだ。

宝飾品にしようかとも思ったのだが、高価な宝石を無造作に転がす様子から、どうやらあまり興味がないらしいと分かる。それに宝飾品では平凡すぎる気もする。

迷ったあげく先程サツキにそれとなく訊いてみたら、『愛、欲しいね。結婚する、ずっと一緒約束するか?』と言われた。

ずっと一緒に居たいとはなんとも欲の無いサツキらしい答えではあるが、三ヶ月目の贈り物にはならない。どうするか……。

すやすやとお昼寝中のサツキの頬に口付け、俺はそっと部屋を出る。

カタヤ夫妻に相談してみよう。二人ならサツキの欲しいものが分かるかもしれない。

長い廊下を歩き、カタヤ夫妻が居るであろう部屋へと行く。

ノックをすると返事が返ってきたのでドアを開けた。

部屋にはカタヤ夫妻の他にもマチルダが居て、俺を見たマチルダは微笑んで軽く頭を下げる。おじ様に勧められ、俺はソファアに座った。

「ダン、サツキはどうした?」

「お昼寝中です」

俺がそう答えると、おば様が「あらあら」と口元を抑えて上品に

笑う。

「それで？ ダンは内緒の相談かしら？」

うむ。何を訊きに来たかおば様は既に分かっているようだ。それならば話は早い。

「三ヶ月目の贈り物が決まらないのです。サツキが欲しがっているものは何かありませんか？」

良い返答を期待して待っていたが、しかしおば様は申し訳なさそうに眉を下げて小さく首を振った。

「あの子は欲の無い子だから……」

うーむ、おば様は心当たりが無いのか。ならばおじ様はと視線を向ければ、こちらも眉を寄せて首を振られてしまった。

困ったな。純粹で無欲なサツキの喜ぶものなどこの世に存在するのだろうか？

「心が籠もっていたら、石ころだって嬉しいものよ」

「それはそうですが……」

だからと言って本当に石ころを贈るわけにもいかないだろう。

どうするべきか、再び思考の泥沼に入り込もうとした時、マチルダが不意に「あ！」と声を上げた。

ん？ なんだ？

マチルダに視線が集まる。

「何か知っているの？」

おば様が訊くと、マチルダは俯いて言いにくそうに手をもじもじと動かした。

どうしたのだ？ いつもはつきりきつぱりのマチルダがこんなに躊躇うなど、もしかしてとんでもなく高価な品なのだろうか？

だが俺も一応伯爵であるし、はつきり言って金ならそこそこ持っている。国宝が欲しいと言われれば無理だが、それ以外なら大抵のものは手に入る筈だ。

「マチルダ」

おじ様が促すように名前を呼ぶと、マチルダは困った表情で俺を

見た。

「今思い出したのですが、以前……ちょうどこの屋敷の完成が間近という頃でしょうか、サツキ様が『芸術的なタマゴ』が欲しいと仰っていました」

「芸術的なタマゴ？」

屋敷の完成が間近な頃といえば、サツキが将来生まれる子供達の教育法について熱心に語っていた頃か。頭の良い多方面で活躍出来る子を育てたいと言っていた。うむ、俺もそう思う。サツキは良き母になるだろうな。

このままサツキの素晴らしさについて語りたい気もするが、だが今はそれよりタマゴのことだ。

芸術的といえば……、考えられるのはアレしかないか。もちろん実物は俺も　　というか見たことのある者など現在には存在しないだろうが、あのタマゴの芸術的な色合いは古い文献に残されているから間違いないだろう。

しかし何故サツキがタマゴを欲しがる？

首を傾げていると、おば様が苦笑しながら言った。

「それは無理ね、危険だわ。サツキはきつと冗談で言ったのではないから」

うむ、確かに危険だ。だがサツキが冗談でそんなことを言うのだろうか？　いつも真摯で真つ直ぐで可憐なあのサツキだぞ。

……やはり冗談とは考えにくいだろう。

しかも俺ではなくマチルダにタマゴが欲しいと言ったのも気になる。もし本当に欲しがっているのなら……。

「まさかダン、獲りにいくつもりではないだろうな」

おじ様の声にハツとする。顔を上げると厳しい視線。

「まあ駄目よ！　結婚したばかりだというのにサツキを未亡人にする気なの？」

サツキに悲しい思いをさせるつもりはない。そんなつもりはないが……。

欲しがっているかどうかを抜きにしても、タマゴなら愛するサツキへの贈り物としてこれ以上のものは無いのではないか。

「ダン」

うむ。金では買えない価値があるもの、それを愛の証として贈れば、サツキだつてきつと喜ぶ筈だ。

俺はおじ様の目を真っ直ぐ見つめた。

「俺はサツキを愛しています。そのサツキが欲しいというのなら叶えてやりたい」

おば様が慌ててマチルダに訊く。

「ねえ、聞き間違いではないのかしら？」

マチルダが青い顔をして、オロオロと視線を彷徨わせた。

「ダン、タマゴなど獲りに行っては駄目だ。あれはもはや伝説、手に入れた者などもう何百年もいないと言われているではないか」

確かに危険だ。挑戦する者さえ何十年もいない。

「ダン」

だが、それならばなおさら俺は……。

「行きます」

「ダン！ 三ヶ月目の贈り物にそこまですることはない！」

そうかもしれない。でも俺は決めたのだ。

「試してみたいのです。俺から溢れるサツキへの愛を」

そう、誰にも負けない愛の力。湧き上がる想い。

大声で叫び、教えたい。ああ。

俺の愛を 新世界中に轟かせてみたい！

「ダン……！！」

大丈夫、俺の愛は何にも負けない。

「必ず生きて帰ります」

その一言でおば様が泣き崩れ、おじ様が怒鳴る。

「馬鹿だお前は！」

そつだ、時に愛は人を馬鹿にする。
サツキ、愛する君に最高の贈り物を用意しよう。
俺は拳を握りしめて立ち上がった。

付き合い始めて二ヶ月目に突入。

ダンってば、かつこよくて優しくて遅しくて、こんな素敵な男性が彼氏なんて本当に幸せ！ なんだけど……。

私は今、難しい問題に直面している。

そりゃあね、まだ早いつて思われるかもしれないけど、でもこれだけいい男なんだから焦るのも仕方ないでしょ？ それなのに。

ぜんつつぜんプロポーズされる気配がない！

なんで？ どうして？

そりゃまだ二ヶ月だけど、私のこと『可愛い、愛してる』って連呼してるじゃない！

やることやってるわけだし、ダンの性格上すぐにプロポーズしてくると思ったのに……。

こないだなんて郵便屋さんに『奥様』って呼ばれたんだよ。

世間は私をダンの伴侶と見なしてるんだよ、事実婚だよ！ それなのに肝心のダンが結婚の『け』の字も言わないってどうなってるの？

私だつてただ黙って待っていたわけじゃないよ。礼儀作法とか字の勉強とか、ちゃんと花嫁修業していたんだから。

立派な若奥様になれる自信はある！

で、さっきダンに欲しいものがあるかと訊かれたから、思い切つて『愛が欲しいな。結婚しようよ。ずっと一緒って約束して』って逆プロポーズしたの。

そ・れ・な・の・に！

ダンってば眉間に皺を寄せて『それはいいから別のものを持ってくれ』って言ったんだよ。

それはいいって何？ 『そのことはまあ置いて』みたいな感じ？

まだ結婚なんて早いつて思ってるの？ それともまだ一人に縛られたくないとか、恋人としてはいいけど結婚となるとちょっと違うかなとかそんな風に思ってるの？

まさか断られるなんて予想外で、ショックのあまりベッドに潜り込んでちよつとだけ泣いちゃったよ。

ダン私の背中をさすってくれて……でも今欲しいのはそんな優しさじゃなくてプロポーズなの！

そのまま寝た振りしていたら、ダンは掛け布団を少し捲って私の頬にキスして部屋を出て行った。

うう、悔しいよう……。私、ダンの奥さんに相応しくないのかな？ 頑張ってるのに、私の気持ち、伝わってないのかな？

ダンは不器用で、見るこつちが胸焼けするほど甘いものが好きで、真顔で愛を語ってくれて、背が高くてかつこよくてお金持ちで優しくて……。早くしないと他の女に取られちゃうかもしれない。

う…………。

嫌！ それだけは絶対駄目！ ありえない！

私のなんだから、誰にも絶対渡さない。

もつともつと頑張つて、『俺の奥さんになるのはサツキしかない。愛してる、結婚してくれ』つて言わせてみせる。

そうよ、こんなことで挫けてなるものですか。ダンを好きな気持ちには誰にも負けないんだから。

い！
ダン、絶対に逃がさないんだから。私の溢れる愛を思い知るがい！

ダンは私のものなの！ つて、世界中に響く声で叫んじゃうよ。

私は拳を握りしめて立ち上がった。

「休職願ひ……？」

三ヶ月目の贈り物が決まった翌日、俺はさっそく隊長の元へ行き、休職願ひを提出した。

「はい。お休みをいただきます」

頷く俺を、隊長が眉を寄せて見つめる。

「何故だ？」

「三ヶ月目の贈り物を調達しに行きます」

隊長の眉間の皺が深くなった。

「休職して調達？ 何を贈るつもりなのだ？」

うむ。では発表しよう。

「タマゴです」

「……タマゴ？」

隊長が首を傾げる。

「可愛い妻が『芸術的なタマゴ』が欲しいと言っているので」

「……………」

固まった。

そのまま隊長はじつと中空を見つめ、暫くしてから俺に視線を戻し、ゆっくりと口を開いた。

「……まさかダン」

「はい」

うむ、漸く分かったようだ。隊長が厳しい表情で首を振る。

「やめておけ。確かにお前は結婚してから急激に強くなった。だがしかし」

「もう決めたのです」

やはり反対されたか。だが愛の為に旅立つという俺の決心は変わらない。

「ダン！ 三ヶ月目の贈り物に命を賭けてどうする！ そんな馬鹿はどこにもいないぞ！」

「ここにいます」

「サツキのためなら馬鹿にもなろう。」

「待て。そうだ、まず陛下に許可をいただいてから……」

「陛下方、それにみんなには、隊長から言っておいてください」

「まだ隊長は何かわめていたが、聞いてはきりがないので無視して、踵を返し歩き出した。」

長く通った道を早足で屋敷へと戻る。声を掛けてくる人々に軽く挨拶だけを返し、屋敷に辿り着いた。

玄関のドアを開けて中に入り、ちょうど掃除中だったのか、箒を持って歩いていたマチルダを捕まえる。

「サツキは？」

「ダン様、お帰りなさいませ。サツキ様なら厨房にいらっしやいます」

「厨房か。また何か作っているのだろうか？」

「サツキは貴族の奥様であるのに厨房に気軽に入り、いろいろと作ってくれる。味はともかく、サツキが俺の為に一生懸命なのが嬉しい。……ただしあの料理だけはもう見たくないが。」

「そうか。俺が帰ったことは言わないでくれ」

「ダン様……？」

「マチルダは何か言いたげな様子だったが、俺は背を向けて廊下を歩き、かつて俺の屋敷があった場所へと行った。」

「途中、空き部屋からランプを調達し、目的の部屋の前に辿り着く。」

「一見、何の変哲もないドア。」

「だが屋敷を改築する時、俺はおじ様にここだけは決して触れないようにと頼んでいた。」

「ポケットから鍵を出し、ドアを開ける。」

「現れたのは地下への階段。ランプに火をとめてその階段を降りていく。すると更にドアがあるので再び鍵を取り出した。」

ゆつくりとドアを開けると、漂ってくるかび臭さ。そして狭い空間にあるのは、無造作に床に置かれた剣のみ。俺はその剣の傍らに立つ。

俺の身の丈程もあるこの大剣は、ワーガル家の初代当主が使用していたものだ。重さはチャマと同じくらい、その上癖が強いので非常に扱いが難しい。だが切れ味は抜群によいのだ。

俺が子供の頃一度、父さんがこの剣を使った事がある。いや、『使ってしまった』と言ったほうが良いか。

当時、剣は家宝として居間に飾ってあった。そして父さんは時々初代当主の武勇伝を語ってくれた。大剣を振り回し、山まで割った初代当主の話を、幼い俺はワクワクして聞いていた。

そんなある日、俺は何気なく『あの剣、父さんには使えないの？』と訊いてしまった。幼い子供の無邪気な質問、だがそれがいけなかった。

闘争心に火がついた父さんは、『勿論扱える。父さんならあの空さえも斬れる』と止める母さんの言葉も聞かずに剣を引き摺るように庭に持っていき、鞘から抜いて根性で持ち上げ……。

一瞬で庭は血の海と化した。

父さんはすっかり自分の首を斬ってしまったのだ。

幸い半分程度しか切れていなかったので、すぐに医者が呼ばれてことなきを得たが、母さんはカンカンに怒って父さんをお仕置きした。

うむ、父さんの首が斬れたことより、その後の母さんのお仕置きの方が子供の俺には余程恐ろしかった。

そして散々お仕置きされた後、真剣な表情で父さんはこう言ったのだ。

『いいか、ダン。今まで黙っていたが、実はこの剣は初代当主の

怨念が宿っている呪われた剣なのだ。剣は血を欲し、持ち主の命さえも奪う。決して父さんの腕が悪かったわけではないぞ』

きつぱり言い切って、父さんはこの剣を地下に封印した。

母さんも『呪い云々はともかく、重く扱いきいこの剣を、子供達が触ると危ないわ』と言い、以来、ワーガル家ではこの地下室には近付いてはならないという決まりが出来た。だが……。

俺は片膝を付く。

タマゴを手に入れるにはこの剣が必要だ。危険な旅になることは予想がつく。普通の剣では太刀打ち出来ない敵もいるかもしれない。

俺は大きく深呼吸をして手を伸ばした。

長い時を経て、ついに大剣の封印は解かれるのだ。

ギョツと両手で柄を握る。そのまま持ち上げようとしたが、想像以上に重い。

なるほど、これでは父さんも怪我をするわけだ。だが今の俺なら……。

愛するサツキを思い浮かべれば力が溢れる。

全身から立ち上る金色の炎のような揺らめき。

それは愛する妻と共に俺が新しく手に入れたもの。愛が生んだ奇跡。

そう、あれはサツキと迎えた初めての朝ことだった。

「こんにちは、奥様」

ダンを送り出した後、さて、これからどうやって結婚に向けてアピールしているのか……なんて庭の花を見つめながら考えていたら、後ろから声がした。

あ、この声は。

振り向くとやっぱり郵便屋さんだった。

「こんにちは」

この郵便屋さんのおじさんって、声が低くて渋いんだよね。顔もダンほどではないけど、まあまあカッコいいし。

そういえば最近気付いたんだけど、トーラって美男美女が多い気がする。美男はともかく美女が多いって不安だな。ダンが誘惑されなきゃいいけど。

ってそれより今は郵便屋さんだ。紐が巻かれたダンボールっぽい箱を抱えているけど何かな？

「奥様にお届けものです」

ん？ 私に届けもの？

郵便屋さんが荷物に貼られたメモを見る。

「ええっと、ミラ・ワーガル様からです」

ミラ・ワーガル……ってダンのお母さんの名前だよ。とゆうことは……。

あ！ 分かった、あれだ！

「重いので中まで運びますよ」

「ありがとうございます」

郵便屋さん好意に甘えて屋敷の中に荷物を運んでもらう。

「あ、そこに置いてください」

玄関ホールに箱を置いてもらい、郵便屋さんが差し出した紙にサ

ラサラつと『サツキ・ワール』と書いた。

難しいトーラの文字だけど、名前だけは最近練習して書けるようになった。

しかも『カタヤ』じゃなくて『ワール』だよ。いつ結婚しても大丈夫のように、ダンの苗字で練習したんだ。

郵便屋さんを見送って、私は荷物を持ちあげてみようとしたけど、本当に重くて無理。仕方ないからヤンを呼びに厨房に行った。

「ヤン、玄関に置いてある荷物をここに運んで」

お願いすると、ヤンは「分かりました」と濡れた手を布で拭いて、荷物を取りに行く。

ああ！ 楽しみ。

ワクワクしながら待っていると、ヤンが荷物を抱えて戻ってきた。

「ミラ様からサツキ様に、ですか？」

「うん。開けて」

「はい」

しっかりと結んである紐をヤンがハサミで切り、箱を開ける。

「あ……」

ブンと匂う懐かしい香り。これはもしかして期待してもいいかも。中に入っていたのは丸い木箱と黒い液体が入った瓶、それに手紙。手紙には『遅くなりましたが約束の物を送ります』と書かれていた。

「何ですか？ これは」

興味深げに見つめるヤンの前で、私は瓶の中身を小皿に少しだけ垂らして人差し指に付けて舐める。

「……………!!」

これは！

小皿をヤンに押し付けて続けて木箱を開けると、中に入っていたのは茶色の塊。

ん？ もしや……。

「こちらは直接指で掬って舐めてみる。

「……………!!」

間違いない。

うう……………。涙がでちゃうよ。今まで数々の失敗をしてきたけど、それも今日で終わり。長かった闘いの日々よ、さようなら。今、新たな扉が開かれた。

ついに、ついに私は手に入れたのだ　　醤油と味噌を！

「これは調味料ですか。初めての味ですね」
許可なく味見していたヤンを人差し指でビシッと指して命じる。

「うどんの準備を！」

そう、今この瞬間、うどんの封印は解かれた。

偉大なる調味料、醤油。その醤油がないゆえに食すことが出来なかった『かけうどん』。

食べられないと余計食べたくなり、ヤンに協力してもらってありとあらゆる調味料で挑戦していたが、試食係のダンが『もう無理だ……………』と遠い目をしたので仕方なく封印していたのだ。

しかし私は醤油を手に入れた。ついでに味噌も。

ありがとう、ダンのお母さん！

「うどん？　久し振りですね。ダン様があまりの過酷さに壊れてから、作っていませんでしたから」

んん！？　壊れたなんて大袈裟な。

まあちよつぴり言動がおかしくなって、肌の色がまるで呪いでもかけられたように紫色に変色して、慌ててお医者様を呼ぶ騒ぎにはなっただけ。

「大丈夫！ これで美味しいのが作れるよ！」

「はい」

ヤンが小麦粉などを準備して、慣れた手つきでこね始める。その姿はまるでうどん職人のようだ。

「サツキ様、うどん、こね終わりました。寝かしに入ります」

「では、だし汁の準備を！」

「はい」

煮干しっぱいのを数種類混ぜて使うと立派な和風だしが出来ることは今までの実験であきらかとなっている。

楽しみだな、うどん。

それにしても本当にラッキー！ あの時何気なく言った一言で醤油と味噌が手に入るとは！

そう、あれはダンと迎えた最初の朝のこと。

それはサツキと迎えた初めての朝のことだった。

目覚めた俺は、隣でまだ眠っている愛しい存在を見る。

可愛い。

なんとなく幸せ。夢にまで見た光景がすぐ目の前にある。

サツキを起こさぬようそっと手を伸ばす。小さな顔、細い肩、そして。

そこでふと、俺は自分の体に起こっているある異変に気付いた。

手が、淡く光っている……？

何だこれは？ 両手とも光っているではないか。

眉を寄せて見ていると、光はフツと消えた。

うーむ、朝日が当たって光って見えただけ、か？ それにしてはおかしな感じがしたが……。

首を傾げつつ華奢な体を抱きしめると、サツキが目を覚ました。

パチパチと繰り返す瞬き。寝起きのぼんやりした顔もまた格別に可愛い。

「おはよう、サツキ」

囁くと、サツキの目に涙が浮かんだ。

ああ、感動しているのか。なんて純粹なんだ。

そう思い、抱きしめる腕に少しだけ力を籠めようとした時、サツキが叫んだ。

「おはよう違うねー！」

ん？ 何だ？

「苦しいね馬鹿！ 痛いのがあっち行く！」

苦しくて痛い！？

な、何ということだ、病気なのか！？ これはいけない！

「待っていてくれ、すぐに医者を呼んでくる！」

俺は慌てて部屋から飛び出し、マチルダとカタヤ夫妻、それに母さんにこのことを知らせた。

その後少々騒ぎにはなったが、まあ結局サツキは疲れが溜まっていただけのようで、俺は母さんとおば様に『配慮が足りない』と叱られ、その日はベッドに横たわるサツキにひたすら謝罪して過ごした。

そうして手が光っていたことなどすっかり忘れていたのだが、翌日の朝、また俺の手は淡く光る。

いや、翌日だけではなくそれから毎日同じことは続いた。しかも気のせいか、光が強くなってきているように感じる。

これはまさか……。

光る手を見つめ、俺の頭に浮かんだ一つの可能性。いや、だが常識的に考えればそんな筈はない。

きつと気にしすぎで光って見えるのだと自分を納得させ、誰にも相談することなくいつもと変わらぬ毎日を過ごした。そして数日後。

その日は結婚してから初めての宿直の日だった。

夕方、寂しがるサツキに口付けて俺は屋敷を出る。

城に着くと、さっそく鍛練場で若い騎士に稽古をつけてやり、それから城内の見回りをした。見回りは騎士が数人の組になり交代で行うので、異常が無ければ途中で二時間ほど仮眠をとれる。

広い城内の担当区域を数時間見回り、それから次の組に交代して、俺は仮眠室の粗末なベッドに横になった。

フウ……と息を吐き、考えるのはやはりサツキのことだ。
今頃は眠っているだろうか？ もしかして泣いてはいないだろうか？

出来れば一時も離れたくはないが、サツキを仕事に連れて来るわけにも行かないので、こればかりは仕方が無い。

サツキ、サツキ……。可愛いサツキ、早く会いたい。

そう心の中で呟いていると、サツキが恋しくてたまらない気持ちになってきた。

寝返りを打ち、掛け布を抱きしめる。

愛している、サツ　ん？　俺は眉を寄せた。

手が光り始めた……。

しかし光は幻のようにすぐに消える。

何だったのだ？　まじまじと手を見るが、今は普通だ。

やはり気のせいなどではない。確実に光っていた。

うーむ、どういうことだ？　何故光った？　俺はサツキのことを考えただ。

ポウ……と再び手が光る。

………！

まさか、とは思いますが、サツキを思うと光るのか？

光が消える。俺はもう一度サツキを思い浮かべた。

小さな顔、つぶらな瞳、可愛い唇、折れそうなほど華奢な体……。

「光った……」

両手から広がる淡い光。

息を呑んで見ていると、隣のベッドで寝ている同僚が、眩しかったのか「うーん」と唸りながら寝返りを打った。

俺は慌てて仮眠室を抜け出し外へ行く。

もし本当にサツキを思うと光るのなら……。

サツキ！ 愛している！

建物の影で、心の中でサツキへの愛を叫ぶ。すると驚くべきことが起こった。

「これは……！」

全身が金色に輝いている！

はつきりと感じる、内から溢れだす力。

これはやはり、そうなのか？ しかしこんな話は聞いたことが無い。

今頃何故……、もしやサツキへの愛が奇跡を起こしたのか？ 愛により眠っていた力が覚醒されたというのか。

試しに自らの意志で右手に力を集めてみる。すると光は少しずつ移動し始めた。

確定、か。

もうそれしか考えられない。愛の奇跡、まさにこれは愛の力。

「サツキ……」

呟いて拳を胸に押し当てた時、背後からバタバタという足音が聞こえた。

誰か来るのか？ 振り向き一応身構える。

「ん？」

こちらに向かつて、まるで突進するように駆けてくる人影。聞こえてくる荒い息遣い、そして 目の前に現れたのは、水玉模様の寝間着姿で枕を抱えた、白く長い眉毛の小さな老人。

「魔法師団長ではないですか」

あまり見かけける機会はないが、この特徴的な眉は間違いない。トーラ国の魔法師の頂点に立つ方だ。

それにしても何故寝巻き姿なのだ？ いや、そういえば魔法師団長は城に住んでいるのだったな。良く見ると裸足ではないか。靴も履かずに走っては、怪我をするのではないか？ そんなことを考えていると、師団長が叫んだ。

「な、何じゃその力はー！」

ああ、なんだそういうことか。この力に気付いてやってきたのだな。さすが師団長だけある。

俺は背筋を伸ばし、師団長にはつきりと言った。

「愛です」

しかし師団長はまったく聞いていない様子で俺の体をベタベタ触る。

……やめてくれ。触られて嬉しいのはサツキだけだ。

「感じたことのない強大な力に慌てて飛び起きて来れば、これはいったい……。なんて強い『金の魔力』じゃ」

うん？ そんなに強いのか？

「トーラに儂以外の『金の魔法師』がいるなど、聞いたことも感じたことも今まで無かったぞ」

それはそうだろう。

「妻への愛により、覚醒したようです。つまりは『愛の力』です」
「覚醒？ 愛？ 何じゃそれは。ふざけたことを言うな」
「失礼な！ ふざけてなどいない。」

「俺は本気でサツキを愛している！ そしてその愛が奇跡を」
「お前、名はなんという」

「うーむ、師団長は俺の話をもとに聞く気はないのか？」

俺は眉を寄せて答えた。

「ダン・ワーガルです」

師団長が首を傾げる。

「ん？ 先日最古の神殿で結婚したあの？」

「はい」

「……………」

どうしたのだ？ 師団長が難しい表情でじつと俺を見ている。

「……………まさかお前、神に会ったのか？」

神に会う？ どういう意味だ？

「いいえ。俺が会って恋をしたのはサツキだけです」

「神に気に入られたのか……………」

「またもや師団長は俺の言葉を無視し、長い眉毛を「ごしごし」と扱いた。そして俺の腕を掴む。」

「取り敢えず一緒に来い」

「一緒に来い？」

「いえ、申し訳ありませんが、そろそろ交代の時間なので無理です」

「いいから来い！ お前の部隊には儂から伝えておく」

「うーむ、なんて強引な。魔法師団長ともなると、権力がある分身
勝手になるのか？」

「しかし」

「来いと言っておる！」

恫喝された俺は、仕方なく師団長に付いて魔法師団が使っている

棟に行き、そこで子供の頃から現在に至までを根掘り葉掘り、なんと朝までしつこく訊かれた。

「……つまり、生まれつき無かった魔力が、結婚した途端覚醒したとお前は主張するのじゃな？　しかも妻を思うと魔力が溢れだす、と」

だからそれは初めから言っているではないか。何度説明させる気なのだ？

「はい、そうです。愛の力です」

師団長が俯いて「うーむ」と唸る。

窓の外を見ると、青い空。そろそろサツキも起きる頃か？　目覚める瞬間を見られないのは非常に残念だ。

「いいか、これは大変　どこを見ておる！　真剣に聞け！」
俺は師団長に視線を移した。師団長は怒鳴ってばかりだな。これでは下の者は大変だろう。

「これはお前が思っている以上に大変なことなのじゃぞ。そもそも魔力を持った人間というのはほんの一握りしか生まれない。それは知っておるな？」

うむ。知っている。

神が、まだ生まれる前の気に入った魂に祝福を与えるとされているが、それは定かではないらしい。

俺が頷いたのを確認し、師団長は続ける。

「通常は腹にいる段階で、母親が魔力に気付く。後から覚醒した者など儂は見たことがない、しかし」

突如師団長は立ち上がり、壁際にある本棚から一冊の古びた本を持って戻ってきた。

「これを見るが良い。大昔の記録じゃ。最古の神殿で神と会った者が、祝福を受け魔力を与えられたと書いてある。妻云々の部分はよく分らんが、やはりこれは神に祝福されたと考えるべきじゃろう。姿は見えなくても声くらいは聞かなかったか？」

「いいえ、覚えがないです」

神の声がどんなものかさえ想像がつかない。

「うーむ……」

再び俯き、師団長は眉を扱く。

まずいな。このままではまだまだ長くなりそうだ。

「妻が待っているのでそろそろ帰っても」

「駄目じゃ！」

顔を上げてきっぱりと言われた。参ったな、途中で放り出した騎士の仕事も気になるというのに。

「金の魔力というのは最高位の魔力だと知っておるじゃろう？」

「はい」

魔力の色は魔力の強さを表す。上から金銀銅その他諸々という順位になっていて、銅は光の加減で時々金に見え、更に茶色は銅に見えることがある。昔、茶色の魔力の者が『俺は銅だ』と言い張る『銅銅詐欺』なるものが流行っていたな。

「金は魔力が強い分扱いも難しい。今トローで金の魔力を持っているのは儂と……お前だけじゃな」

そういえば魔法師団長も金だったな。

「まずは制御法を覚え、それからこの魔力をどう活かすかじゃが」

「

ああ、それなら。

「考えてあります」

師団長が眉を寄せる。

「何？」

俺は腰に下げていた剣を鞘におさまったままの状態で取り、目の前に掲げた。サツキを思うと溢れる力、それを先程手に集めたのと同じ要領で剣に集める。

「うむ、出来た」

意外に簡単だったな。剣の刃が金色に光っている。

「な……！」

「広い世界には『魔法剣士』といわれる者がいると聞いたことがあるのですが、こんな感じで合っていますか？」

魔力を帯びて、きつと斬れ味が良くなっているだろう。試し斬りがしてみたいな。

「ば、馬鹿者強すぎだ！ 力を押さえろ、剣が砕け散るぞ！」

師団長が俺の腕を掴み、光が弱まった。

「やり方は合っておるが、制御を覚えんと危険じゃぞ！」
そうなのか。剣が砕けては困るな。

制御とはつまり、愛情の強さを変えるということか。

うむ。一緒にケーキを食べている時と口付けをしている時は、溢れる想いの強さというか深さが違うかもしれない。どれくらいを想像すれば良いのか試さなければならぬ。

師団長がフウッと息を吐く。

「じゃが魔法剣士……のう。それも良いが、お前はもっと大きな仕事をやるべきじゃぞ」

ん？ 大きな仕事？

「その力を上手く練って使えるようになれば、他の魔法師と協力して川の氾濫や火山の噴火を止めたり、外敵の侵入を防ぐ結界を張り巡らしたり、城を動かしてトーラー一周の旅を楽しんだり出来るようになるのじゃぞ」

うーむ、それは魔法師ならではの大きな仕事だな。しかし……。

「魔法師団に來い」

「嫌です。俺は騎士が好きなのです」

「そつだ、俺は騎士の仕事が好きなのだ。魔法師になるつもりはない。」

「それだけの力を持っていて何を言う！ そつだ、お前さえその気なら次期魔法師団長に推薦してやろつ」

次期魔法師団長？

「結構です。俺は騎士団長を目指しているので必要ありません」

「お前は……！」

師団長は溜息を吐き、眉をイラついた表情で掻きながら立ち上がる。

「よし分かった。陛下に訊いてみよう」

「陛下に？」

「来い！」

本当に強引な方だ。

仕方がないので付いていくと、早朝だというのに『火急の用事』
と言い張って、師団長は陛下の執務室にズカズカと入って行った。

朝、私はとんでもない不快感で目が覚めた。

痛い、苦しい……。

眩しさに顔を顰めつつ状況を確認すると、ダンが両腕で私の体をギリギリと締めている。

何で！？ やばいよ、息が止まっちゃう。

唯一動く指先で解放を訴えると少しだけ腕が緩められ、ダンが呑気な声で言ってきた。

「おはよう、サツキ」

「おはようじゃない！」

骨が折れる！

「苦しいよ馬鹿！ 痛いからあっちに行つて！」

必死に叫ぶと、ダンがやっと離れてくれた。あー苦しかった。

そして憤慨しながら体を起こそうとしたんだけど……。う。無理。痛くて動かない。

もう！ 何してくれるのよ、馬鹿力！

「待っている、すぐに医者を呼んで来る！」

「へ？」

え？ 何？ お医者さん？

「ちよつと待って！」

あー、行っちゃったよ。医者なんて大袈裟な。

それにどうすんのよ、一晩一緒に過ごしたことがみんなにバレち

やうじやない。

……着替えよ。もう、恥ずかしい。

痛む体をゆつくりと動かしていると、バタバタと足音が聞こえて、早くもダンが戻ってきた。

あ、よく見たらダンったら下着姿。

「今、みんなが来てくれる」

「え？」

みんな？ 嫌な予感がしてドアのほうに視線を向けると。

「サツキ！」

「サツキ様！」

「サツキちゃん！」

お母様とマチルダとダンのお母さんが駆け込んできた。

うわ！ 恥ずかしい！ ダンってばもうちょっと考えてよ。

掛け布を引っぱってベッドの中に潜り込むと、お母様が顔を覗き込んでくる。

「サツキ……」

「えっ……と」

目を逸らす。こんな状況お母様に見られなくなかったのに。

「サツキ様、大丈夫ですか？」

「うん……」

私が曖昧に返事をしたその時、ダンのお母さんが厳しい声でダンを呼んだ。

視線を向けると、ダンのお母さんはダンを手招きして目の前に立たせていた。

そして次の瞬間、信じられないものを私は目にする。

「この……馬鹿息子……！」

ダンのお母さんの拳が、ダンの顎を的確に捉える！

ア、アッパー！ 実に見事なアッパーカット！

大きなダンの体がよろめき尻餅をつく。私はもうびっくりしすぎて声も出ないよ。

ダンのお母さんはダンの胸ぐらを掴んで立たせ、お母様の前に引き摺り出した。

「しっかり怒ってください」

お母様が苦笑しながらダンを受け取る。

「そうね。ミラさん、サツキをお願い。ダン、行きましょう」

「サツキ！」

私に手を伸ばしてきたダンの背中を、ダンのお母さんは早く行きなさいと言いながら押した。

スゴスゴと部屋から出ていくダン。

「サツキ、ゆっくりしなさい」

お母様が私の額にキスして、マチルダと共に去って行った。

……うーん、なんか凄いとつかないか。朝っぱらからドタバタで疲れた。なんなのこれは？ ダンの馬鹿。

はあ……。溜息が出ちゃうよ。

ダンのお母さんが椅子をベッド脇に持ってきて座り、そんな私の頭を撫でる。

「ごめんなさいね、うちの男達は本当に……」

そう言いながら、先程アッパーでダンの巨体をダウンさせた人と同一人物とは思えない優しい眼差しで私を見つめた。

「許してあげて」

「はあ、まあ……」

アッパー効いてたみたいだし、ダンの口から赤い液体出た気もするし、許してあげてもいいけど。

頷いた私にダンのお母さんは笑う。

「ねえ、サツキちゃんとダンのこと教えて。どうやって恋が始まったの？」

え！？ 恋！？

やだ、もうダンのお母さんたら、いきなりそんな。私の気持ちお見通し？

「駄目？」

私は首を横に振った。

「駄目じゃない」

そしてダンのお母さんに、ダンとの出会いから現在に至るまでを話した。

「飛んでいった洗濯物を追いかけて、ダンの屋敷に行っただんです。そしたらダンが私に一目惚れして……。翌日からダンは、毎日屋敷に押し掛けてきて、私に愛していると囁いてきました。ダンは私の前では甘えたで、ケーキを食べさせて欲しいと駄々をこねます。服もひとりで着られないし、顔も洗えません。ダンは将来私と結婚したいと大暴れました。こんな子供みたいなダンの面倒を見ることが出来るのは私だけです」

うん。多少脚色した感じはあるけど、上手く伝えられた。

「まあ！ そうなの？」

ダンのお母さんは目を丸くしている。

うん、そうそう。だから私以外に嫁のなり手はないよ、お義母様！

「サツキちゃん……」

ダンのお母さんが私の手をギュッと握り締める。

「これからもずっとよろしくね。ダンを頼みます」

「はい。任せてください」

よっしゃー！ イチコロ！

まあ私のこの状態を見れば、味方せざるを得ないよね。

これでもうダンが何と言おうと、ダンの彼女の座は私のものだよ！
そしていつかは結婚する。うん、完璧なシナリオだ。

心の中でにんまり笑っていると、トントんとノックの音が聞こえてマチルダが部屋に入ってきた。手にはトレーを持っている。

「サツキ様、少しだけでも食べられますか？」

マチルダがトレーの上に載っていた皿を私に見せる。あ、スープだ。

「うん」

頷くと、ダンのお母さんがマチルダから皿を受け取り、スプーンでスープを掬ってフウフウしてくれた。

「はい、あーん」

食べさせてくれるの？

「あーん」

大きな口を開けると、ダンのお母さんがスープをそつと舌の上に垂らした。

うん、美味しい！でも……、欲を言えばこういう疲れた時は、うどんが食べたいなあ。

あつあつのかけうどんがいいけど、それは無理なんだよね。はあ……。

「どうしたの？ サツキちゃん、これは嫌い？」

首を横に振る。

「美味しいけど……、うどんが食べたい」

「うどん？」

ダンのお母さんが首を傾げる。

「私の国の料理。トーラには醤油がないから食べられないんです」

「シヨウユ？」

「豆から出来る調味料です」

そう、豆はあるんだから、もう少し私に知識があれば、もしかしたらトーラで醤油が作れたかもしれないのに……。

「豆……」

ダンのお母さんはスープをサイドテーブルに置いて、顎に手を当てた。

ん？ 真剣な顔してどうしたんだろう？

「豆で作る調味料……。聞いたことがあるわ」

え！？ 嘘！

「私達が今住んでいる場所から更に山をいくつか越えた場所に、変わった調味料があると……」

「……………」

ほ、本当に？ 醤油がある？

「サツキちゃんが欲しいなら、危険過ぎる場所だけど夫に行ってもらいましょう」

「欲しい！」

絶対欲しい！

即答すると、ダンのお母さんは笑って頷いた。

「そう、分かったわ。任せてちょうだい」

やったー！ ありがとう、ダンのお母さん！

もしかしたらかけうどんが食べられる日も近いかも！？ いや、

きつと食べられるに違いない！

妙に確信して、私は拳を握りしめた

「こんな早朝にどうしたのだ、師団長。それにダンと一緒にとは珍しい」

執務室に入ると、机に向かって仕事をしていた陛下が顔を上げ、長い銀の顎髭を撫でながら訊いてきた。

さすが陛下、もう仕事をなさっていたのか。百歳を越えてなお、国を良くしようという意欲の衰えない方だ。

そして執務室にはトーラの次期国王、サラサラと美しい銀髪の第三王子殿下もいた。

「実は」

魔法師団長は身振り手振りを加え、昨夜からのことを掻い摘んで話す。陛下と殿下が驚きに目を見開いた。

「急に魔力が？ そんなことがありえるのか？」

「そうなのです！ ダン」

魔法師団長が魔力を見せると俺に命令する。はあ、仕方がない。俺は大きく息を吸い込んで愛を叫んだ。

「サツキー！ 愛している！」

途端に溢れる力。全身が輝き、陛下と殿下が絶句した。

「これだけの力があるというのに、魔法師団に来たくないと言うのです。陛下、勅命をください」

何、勅命？ そんな、冗談ではない！

俺は慌てて陛下に訴えた。

「嫌です陛下。俺は騎士が好きなのです。魔法師にはなりません」
陛下！ 貴重な魔法師、しかも金の魔力ですぞ！」

陛下は俺と師団長の顔を交互に見て、眉を寄せて唸った。

「うむ、まさかダンに魔力とは」

顎鬚を扱きながら一度目を閉じ、すぐに開けて陛下が真っ直ぐ師団長を見る。

「魔法師の存在は貴重だ。が、本人が嫌だというなら無理強いは出来ん」

「何故ですか!」

陛下は重々しく言った。

「それは職業選択の自由があるからだ」

うむ、そうだ。さすが陛下だ。トーラでは職業は自ら選んで良いことになっている。

だからこそ、第一王子殿下はその美貌を生かして女性相手に過剰な奉仕をする店を経営しておられるし、第二王子殿下は建築現場で汗水垂らして働いておられる。ちなみにうちの屋敷の改築現場でも、第二王子は活躍されていた。

「ダンは嫌なのだろう?」

「はい陛下。俺は騎士をやめたくはありません。これを見てください」

俺は剣を鞘から抜いて掲げ、魔力を集める。師団長が「こら、やめるんじゃ!」と言いながら俺の腕を慌てて掴んだ。

「おお、剣が魔力を帯びた」

感心する陛下に、俺は頷く。

「俺はこの力で更に立派な騎士を目指したいのです」

「なるほど。そういうえばトーラにも昔は『魔法騎士』と呼ばれる者がいたらしい」

「そうなのですか?」

『魔法騎士』か。うむ、良い。ぴったりではないか。

「なんと勿体無い! 陛下、いけませんぞ! ダンは魔法師になるべきです。そもそも力の制御も出来ない者を野放しにするのは危険

ですぞ！」

師団長が俺の腕を握り締めて喚く。

「制御は自分で出来るように鍛練するので大丈夫です」

声が大きすぎて耳がキンキンする。いや、それより本当にそろそろ帰りたい。帰ってサツキを抱きしめ、そして。

パーン！！

突然の音と衝撃。俺はその発生源である自分の右手を見て驚いた。剣が……柄だけになっていた。

しまった。少々想像しすぎたか。

周りを見回すと、砕けた刃が壁に突き刺さり、その上。

「陛下……」

陛下の立派だった顎鬚が、短くなっていた。

飛んだ刃で斬れてしまったのだらう。お怪我はないようだが、申し訳ないことをしてしまった。

「馬鹿者！ だから言ったじゃろう！」

師団長に怒鳴られ、俺は陛下に深く頭を下げた。

「すみません、陛下」

陛下は短くなった顎鬚を触り、小さく首を振る。

「いや、良い。これは事故であるからな。しかし力の制御は出来るようにしなければならんな」

なんとお優しい。若干涙目になられているのが気になるが、許されて良かった。

「ではダンは魔法師団で」

師団長の言葉を陛下が手で制す。

「いや、待ちなさい、ダンは嫌がっている」

「陛下！」

「したがってこうしよう」

陛下が机に肘を付いて指を組み、俺を見上げた。

「ダン、騎士団と魔法師団を掛け持ちしなさい」
掛け持ち？ それは両方に所属しろということなのか？ そんな中途半端な。

啞然とする俺を尻目に陛下は机の引き出しから紙を取り出し、サラサラと何か書かれた。俺は前に進み出て紙を覗き込む。

『ダン・ワーガルを第三騎士団員及び魔法師団員に任命する』

うむ、掛け持ち決定か……。だが陛下の顎鬚も斬ってしまったことだし、これぐらいは我慢すべきなのかもしれない。

陛下はもう一枚引き出しから紙を出された。

『ダン・ワーガルを魔法師及び魔法騎士と認定する』

認定書か。うむ、サツキへの愛により俺は そうだ！ 良いことを思いついた！

「畏れながら陛下」

陛下が「ん？」と顔を上げる。

「この力は俺と妻の愛の証、愛の力。どうせなら『愛の騎士』と認定していただきたいのです！」

うむ、素晴らしいひらめきだ。愛の騎士とは良い称号ではないか。

「……は？」

あまりの素晴らしさに陛下も驚いておられる。

そしてその時、ブホツと言う音が聞こえたので視線を移すと、部屋の隅で殿下が口元を押さえて肩を震わせていた。青い瞳からポロポロと涙が流れているが、それほどまでに感動してくださったのか。大きな咳払いが聞こえ、俺は陛下に視線を戻す。

「正気……いや本気か？」

「正気？ 言い間違えられたのか？」

俺は頷く。勿論本気だ。俺とサツキの愛の深さが良く分かる称号だ。

「そうか……。まあ、好きにするが良い」

陛下はペンを持ち、魔法師と魔法騎士の前に『愛の』と付け足してくださった。そして殿下のほうを振り向く。

「式の準備を」

「はい」

殿下が涙を指で拭って返事をした。

「では後ほど謁見の間で会おう」

式か。帰りが遅くなるが、致し方あるまい。

軽く頭を下げて、俺と魔法師団長と殿下は一緒に執務室から出た。

「やれやれ、魔法師と騎士を兼務とはのう」

師団長が不満げに呟く。不満なのは俺もだが、やっていくしかないだろう。

殿下がおれの肩に手を置いた。

「いやダン、前々から凄いや奴だと思っていたけど、お前は本当に素晴らしい。愛の騎士……。うぶっ、面白いことになりそうだ。速攻で準備するから魔法師団の棟でも待っていてくれ」

ポンポンと俺の肩を叩いて殿下は足早に去って行く。

相変わらず気さくな方だ。歳が近いからか、よく俺にも話し掛けてくださる。

そして本当に一時間程で殿下はすべての準備を終え、俺は『愛の魔法師及び愛の魔法騎士』、つまりは『愛の騎士』となった。

醤油らしきものの有力情報が入って元気が出た私は、スープをペ
ろりと平らげた。

うん。美味しかった。

満足して大きな枕に背中を預けていると、空になったお皿をサイ
ドテーブルに置いて、ダンのお母さんが訊いてくる。

「サツキちゃんの国はどこかしら？」

ん？ あ、そうか、言ってなかったっけ。

「日本です」

「ニホン？」

首を傾げるダンのお母さんに私は頷く。

「凄く遠い国です」

遠いっていうか、異世界だよ。

「そう。どうしてトーラに？」

「えーと、両親が別れて」

「え！？」

あれ？ 凄くびっくりしてるけど、私変なこと言ったっけ？

「まあ、ごめんなさい」

ん？ 何が？

「辛かったわね。これからは私がお母様よ」

ダンのお母さんが私を抱きしめる。

『お母様』……っつて、『お義母様』っつてこと？ 早くも嫁と認め
られた！？

うわ！ なんだか良く分からないけどヤッター！

あ、お義母様もいい匂い。お母様の癒し系の香りと違って爽やかな香りがする。

それにしても、お母様とお義母様、日本のお母さんまで合わせたら母親が三人か。

お義母様は若くて綺麗だから、『ママ』って感じがするなあ。ダンのママだから『ダンママ』とか？

「ママ」

試しに呼んでみると、ダンママは「え？」と言って私の目を覗き込んだ。

「『ママ』は私の国の言葉でお母さんという意味です」

「まあ、そうなの。可愛い子、じゃあ今日から私がママよ」

おお、凄い。ダンママったら違和感なく受け止めた。

「他に困っていることは無い？」

「うん」

醤油以外は、今のところ無いなあ。

「ねえ、ニホンはどんな国が聞いていい？」

「うん。えーと……」

えーと……、あれ？ 改めて説明するとなると難しいなあ。

どう言えばいいのかな？ 外国の人に分かりやすくして興味のある話題かあ。じゃあやっぱりあれかな？

「日本は小さい国で、『着物』って服があって」

「キモノ？」

「着物はえーと……そうだ！ 紙とペンを用意してください」

描いたほうが絶対分かりやすいよね。

ダンママが部屋の外に行って、すぐに紙とペンを持って戻ってきた。

「こんな感じの服」

サラサラと簡単に着物らしきものを描いてみせる。

「まあ。変わっているわね」

ダンママはじっと私の絵を見つめた。

「騎士はいないけど武士がいて」

「ブシ？」

「うん。侍とも言つよ。頭のここを剃って残った毛を結い上げて」

私は続けてちょんまげの絵を描く。あ、結構上手く描けた。大御所芸人さんが演じる殿みたい。

「えーと、こんな感じ」

「……凄い髪の形ね」

そうだよな。何でこんな髪型にしてたんだろ？

「で、この武士のなかでも將軍様が えっと王様？ 一番偉かった。トーラとは全然違う、こんな感じの城に住んで……」

城は描くのが難しいなあ。五重塔みたいになっちゃった。

「城は女だらけで、別名『大奥』と呼ばれています。將軍様は毎日その日の気分に合わせて好きな女を選んで……」

あれ、そうだったか？ うーん、私、日本に住んでいた頃は全然勉強してなかったから知識が微妙だなあ。まあでもいいや、このまま続けよ ん？

んん？ ダンママの表情が険しい。何で？

「好きな女を選ぶ？」

「はい。そして將軍様を取り合つて、女達の鬪いが始まります」

御台所と側室のお世継ぎ争い。足を引つ掛けたり池に落としたり毒を盛つたり將軍様が板挟みになったり……とか？ たぶんそんな感じだったと思う。

「まあ！ なんてこと！」

ダンママが叫んだ。

あれれ、怒ってる？ おかしいなあ。外国の人はこういう日本独

特の文化が好きかと思っただけで違っただけかな。

「駄目よ、サツキちゃん！ そんなことは許してはいけないわ！」

え？ そんなこと言われても昔の話だし……この話はお気に召さなかつたみたいだね。残念。

やめて別の えーと、そうだ！ ダンも大好きなスイーツの話にしよう。

「豆は甘く煮て餡子を作ると美味しいよ！」

急に話題を変えたから、ダンママがキョトンとした。

「アンコ？」

「うん！ 豆を砂糖で煮るの」

「砂糖で？ 豆を？」

私は大きく頷く。

「うんうん！ 日本のお菓子でとっても美味しいんだよ」

ダンママが頬に手を当てて目を見開いた。

「まあ！ 豆がお菓子？」

お！ スイーツには飛びついた。さすが親子だね。武士や将軍や大奥の愛憎劇より餡子の話のほうがいいみたい。

「餡子は美味しいです。ケーキにも出来るし、クリームと合わせても美味しいです」

「豆をケーキに？」

「和菓子って言うのがあって、餡子でお花を作ったりするんですよ。そうだ！ 今からヤンに作ってもらおう！」

ヤンは立派な和菓子職人になれそうなくらい上手に作るんだよ。

「ママ、一緒に食べよう！」

ダンママはもうすっかり頭の中が餡子でいっぱいになったみたい。微笑んで私に頷いた。

「ええ、楽しみだわ」

あー良かった、機嫌が良くなって。未来の義母とは仲良くしてお

きたいもんね。

こうして私は醤油に関する有力情報を聞き、餡子でダンママのハートを驚掴みにして味方につけ、後に醤油と味噌を手に入れたのだった。

屋敷の地下で大剣の柄を握り締め、俺はサツキの愛らしい姿を思い浮かべた。

愛の騎士となった俺ならば、きっとこの剣を上手く扱える筈だ。

「うおおー!!」

金色の光は手から剣へと伝わり、俺は気合と共に力を込める。すると 剣は、軽く頭上まで持ち上がった。

手に入れた……!

思った以上に簡単に手に入った。金の魔力とは強大なものなのだと改めて実感する。

剣を鞘から抜いて振ってみた。うむ、良い感じだ。

魔力を刀身に集めても、砕け散らない。素晴らしい。金色に輝く姿はまさに魔剣だ。

俺は剣を鞘に収めて、魔力を徐々に弱める。金色の光が消えていき、一見魔力を帯びているとは分らないくらいまでになった。持ち歩くにはこれで十分そうだ。

うむ、我ながら力の制御が上手くなった。このことに関しては魔法師団長に感謝だな。

未熟な俺に、師団長は上手な制御法や魔力を練って濃くする方法を教えてくれた。

ただ、練って濃くするというのはまだ完璧に会得出来ていない。

師団長が言うには、魔力をぐるぐるかき混ぜ徐々に力を込めていく感じ……らしいのだが、その加減が難しく時々暴発してしまうことがあるのだ。

一応俺なりに考えたのだが、これはジャム作りと似ている。

昔よく母さんが作ってくれた。鍋にチエルの実と砂糖を入れて火にかけ、そしてかき混ぜながら煮詰めていくのだ。

火加減が強いと焦げて食べられなくなり、ちょうど良いと蕩ける程美味しいジャムが出来上がる。うむ、よく似ているな。魔力を練るのもジャムを作るのも。

この魔力を練って濃くする作業に神への祈りの言葉を加えたものが、いわゆる『魔法』というものになる。魔法は祈りの言葉の種類によって、さまざまな現象を引き起こすのだ。

さて、では剣を衣装部屋にでも片付けて、サツキの元に行こう。

出発は 明日。暫く帰って来られないことを伝えなければならぬ。

地下室から出て衣装部屋に剣を置き、広い屋敷内を歩く。

そして厨房の前まで行くと、サツキの後姿が見えた。

「サツ うー！」

愛する妻に駆け寄ろうとした俺の足が止まる。

サツキが持っているものは……もしかや『ウ・ドン』なのか!?

「……………」
嫌な思い出ししかないのだが、まさか食べると言うのではないだろうな。

俺に気付いたサツキが振り向く。

「ダン、おかえりなさいませねー」

ああ、なんて可愛い笑顔だ。だが今はそれよりサツキの手の中のものが気になる。

「ちょうどウ・ドン美味しいね、出来がいい。食べるね」

……やはりそうか。根性試しをしなければならぬのか。

「美味しーねー」

うーむ……、仕方が無い。腹を括ろつ。

それに、これくらいのことでも根をあげているようでは、明日からの過酷な旅にも耐えられないだろう。

「はい、あーん」

サツキが俺の口元に、ウ・ドンを持つてくる。

「うむ」

俺は気合を入れて、それを口の中に入れた。

いつものように苦く酸っぱく生臭い味が　ん？　おかしい。

「……………」

俺はウ・ドンをじっと見た。

今まで食べたものと見た目は同じだが、味が全然違う。これは…

「美味しい」

そう、美味しいのだ。これはいったいどうしたのだ？　何が起こったというのだ？

戸惑う俺に、サツキが抱きつく。

「ダン、美味しい本当ね？」

「ああ、美味しい」

「嬉しいね」

満面の笑みを浮かべるサツキを抱きしめる。

どうしてウ・ドンが突然美味くなったかは謎だが、そんな疑問も吹き飛ばす程とにかく可愛いサツキを抱き上げた。

結婚してからサツキは益々可愛くなっていく。

正直に言えば、離れるのは寂しいし心配だが、三ヶ月目の贈り物を調達するためには致し方ない。

「サツキ、話があるんだ」

「何ね？」

サツキが首を傾げる。

「実は、明日から暫く仕事で遠くに行かなければならない」
「え？」

サツキは大きな目を更に大きく開いて不安な表情をした。
ああ、なんて愛しい。慰めるように頬を撫でる。

「早く帰って来られるよう頑張るから、待っていてくれ」
俺がサツキの目をじっと見つめて言うと、サツキも俺をじっと見つめた。

暫くそうして見つめ合う。そしてサツキは小さく頷いた。

「うん、分かるね」

サツキ！ 何て物分かりの良い出来た妻だ。

「ありがとう」
必ず生きて、サツキの元に戻る。

「愛している、サツキ」

俺はサツキに心を込めて口付けた。

ダンのお母さん改め、ダンママから手に入れた味噌と醤油に鼻を近づける。

ああ、素敵な香り。

うっとりだよ。これぞ日本！ て感じ。

「味見をお願いします」

ヤンが私に小皿を渡す。

あ、うどんのおつゆが出来たんだ。

「うん。分かった」

熱々のおつゆを火傷しないように慎重に飲む。そして私の体に衝撃が走った。

「こ、これは……！」

濃い目のだしに醤油が加わり、少し濃厚だけど味わい深くてもうとにかく素晴らしい！

ああ、早く食べたい。うどんの生地を寝かしてからまだそんなに時間が経ってないけど……、いいよね！

「ヤン」

「はい。サツキ様、待ちきれませんか？」

ヤンが笑いながら言い、すぐにうどんの生地を伸ばし始める。さすが物分りのいい使用人。

私は早く早くとそわそわしながら厨房内を歩き回った。

そして私の体内時計で十五分後。

「サツキ様、出来ましたよ」

ヤンに声を掛けられ、思わず「やったあ！」と叫びながらうどんに駆け寄った。

うわ、美味しそう。見た目も匂いも完璧。

まずは今までいっぱい実験台になってくれたダンに食べてもらいたいけど今はお仕事だし、もう待ちきれないから食べちゃおう。

ヤンが、職人さんに特注で作らせた箸を私に渡す。よし、では。

「いただきまー……」

「サツ」

背後から聞こえた声に、私は「え!？」と振り返る。

あれ？ ダンだ。

うわ、びっくり。こんなに早く帰ってくるなんて珍しい。しかも信じられないほどのグッドタイミング。

私はうどんの入った小鉢をダンに差し出した。

「ダン、おかえりなさい。ちょうど美味しいうどんが出来たの。食べよ」

ダンがじつとうどんを見つめる。

「……………」

……おい、何故動かない？

うーん、今までの印象が悪すぎるのかな？

「美味しいよ」

私は笑顔でダンの口元にうどんを持っていった。

「はい、あーん」

「う、うむ」

ダンが屈んで口を開けたので、その中にうどんを放り込んだ。

どうかなあ。ドキドキしながらダンの反応を見る。すると……。

「美味しい」

ダンが目を見開く。

うわ！ すっごく驚いてるよ。

私はヤンにうどんの入った小鉢を押し付け、ダンに抱きついた。

「ダン、本当に美味しい？」

「ああ、美味しい」

「嬉しい！」

美味しいうどんが出来て、ダンも喜んでくれて、本当に良かった。ダンが私を抱き上げる。

きゃあ！ ダンったら、そんなに美味しかったのかな？ はしゃいじゃって、可愛いんだから！

恋人同士になってから、ダンは益々可愛くなっていくなあ。かっこいいダンが見せるこの不器用で可愛いところがまた なんて思っていたら、ダンが突然真剣な顔をした。

「サツキ、話がある」

ん？ 話し？

「何？」

「実は明日から、何日か仕事で遠い場所に行くしかないんだ」

「え？」

仕事？ 遠い場所？

「出来るだけ早く帰ってくるから、待っていてほしい」

……えーと、それって出張ってやつ？

まあ仕事なら仕方ないか。出来るだけ早くってことは、きっと二、

三日で帰ってくるんだよね。

「うん、分かったよ」

うーん、私って物分かりのいいできた女。

「ありがとう」

ダンが唇を近づけてくる。

え？ やだ、こんなところで……、もうダンったら！

そっだ、明日は早起きしておにぎりを作ろう。

妻が丹精込めて作った弁当を持って仕事に行く夫……うん、素敵

！ ってまだ夫婦じゃないけどね。

ダン大好き！ 早く出張から帰ってきてね！

私は力いっぱいダンに抱きついた。

旅立ちの朝　。

庭に出た俺は、大剣を背中に背負い、皆に別れの挨拶をした。

「サツキ……」

愛するサツキを抱きしめる。

「行ってくる」

「うん」

サツキは小さく頷いた。

名残惜しいが、俺はサツキから手を離し、おじ様とおば様に視線を移す。

「おじ様、おば様、サツキをお願いします」

おじ様が無言で頷き、おば様は横を向いてそっと目元を拭った。

次に俺はマチルダとヤンを見る。

「マチルダ、ヤン」

「分かっております」

「任せてください」

うむ。この夫婦はカタヤ夫妻同様にサツキを可愛がってくれているから、任せて大丈夫だろう。

サツキが手に持っていた紙袋を俺に差し出す。

「ダン、これお弁当ね。後で食べるがいい」

「サツキ、ありがとう」

早朝、ベッドから抜け出して部屋を出て行ったサツキ。いったい何をしていたのかと思っていたのだが、そうか、弁当を作ってくれていたのか。

健気で可愛くて愛らしいサツキに口付けし、足元に置いてあった鞆に弁当をしまう。その鞆を剣の上に背負い、俺は未練を振り切つて歩きだした。

サツキは何も言わない。きつと声を押し殺して泣いているのだろ
う。

愛するサツキ。必ずタマゴを持って帰ってくる。

心の中で改めて誓いながら俺は門の外に出て、そこで 目を見
開いた。

「皆……、どうして……」

騎士、魔法師、隊長に師団長、第三王子殿下まで居るではないか。
驚く俺に、騎士と魔法師が口々に言う。

「お前、何考えてるんだ」

「可愛い嫁さん残して死にたいのか？」

「お前がいなくなったら楽しみがなくなるだろう！」

「そっだそっだ！」

「ダン！ 行くなよ！」

ああ……、ありがとう。こんなに心配してくれる仲間がいる俺は
幸せ者だ。

サツキと結婚してから、俺は皆と仲良く出来るようになった。そ
して愛の騎士となってからは、更に親しまれるようになった。騎士
達は俺に、

「愛の騎士、愛の力とやらを見せてくれよ」

「愛の騎士、彼女に会いたいから仕事代わってくれよ」

「愛の騎士、腹減ったから『モゲモゲパン』買って来い。一分以内
に買って来れなきゃお仕置きだぞ。いーち、にーい……」

などと気さくに声を掛け、頼ってくれる。それに魔法師達も、

「愛の騎士、お前は才能があるから、特別に凄い魔法を教えてやる。師団長には内緒だぞ」

「愛の騎士、愛の力で魔力を制御してみせろよ」

「愛の騎士、金貸してくれよ。後で必ず倍にして返すから」

と、新参者の俺を温かく迎え入れてくれた。

それどころか今まで話すことのなかった女官や貴族の令嬢からも

「愛の騎士様、私、好きな人がいるんですけど、この恋は上手くいきませんか？」

「愛の騎士様、かつこよくて優しくて背が高くて高収入の彼氏がほしいです」

「愛の騎士様、どうすれば彼の気持ちが私に戻ってきますか？」

などと話し掛けられ、髪の毛を持っていかれる。

どうやら俺の髪の毛を御守りとして持っている、好きな人と両思いになれるという噂が城の女性達の間流れているようだ。誰だ、変な噂を流したのは。

それとはもなく、俺は集まってくれた皆に感謝を述べた。

「ありがとう。だが愛する妻の為に、俺は行かなくてはならない。必ず戻ってくるから信じてくれ」

「ダン……」

「急に仕事に穴を開けて申し訳ない」

頭を下げると、皆が俺の体を叩く。

「ダン、馬鹿野郎！」

「死ぬなよ、ダン！」

痛いほどの力で激励してくれる騎士や魔法師。なんて良い仲間だ。感動していると、騎士や魔法師を掻き分けて、師団長が俺の前に立った。

「この馬鹿者が！」

師団長は、怒りのせいでなのか、プルプルと震えながら俺を怒鳴りつけた。

「まだ制御が六割出来るようになったばかりで、練ることも殆ど出来ないじゃろう！ 無謀にも程がある！ 行くならせめて魔力が完璧に練れるようになって祈りの言葉も覚えてから行け！」

うむ。確かに師団長の言うことは一理ある、が。

「それでは三ヶ月目の贈り物に間に合いません」

「贈り物と命、どちらが大事じゃ！」

「一番大切なのは妻です」

「お前は……！」

カツと目を見開く師団長。

怒らせてしまったか。しかしこれに関しては俺も譲れない。

師団長が大きく息を吸い込んで、再び俺を怒鳴りつけようとする。

しかしその肩を、殿下が軽く叩いた

「まあまあ、師団長落ち着いて」

殿下に言われて師団長が渋々黙り、横にずれる。

俺の前に立った殿下は、真剣な眼差しで俺を見つめた。

「ダン、必ず生きて帰ってこい。トーラ面白化計画には、お前の存在が不可欠だからな」

「殿下……」

時期国王である殿下は、トーラをもっと明るく楽しい国にしようとして頑張っておられる。うむ。帰ってきたら、殿下のお役に立てるように俺も更に努力しよう。

「あとほら、あれを貸してやろう」

殿下が指差す先に視線を向けると、そこには結婚式の時にお借りした、色違いのチャマがいた。

殿下がチャマを呼び、手綱を俺に渡す。

「ありがとうございます、殿下」

貴重なチャマを貸していただけたとはありがたい。これで、旅が幾分か楽になるだろう。

横から師団長の溜息が聞こえた。

「よいか、諦めるのも立派な勇気じゃぞ」

「はい」

諦める気などないが、説教が始まると長いので、素直に頷く。

隊長が師団長の横に立ち、俺の胸を拳で叩いた。

「待っているぞ」

「隊長……」

我が儘な部下を許してくれて、ありがとうございます。

「行ってきます」

俺は敬礼をして踵を返すと、仲間達に見送られ、チャマに乗って旅立った。

続―6ダン編

旅立ちの朝（後書き）

モゲモゲパン……王都で大流行中の、美味さに思わず「モゲー！」と叫んでしまうパン。あまりの美味さに中毒状態になる者が後を絶たず、先日国王が「モゲモゲパンは一日一個まで、叫ぶのは一日五モゲまで」というお触れを出した。

出張の朝　。

え……、それはホンモノですか？

出張に行くダンのお見送りをする為に庭に出ただけど、そこで私は信じられないモノを見た。

ダンが背中にドデカイ剣を背負っている……。

うわ！　そんな大剣、現実に存在するんだ。漫画かアニメかゲームの世界にしかないと思ってたんだけど。

モンスターを狩りに行く系だよね、それ。……いったいなんの仕事しに行くの？

啞然とする私を、ダンが抱きしめる。

「サツキ……行ってくる」

「うん」

大剣が気になって、お別れに集中出来ないよ。

ダンは私から離れてお父様を見た。

「おじ様とおば様、サツキをお願いします」

お父様が頷くと、ダンはマチルダに視線を移す。

「マチルダ、ヤン」

「分かっています」

「任せてください」

なーんか、ちょっと出張に行くだけで大袈裟だな。ダンッたら心配性なんだから。

そう思いながらダンとみんなの別れの挨拶を見ていたんだけど、私はふと、自分が握りしめている物に気付いた。あ、そうだ。忘れるところだった。

手に持っていた紙袋をダンに渡す。

「ダン、これお弁当。後で食べてね」

頑張つて早起きして作ったんだよ。私つてば健気。

「サツキ、ありがとう」

ダンは私にチュツとキスをして、足下に置いてあった、これまたドデカイ鞆　リュックだね、に、お弁当をしまう。

さつきからそのリュックも気になってただけど、やっぱりそれつて旅の荷物なの？　……荷物多すぎじゃない？　登山家もびっくりな量だよ。ちよつと出張に行くだけで、何で？

私の疑問をよそに、ダンはリュックを剣の上に背負う。

……え？　またまたびっくり。剣の上からリュック背負つて大丈夫なの？　そんな事したら、いざという時に剣が抜けないんじゃないの？　いや、そもそもそんな大剣、扱えるの？

あ……、行っちゃった。

うーん、お父様もお母様も、マチルダもヤンも誰もツッコミを入れないという事は、こちらの世界では、あれが出張に行く時の定番の格好なのかな？　やっぱり日本とは違うなあ。異世界恐るべし。

顎に手を当てて唸っていると、お母様が背中から私をふわりと優しく抱きしめてくる。

「サツキ……」

ん？　何？　首を傾げていたら、お父様も右側から私を抱きしめてきた。

んん？　更に、マチルダに左側から抱きしめられ、更に更に、ヤンが私を抱きしめるマチルダを抱きしめる。

………はい？　この状況は何？

重くて暑苦しい。ヤンに至っては、何がしたいのか良く分からないし。

どう対応していいか分からず困っていると、お父様が体を離して私の右手を握って笑った。

「屋敷の中に戻るう」

はあ、うん、まあそれじゃあ戻ろうか。笑顔がぎこちないのは気になるけど。

お母様が私の背中に手を添え、マチルダが左手を握る。そのマチルダの空いている手をヤンが握った。……だからこの状況は何？

「サツキ、部屋に戻ったらお茶にしましょう」

「そうだな。一緒にお茶にしよう」

「サツキ様、美味しいお茶をすぐ準備しますね」

「お菓子もありますよ」

みんな、無理矢理明るくしてる？

もしかして、ダンの出張で私が落ち込まないように、気を遣ってくれてるのかな？ そりゃ寂しいけど、二日や三日ダンが居なくても大丈夫なのになあ。

なんだか良く分からないけど、私はみんなに連れられて屋敷の中に戻り、とびきり美味しいお茶を飲んでお菓子を食べた。

愛するサツキ、そして仲間達と別れた俺は、チャマに乗ってひたすら北西へと走った。

目指すは『絶望の地・タアズ』。

タアズとの境までは、チャマならば三日もあれば着くだろう。しかし問題はそこからだ。

手綱を強く握り、前を見据える。

円形の新世界、それはまるでドーナツのようだ。

ドーナツの生地の部分、そこに小ささまざまな国があり、そしてその真ん中、ドーナツで言えば穴に当たる部分に『タアズ』がある。タアズは国ではない。そこは人ならざる者の支配する地だ。荒れ狂う空とひび割れた大地　邪獣が生まれる場所。

チャマをはじめとする人間との共存を選んだ『聖獣』。
人間を嫌い、対立する道を選んだ『邪獣』。

古い文献によると、もともと同じ種族だった聖獣と邪獣だったが、ある日何らかの事情で仲たがいし、二つに分かれてそれぞれ別進化を遂げたらしい。『何らかの事情』というあやふやな部分が多少気になるが、まあいいだろう。

邪獣は人間や聖獣を見つけると、容赦なく襲ってくる。タアズからトーラへも入って来ようとするのだ。

それを食い止める為の結界を張るのが魔法師であり、時にその結界を破って国に侵入する邪獣を倒し、国民の安全を守るのが騎士で

ある。邪獣が王都まで来ることは滅多にないが、それでもたまに俺も邪獣討伐をしている。

そしてタアズの真ん中、ドーナツの空洞の中心には、聖獣でも邪獣でもない獣がいる。

よく言えば中立、悪く言えば無関心のその獣がいる場所に、サツキが欲しがっているタマゴがある。

きつと険しい旅になるだろう。少しでも気を抜けば、命の危険に晒される場所だと伝え聞いている。

だが愛するサツキの為に、必ずタマゴを手に入れて帰る。そして俺は今、無性にドーナツが食べたい。

屋敷に帰ったらドーナツを沢山作ってもらい、腹一杯食べよう。うむ。サツキに『あーん』と食べさせてもらうのだ。

固く誓って、俺はチャマにもっと速く走るよう命じた。

「サツキとダンの新しい世界」が同人ゲームになりました。

・ゲーム紹介特設ページ

[http://fox.hanagasumi.net/
game/dan/dantop.htm](http://fox.hanagasumi.net/game/dan/dantop.htm)

（ゲーム版作成サークルさんのサイトです。こちらからは女性向けゲーム販売サイトへ行くので、男性は下記URLからの方がいいかもしれません）

・体験版ダウンロード、販売サイト

[http://www.dlsite.com/home/
work//product/id/RJ081895.html](http://www.dlsite.com/home/work//product/id/RJ081895.html)

本編+小話という内容で、販売価格は105円です。

読んでくださっている皆様、そしてゲーム版作成サークル様に感謝
ありがとうございます。

卵に牛乳、溶かしバター、バニラっぽい実を少々。

ダンが出張に行った翌日、私は朝から厨房に籠もってあるものを作っていた。

泡立て器でシャカシャカ混ぜていると、ヤンがやってきて、後ろから私の手元を覗き込んで訊いてくる。

「何を作っているのですか？」

うん？ 分からない？

「うふふ、秘密」

顎に手を当てるヤンを尻目に、私は次の工程へと移る。

えーと、小麦粉もどきに膨らまし粉……おっと砂糖を忘れてた。

ちよびつと多めに入れようかな？ それを円形の型で抜いて、熱した油の中へ。

そこでヤンが漸く声を上げた。

「ああ、ドーナツですか」

「正解！」

「言ってくだされれば、作りましたよ」

うーん、それじゃ駄目なんだな。私を作るからこそ意味があるの。

「これはダン用なの。帰ってきたらすぐに食べられるように、今から準備しているんだよ」

そう説明すると、ヤンは目を細めて頷いた。

「そうですか。ダン様に……」

「うん」

私が唯一上手く作れる自信のあるお菓子がドーナツなの。そりゃヤンが作るものに比べれば味は遙かに劣るけど、ね。でもダンには出張から帰ってきた彼氏を手作りのお菓子で迎えたいという乙女心だけは認めてほしいな。

暫く油で揚げていると、狐色のドーナツが完成！ うーんよく出来た！

驚いたことに、トーラでもドーナツは丸くて真ん中に穴の開いた形なんだよね。日本とトーラって本当に共通点が多いなあ。難しい事は分かんないけど、どっかで繋がりがあるのかな？ 不思議。

次々にドーナツを揚げて、大きなお皿に山盛りになったところで終了！

はあ、さすがに疲れた。大きく伸びをして、首をぐるりと回していると、ヤンが微笑んで私に冷たいお茶を差し出してきた。

「ダン様、きつと喜びますよ」

「そうだよね！ 喜ぶよね！」

ヤンからお茶を貰って一気に飲み干す。うん、一仕事終えた後のお茶は美味しい！

ダンは今頃、頑張ってお仕事してるのかな？

帰ってきたら、お腹一杯になるまでドーナツを食べてね！

昼間はひたすら走り、夜になれば宿屋に泊まる。それを繰り返して三日目の朝。

タアズとの境に程近い村の宿屋で朝食を摂っていると、その宿屋の主人が俺の前に座った。

「なあ、悪い事は言わねえから行くのはやめな」

……またか。

昨夜、行き先を訊かれたので『タアズ』と答えたのだが、それから主人はやたら行くのはやめろと俺に言うのだ。

主人は日に焼けた腕をテーブルに乗せる。

「オレあな、あんたみたいに自分の力を過信してタアズに旅立った者を山ほど見ているんだ。いいか、その誰もが二度と戻って来なかった。あそこが何故『絶望の地』と呼ばれているか分かっているのか？ あんたの目指す中心に向かうに従い、邪獣は強さを増す。今まで見たこともない強い邪獣がわんさか出てくるんだぞ。それに恐ろしいのは邪獣だけじゃねえ」

うーむ、何度同じことを言うのだ。もう返事をする気も起こらない。

「タアズは無法者の集まる地。分かっているのか、兄ちゃん」

分かっている。タアズは何らかの事情で追われる者が逃げ込む地でもある。なぜなら犯罪者がタアズに逃げた場合は、危険なので追わないという決まりがあるからだ。

タアズに逃げた彼等、あるいは彼女達はタアズの中の所々に街を作り、死と隣り合わせの毎日を送っている。

危険だが情報の集まる場所でもあるので、俺も行くつもりだ。それより。

「甘い物は何かないのか？」

この宿の料理はどれもこれも塩辛い。少しも砂糖の気配がしないのだ。

すると主人があからさまに嫌な顔をする。

「ああ！？ 昨日から何度同じことを訊くんだ。男なら塩だろ！」

「そんなことはない。男が甘い菓子を食べてもおかしくはない」

「そんな甘つちよろい奴が夕アズに言っても命を落とすだけだ。帰れ！」

甘い物が好きだから甘つちよろいなんておかしな理屈だ。

理不尽極まりないことを言った主人に反論しようとしたその時、客が入ってきた。

「コウ！ 飯だ」

椅子に座りながら言う常連客らしき男達に、主人 コウという

名らしい は怒鳴る。

「うるせえ！ 今大事な話の途中だ。そこら辺のもんでも勝手に食ってる！」

なんと乱暴な男だ。しかし客たちは慣れているのか、厨房に入ると本当に勝手にいろいろ持ってきて食べ始めた。

主人が再びこちらを向いて、俺の肩を掴む。

「なあ、考え直せ。お前はまだ若い。失ってから後悔しても遅いんだ」

主人の目は真剣で、俺のことを心配してくれているのは分かる、

が。
「しかし」

ドカーン！！

ん？ なんだ？

突然聞こえた大きな音と地響きに、俺の言葉は止まった。

どうも外で何かあったようだ。宿屋の裏の『獣舎』にいるチャマも、激しく咆哮している。

見に行こうかと思つた矢先、ドアが勢いよく開く。

「邪獣だあ！」

叫び声と共に宿屋に入ってくる人々。

邪獣が出たのか。それは危険だ。休職中とはいえ騎士として、退治しなくてはならないな。

「あ！ おい待て！」

引き止める主人の言葉は無視して、足下に置いてあつた剣を掴んで外へと走る。すると。

「あれか……！」

もうもうと上がる砂煙の中、俺の三倍はあろうかという大きな邪獣が宿屋の少し先にいた。

茶色く丸い甲羅に覆われた体と、そこから出ている短い首と手足、尻尾。まるで巨大なシュークリームのようだ。

邪獣は咆哮し、素早く回転しながらその鋭い爪で周りのものを切り裂いていく。この地に派遣されている騎士と兵士が剣と槍で立ち向かっているが、硬い甲羅に阻まれて倒せず、それどころか薙ぎ倒されていた。

こんなに大きくて強そうで美味しそうな邪獣は初めて見た。さすがタアズに近いだけあるな。

「下がって！」

俺は大きな声で騎士と兵士に言い、邪獣に向かって走りながらサツキを思い浮かべる。

溢れる力。鞘から抜いた剣に、それを込める。俺に気付いた騎士と兵士が、驚きながらも後ろに下がった。

「ハアア！」

気合いと共に俺は地を蹴り飛び上がり、そのまま勢いよく邪獣に剣を振り下ろす。

サクツと斬れる感触。

思った以上にあっさりと邪獣は真つ二つになり、砂埃を上げて転がった。

うむ、いい感じだ。剣も、思っていたより手に馴染んでいるな。

これならばタアズでも通じるだろう。

刀身の汚れを払って鞘に収め、俺は二つになった邪獣を見つめる。うーむ、美味しそうだな。だがこれはシュークリームではない。残念だ。

いつかこれくらい大きなシュークリームを食べてみたいものだと思いつきながら踵を返すと、目の前に宿屋の主人が啞然とした顔で立っていた。

ん？ と思いつき周りを見回すと、騎士や兵士、その他大勢も啞然としている。

主人がゆっくりと俺を指差した。

「あ、あんた……まさか、金の魔法師なのか？」

ああ、そうか。金の魔力が珍しいから驚いているのか。

うむ、確かに俺は金の魔法師でもあるが、それだけではない。

「俺は愛の騎士だ」

「……あい？」

「愛」

「愛……」

「愛」

「……」

何故無言になる？ 俺が眉を寄せると、主人がハツとした。

「愛……は、よく分かんが、とにかく凄い。初めて見た」

分からない？ そうか、まあ仕方ない。俺もサツキと出会うまでは『愛』とは何か知らなかったからな。主人もいつか俺のように愛を見つけることが出来るだろう。それより。俺は近くに居た兵士に話しかける。

「何か、甘い菓子を持っていないか？」

「……は？」

邪獣をチラリと見て、中途半端な返事をした兵士に視線を戻す。

「出来ればシュークリームが良いのだが」

ヤンが作ったトロトロのクリームの味を思い出し、思わず垂れてしまった涎を俺は手の甲で拭いた。

何故、膨らまないの？

ドーナツの大成功に気を良くした私は、今夜あたり帰って来るであらう彼氏の為にワンランク上のお菓子作りにチャレンジした。

そう、それはシュークリーム！

だけど焼きあがったシュー皮は、ほとんど膨らんでいない上に焦げて、まるで亀の甲羅のようだった。

「うーん、どこで間違っただろう？」

ちゃんとヤンに教えてもらったレシピ通り作ったはずなのに。指でシュー皮をちよんちよんと突いてみる。

「硬っ！」

なにこれ、カッチカチじゃない。

はあ、どうしようかな。ヤンはお買い物に出かけちゃったし、このまま諦めるのも悔しい。

ここは一つ、失敗の原因を考えてみよう。

膨らまなかったことは、やっぱり膨らまし粉の量が足りなかったってことだね。だとしたら膨らまし粉をもっと加えれば成功するはず。

私は棚から膨らまし粉を取り出して、まだ残っていた生地に加えてみた。で、それを絞り袋に入れて鉄板の上に大きく絞り出す。せっかくだから特大シュークリームにしてみよう。

鉄板をオーブンへ入れ、よし、オッケー。後は焼けるまで暫く待つだけ。

その間、マチルダがくれた雑誌みたいなものを読もうかな。えーと。

「あなた、食べる？ みんな、言う、も、げ」

うーん、難しいな。この『も、げ』って部分が良く分からない。ハンバーガーみたいなのが描いてあるけど何か関係あるのかな？ 分からないから他のページを見てみよう。

あ、これはもしかしてファッション特集かな？ ドレスの絵がいっぱい描いてある。

ふむふむ、おそらくこの清楚な感じがする若草色のドレスが、今の一押しなんだね。

なるほどねー。確かにちょっと可愛いかも。お母様におねだりしようかな。これに合わせてこのリボンもいいな、それから……。と雑誌に夢中になっていて、ふと気付けばそろそろシュー皮が焼ける時間になっていた。

「ちゃんと出来たかな？」

ちよっぴりドキドキしながらオープンを開けてみると。

「うわ！ 膨らんでる！」

どっからどう見ても立派なシュークリームだよ！ やった、大成功！

大きなシュー皮を火傷しないように気をつけて取り出……ん？

「……………」

なんか、やけに硬くない？ 試しに拳で叩いてみる。

コンコン。

何？ このドアをノックした時みたいな音は。

……嘘でしょ。見た目は完璧なのに。ていうか、むしろどうやったらこんな硬いシュークリームが出来るのよ。

はあ、落ち込む。頑張ったのにな。どうしよう、このシュークリームもどき。捨てるのは勿体無いなあ。

そう思っていたら、ちょうどそこにヤンが帰ってきた。

「ただいま戻りました、サツキ様。美味しそうなシュークリームが出来上がりましたね」

う！ ヤンの言葉が心に刺さる。

「これ、見た目はいいんだけど、硬いんだよ」

私の言葉にヤンは首を傾げた。

「硬い？」

そしてシュー皮を触り、驚いた。

「これ、どうやって作ったのですか？」

ヤンに教えてもらった通りに作ったよ！ …… たぶん。

「捨てるしかないかな？」

「そうですねえ。いやでも、小さくしたら料理に使えるかもしれません」

そう言いながら、ヤンは棚から包丁を取り出してシュー皮に突き立てた。

「硬い！」

ところが、僅かに切れ目は入ったものの、切れる気配はない。どんなに硬いのよ……。

「サツキ様、ちょっと待っていてください」

眉を寄せ、ヤンが厨房の勝手口から出て行く。おーい、何処行くのー？ って思ってたらずぐに戻ってきた。戻ってきたけど。

何故、斧を持っているの？

「サツキ様、離れてください。行きますよ」
ヤンが斧を持ち上げ、シユー皮に向かって振り下ろす。

パカーン！

うわぁ、いい音！ じゃなくて……でもシユー皮は綺麗に真つ二つになった。ヤンはそれを更にいくつかに割り、額の汗を袖で拭いた。

「サツキ様、これなら器として利用できそうです」

え？ 器？ さつきの『料理に使えるかも』ってそういう意味なの？

シユークリーム作ったはずが器になりました て、何それ。

はぁ、でもとても食べられるような感じじゃないから仕方ないか。ダンに大きなシユークリーム食べさせてあげたかったなあ。

……そうだ！ せめて可愛いドレスを着て、ちよっぴりお化粧とかもして、帰ってきたダンに『お帰り』って抱きつこう。

それから……あ！

「ヤン、シユークリーム作って！」

シユー皮の器にシユークリームを載せよう。うん、自分で作るのは諦めた。

「たくさん作ってね」

私はヤンにそう言って、ドレスを選ぶために部屋に急いで戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6396/>

サツキとダンの新しい世界

2011年9月16日23時32分発行